聖男子マリア様　～極悪天使と悪魔の使い～

向上冴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖男子マリア様　～極悪天使と悪魔の使い～

【Ｎコード】
Ｎ４３９８Ｓ

【作者名】
向上冴香

【あらすじ】
ある日突然超絶美形の天使様がやってきて。
おまえは聖母マリアの生まれ変わり。
これから寝食を共にし、悪魔の軍団と戦うのだ。
なーんてことをおっしゃった。
っつーか、オレ、普通の高校生なんすけど。
ドＳな大天使ミカエル様とヘタレ高校生テンシンの愛と涙の冒険コメディです。ちょっぴりＢＬ要素ありです。

はじまり

「マリア」
その声を聞くのは初めてのはずなのに、どこかいつも懐かしいと思う。
「マリア、あなたのお腹には神様の子供が宿っています」
でも、いつもいつも思うのは、こんなんじゃなかったよね実際は……というところ。
かなり改ざんされているような気がする画像に毎回のごとく首を傾げる。
「マリア、聞いているのですか？」
苛立ちを含んだ声が飛んできて、傾げていた首を真っすぐに戻す。
目の前にいるのは黄金色に輝く髪の超絶美形。
女性よりも遥かに美しい男性の顔立ちをしたクルクル巻き毛の、それこそいつの王朝時代だよッとツッコミを入れたくなるような御方が、眉間に深い皺を刻みこんでこちらを睨みつけている。
背中には見たこともないような大きな純白の羽を背負われた超絶美形は、見るからに神々しいオーラを放っていらっしゃる。
いや、それよりさ。
もっと重要な問題があった気がして、もう一度深く深く考える。
なんて言われたよ？
『お腹の中に神様の子供』
なんてことをおっしゃらなかっただろうかと……がっつり混乱中。
超絶美形が何者か……なーんてことはなんとなく。
想像は出来ちゃうんだよね。
真っ白い羽を持った人なら、いろいろ見てきたことがある。
とはいえ、それは空想というかファンタジーというか。
漫画でも絵画でも。
リアルな世界ではお目にかかることはないであろう存在。

そう『天使様』。
超絶美形の天使様であろう方がおっしゃる名前はあまりにも、現実を帯びておらず。
はたまた『この人頭おかしいんじゃないの？』とツッコミたくもなるけれど。
「はい、分かりました」
この場を丸く。
穏便にやり過ごすためにそう答えた。
だって今余分なツッコミとか質問とかしようものなら、この目の前の御方に瞬殺されるような恐ろしいほどの殺気だけは空気読めないほうでも分かるわけで。
返答に対して天使様といえば。
ニコリともせず。
淡々とという表現がぴったりはまるしぐさで『白い百合』の花を差しだした。
『純潔』
を意味する白百合の花は『聖なる乙女』の象徴。
それを受け取って一応にっこりとほほ笑んでみる。
これが世にも有名な『受胎告知』。
救世主イエス・キリストを聖母マリアが身ごもったという場面。
でもさ、ここに隠された事実があるのをどれだけの人が知るだろう？
『っていうか、私』
表で笑いながら、聖母マリアは思っていた。
『いつ、神様とHしたんだっけ？』
なんてことを……ね。

大天使ミカエル降臨？　☆予感

今日もまたいやな夢で目が覚めた。
超絶美形が一人オレの前にひざまずく。
２枚のそれはそれは、大きな白い羽を広げた天使様らしきその人はこう名乗った。
『ミカエル』
だと……
『ミカエル』っていう名のつく天使を知らないわけがない。
小さい頃からよく聞かされていた天使様のお名前で『大天使長様』だということもよく知っている。
そんな尊い御方から
『時間ですよ、マリア』
どういうわけかオレは知らない女の名前で呼ばれている。
ってことはだ。
オレは夢の中では『女性』。
ということらしい。
透き通る輝く黄金色の長い髪を、キレイな名古屋巻きにした天使様。
ミカエル様は腰も砕けるような？
いやいや、なんかこう背中がゾゾッとするような。
なんとも言えない『あま～い』ほほ笑みを浮かべていた。
あれが男で、オレが女なら多分瞬殺なんだろうね。
恐ろしいほど攻撃力の高い笑みを浮かべて、手を差し出した天使様ですが。
オレはその手をどうしてもとれなかった。
取りたかったわけでもなんでもないんだけども。
止められちゃったら仕方ない。
『ちょっと待ちなさい！！』
そう言って、頭の中で女の人の声がリフレイン。

天使様のその手。
その笑顔。
なんだかハンパなくヤバい予感。
マジでノーサンキューな臭いがピリピリと、オレのうなじに走るのも事実。

そんなオレに天使様はキレたのか。
笑顔をやめて、ガン見して。
『素直には応じないとはイイ度胸だ』
と、天使らしからぬお言葉を述べられた。
天使ってこんなんなの？
そう自問自答するより早く、天使様はペロリと整った美しい唇をひとなめし、イジワルな笑みを浮かべる。
『おまえがそう出るのなら、私にも考えがある』
その顔に背筋をゾゾゾっと虫がはう。
何て顔するのさと誰かあの人にツッコんでほしいくらい。
ほんとに悪魔としか言いようのない顔でオレは思わず後ずさりした。
『待ってよ』
と心の中で叫んでみる。
だってさ、オレは悪くないんだもん。
知らない女の人がどこかから『待て』って言うもんだから『待った』だけでさ。
ぜーんぜん、他意も悪意もないんすけど……
心の声が聞こえたのか、聞こえないのか。
いや、これはたぶん聞こえてない。
っていうか、聞いてない。
がっつりそう思えるようなお顔で天使長様はこうおっしゃった。
『すぐに行くから待っていろ！』
夢だと気がついたのはこのすぐ後で。
１２月だってのに、全身汗びっしょり。

そして傍らに落ちている物を拾い上げ、急に寒気を覚えた。
手には真っ白い、真珠のように輝く羽根が一枚。
朝日に照らされキラキラと。
恐ろしいほどキラキラと輝いていた。
「なんか……世紀末？」
平和な日々の終わりがヒタヒタと、音もなく近づいてくる。
そんな予感しまくりの朝だった。

大天使ミカエル降臨？　☆めっちゃついてない

手の中で、真珠色の羽根が踊っている。
クルクルクルクル。
輝く光を放っていて、それはそれはもううっとりするほど美しいんだけど。
「なに神妙な顔しとるん？」
羽根の先に見慣れた健康的な男前がにょきっと顔を出した。
冬にもかかわらず、小麦色に焼けた肌。
真っ白な虫歯ゼロの、歯並びの良さをアピールするように、親友。
もとい悪友は、オレの手からひょいっと羽根を盗んでいった。
「なんなん、これ？
きっれいーな鳥の羽根？
どこでこんなん拾った？」
「枕の横」
「はぁ？　わけわからんなぁ」
「それはオレのセリフ」
オレ、天林寺真理矢（てんりんじ しんや）。
１６歳。
どこにでもいる普通の高校男子。
勉強ができるって言えば、これも普通。
良くも悪くもない。
じゃ、運動。
これもそこそこ。
悪くない。
身長も体重も平均値。
ついでにいうなら、見た目も中の上。
目立つわけでも、影がうすいっつーわけでもない。
とにかく普通。

それ以上でも以下でもないっつー、悲しい男子高校生。

でも一つだけ。
人より優れたもんがある。
才能と言えば……言えなくもない。
そう、オレ。
異常に霊感が強い。
それこそうっすら見えるとかいうレベルのお話じゃない。
聞けるし、話せるし。
霊能者も真っ青な……そういうレベル。
ま。
これはもう、家柄的に仕方ないお話で。
オレの苗字のとおり、オレんちお寺を経営してます。
親父はもちろん住職で。
家の敷地にはでっかい墓地もある。
小さい頃からそこを遊び場にしていたオレ。
墓地を怖がる人は多いけど、あそこは霊だらけ。
おばあちゃんやらおじいちゃんやらが、ワイワイがやがや。
『ほれ、そこの坊主。まんじゅうでも食ってくか？』
とか声掛けられて、オレもありがたく頂く。
っつーか、それ、墓に供えられてたもんじゃん！！
なんてツッコミは幼いオレにはなくて。
それが死んだ人っていうのに気がついたのは小学生入ってからのこと。
それまではみんな生きていて元気よすぎだろ？くらいにしか思ってなくて。
ある日友達に『誰と話してるの？』と聞かれ、普通の人には見えない、聞こえてないことを知り。
ま、そんな能力のせいで、友達っていうのも限定されていて。
いやぁ、思えばオレの幼少時代ってばあんまりいい思い出がなかっ

たというか。
意外と可哀そうな子供だったと思われる。

時々、見てはいけないものまで見えるから辛いこともあったなと今にして思うけど、見えちゃうものは仕方ない。
具体的に？
それはちょっと……口に出して話すにはエグすぎるから言わないでおく。
自分の特異体質っていうのはさ。
最近テレビでスピリチュアルカウンセラーとか流行ってるみたいだから。
これはありなんだろうなと思う。
問題は、決まってみる夢が『聖母マリア』にかかわることだってこと。
親父はさ。
坊主のくせに心は「キリスト教信者」だとか。
檀家が聞いたら怒られそうなことを平気で口走っていたが……
オレは宗教にまったく興味なし！！
家はアニキが継ぐだろうし、アニキがごねても弟がいる。
そんなオレがどういうわけか、夢の中で必ず
『マリア』
と呼ばれる。
マリアだよ、マ・リ・ア。
その名前で誰思い浮かべるよ？
オレは一人しかいないんですけどね。

たまに自分の名前を間違って「マリヤ」と呼ぶやつがいる。
ま、これも仕方ない。
オヤジのヤロー。
なぜかオレの名前だけ当て字にしやがったんだ。

生まれる前に天使様からお告げがあって、名前は『マリア』にしろとかなんとか。
熱狂的なキリスト教ファンであるオヤジがまた、このわけのわからんお告げっちゅーのを真に受けやがってこういう名前になったんだけどもさ。
でも、夢の中で、オレはオレじゃない。
つまり、この平均的な高校生のオレじゃなく。
瘠せぎみ美人の外国女性になっている。
特徴はルネサンス絵画にあるような女性？
って言ったらわかってもらえるかな？
茶髪のなんかゆるーいパーマに。
はっきりした目鼻立ち。
品があって。
とにかくそんな感じ。
で、いつもその人はオレの思考とは別に何かを考えてる。
神様ってどんな顔していたかしら？
私、会ったことあったかしら？
っていうか、救世主を生むって？
神様の子供って卵で産むの？
一応、人ってことかしら？
常に頭の中はこんなんでかき乱されているわけで。
つーか、しらねぇよッと心の中では思いっきり返答してはいるものの。
当の頭の中の人ってば人の話をことごとく無視しているっていうか。
聞こえてないみたいなんだわな、これが。

で、その人はいつもオレの頭の中でぶつぶつ言い続ける。
オレに同意を求めてるってわけでもなく。
オレは頭ン中、ザワザワしっぱなしのまんま。
わけの分からない夢を見続ける。

これってなんだ？
前世の記憶ってヤツか？
んじゃ、オレってば、前世は『聖母マリア』だったってこと？
転生にするにしても。
マリア様もなにも男にならなくっても良かったんじゃねぇ？
もしもだ。
もしも、もう一度。
『救世主』を『生む』んだよなんてこと言われても。
男のオレには絶対に不可能なんだし。
ま、神様もそんな無茶させるわけないよな？
と……思いたいんだけど。
なんか嫌な予感がおさまらない。
なんつーか、全部、この羽のせいだと思うんだわ。
この際だ。
この羽むしってやろうかな？

溜息をひとつ。
親友の余（あまり）隼人（はやと）は、そんなオレを見たあと、オレの机の上の物に目を向けた。
「めっずらしー。
勉強……しとったん？」
机の上に広げられた世界史の資料集。
そこにはかの有名な『受胎告知』の写真が載っている。
白いユリを持ち、驚きに満ちた表情で、ひざまづく大天使ミカエルを見つめる。
彼女の名はそう。
『聖母マリア』
「なんでキリストって生まれたと思う？」
「……おまえ、頭うった？」
だってさ、マリアは神様とはHしてなかったんだぜ？

「なんでもない」
ふと隼人から眼をそらし、窓の外を見る。
「あああああああ！！」
「真理矢（しんや）、どないしたん？」
これは夢か？　幻か？
見覚えのある黄金色の髪。
見覚えのある名古屋巻き。
見覚えのある絶世美女のお顔立ち。
見覚えのあるすらりと長い足に、しなやかそうな手。
見覚えのある王子様スタイル。
見覚えのある2枚の真珠色した羽。
そう、あの羽。
宝塚スターも真っ青な、ゴージャス羽をしたあの方が。
窓の外に浮かんでいらっしゃる！！
恐ろしく美しく。
恐ろしくこわーいほほ笑みをたたえて。

そして、またゾゾゾっと背筋に虫がはっていく。
一歩、二歩。
ゆっくりとオレは後ずさる。
やな予感。
やな予感。
やな予感。
めっちゃやな予感！！
「おいっ、こら！！　真理矢、おまえどこ行くん？　授業始まるぞ！！」
背中から隼人の声が飛んでくる。
そんな場合じゃないんだって！！
霊感強いから、そういう類は見慣れてる。
今日だって、朝から死んだじーちゃんとばーちゃんと、それから近

所のアロハ大好きだった弥一郎（やいちろう）じーさんとに囲まれて楽しく朝食囲んじゃったりしてる。
だから、幽霊なんて全然、まったく、これっぽっちも怖くない。
むしろ、超親近感！！
だけど、あれはやばい！！
どういうわけかもわからない。
それくらいやばい！！
『早く逃げて！』
またしても頭の中に声が響く女の人の声。
そんなこと、あんたに言われなくたって逃げるっつーの！！

「逃げ足だけは人一倍というところだな」
頭上で響いた声に、俺の足に急ブレーキがかかった。
オレ、全速力で逃げたよな？
なのに今、すぐそこで声がしなかったか？
「逃げてもムダだから、やめておけ」
今度は耳元で囁かれ、オレは思わず振り向いた。
唇が触れるか、触れないかくらいのギリギリのところに超絶美形男子の顔がある。
「うわぁぁぁぁっっっ！」
その場から飛び退る。
超絶美形はおもしろそうに、口の端を吊り上げて。
くつくつ喉を鳴らして笑って見せた。
たぶん。
目の前のこの超絶美形男子は、夢の天使様に違いない。
聖母に受胎告知した。
かの有名な「ミカエル」様だ。
天使なのに、なんだってそんな怖ーい笑顔してんだよ！
あー。
これって絶体絶命じゃん！

逃げ場なしってヤツじゃん！
お願いです、神様。
どうか迷える子羊をお救いください！！

「時間だと言っただろう？
おまえが素直に従わないから、わざわざ来る羽目になったのだ。
どれだけの怒りか、わかっているな？」
だから、そんな悪魔みたいな顔してるのね～。
って、悠長に分析してる場合かよ、オレ！
あんた、怒る相手間違ってる。
オレは言われただけなんだから。
頭の中の知らない女に
『待て』
って言われただけなんだって。
「それはこっちのミスだと言いたいのか？」
は？
ミスってなに！？
オレ、別にそんなこと言ってないじゃん。
っていうか、オレ、声出して会話してないけど。
頭で考えてること、全部聞こえてる？
恐る恐る「ミカエル」様を見る。
彼はツンと顎を突き出しながら「正解」と答えてくれた。

「ちなみに、おまえの言う『知らない女』の声も聞こえている」
聞こえてるんなら、そっちの女に直接話せばいいだろうが！
オレ、被害者じゃん！
っていうかさ、オレになんか憑いてるのか？
もしかして『聖母マリア』の霊？
そんな外人の霊がつくようなとこ、行ったことあったっけ？

思い出すかぎりでは『ＮＯ』だ。
だぁっっ！！
めんどくせーことはお断りだって～！！
「おもしろく育ったな、おまえ」
さっきから思ってるけど。
天使ってのはこうも偉そうなものなのかな？
高圧的っていうか。
礼儀知らずっていうか。
性格悪いっていうか。
あ、やべっ。
これも全部聞こえてるんだっけ。
「高圧的で礼儀知らずで性格悪くて、悪かったな」
ますます怒ってるじゃん。
とって食われちゃっても文句言えない状況っぽい。

「おい、いつまでもくだらんことをごちゃごちゃ言ってるな。
こっちは相当忙しいのにその時間を割いておまえのところまで降りてきたのだ。
それと、立場を理解して、おまえも礼節ある態度で迎えろ。
分かったな？」
礼節ある態度ねぇ。
どうすりゃいいんだ？
そもそも、突然窓の外に現れて、手なんか振るそっちが悪いんじゃねぇ？
「もういい。
用件を言う、マリア」
「オレ、真理矢ですけど。
天林寺真理矢」
「分かっている。

今から説明してやるから、黙って聞け」
「はぁ、そうですか」
聞けと言うのならば聞きましょうよ。
っていうか、めんどくさいのはない方向でお願いしたいけど……嫌な予感は益々増すばかり。
天使様は背筋を伸ばし、凛とした口調でこうおっしゃった。
「聖母マリアの生れ変り、天林寺真理矢。
悪魔サタンの復活の日が近づいている。
神の子とともに。
悪の軍団と戦いなさい」
えっと……今、なんかとんでもなくおっそろしいこと
言ってのけなかったか、この人？
もとい天使様。
「あの……オレがなんだって言いました？」
これは聞いちゃいけないって。
そんな声がなんとなくだけど遠くからしたような、しないような。
そんなことに構う事なく。
目の前の悪人顔負けの天使は、背筋が凍るほほ笑みとともに。
「聖母マリアの生れ変りだと。
おまえの耳は飾り物か？」
そう、はっきりきっぱりと。
おっしゃったのだ。
聞かなきゃよかったなんて後悔は今更なんだけど。
ほんとにほんと、今更すぎることなんだけども。
なんかめっちゃツイてない気がするのは、オレの気のせい？

大天使ミカエル降臨？　☆名古屋巻きの天使様

オレ、今日から仏教徒になろうかな。
身も心も仏様に仕えたら、
こんな悪夢から救いだしてもらえるかもしんないな。
「くだらんことを考えるな」
そう言いながら、名古屋巻きの金髪（あくま）天使こと、ミカエル様はオレの頭をハリセンで殴った。
っていうか。
最近売れてる芸人だって、ハリセンツッコミなんてされないっすよ。
なーんて進言はできるはずもなし。
「『宗教』など、くだらん話だ。
神教の神も仏も、我らが神の血縁なのだから」
天界。
というところにお住まいだったミカエル様はおっしゃった。
そのお言葉どおりなのだとすれば。
『天照大神』も『お釈迦様』もみーんな、親戚で、親族ってことになる。
つーか。
親族で宗教法人経営してるってこと？
だったら、なにも人間使って悪魔と対戦することないじゃん。

なぜオレが。
なぜ無関係であるオレが。
悪魔の軍団とかなんとか、わけのわからんものと戦わないといけないんだよ。
だいたい、オレの特殊な能力って。
人様よりもかなーり強い霊感だけだっつーのにさ。

「それが必要なのだ、バカモノが」
ミカエル様はそう言うと、オレの額をコツリと突いた。
それから、2枚の素晴らしい羽根をたたむと、オレの前にふわりと降り立った。
瞬間、地を突き上げるような突風が吹き、オレは数メートル吹き飛ばされる。
あと数センチでコンクリートの校舎の壁に大激突。
というところで、しなやかな手につかまれ、引き戻された。
「今死なれては困る」
って、アンタのせいで、オレ死にそうになったんすけど？
「えええええっっっ！！」
目の前にいるミカエル様に、オレは目が飛び出すかと思った。
いや、絶対にコンマ何秒かは飛び出していたに違いない。
学生服を着ている。
正確に言うなら、オレとおんなじ恰好をなさっている。
詰襟の学ラン。
もちろん、宝塚バリのゴージャス羽飾りなんてものもなし。
ああ、天使様。
あんたってやっぱりなんでもできちゃう御方なんすね。
こんなこと、簡単にできちゃうんだから。
言うこと聞かないオレなんて、この世から瞬殺、抹消はスイッチボタン押すくらい楽々なんでしょーね？

「もちろんだ」
ニッコリ。
ああ、悪魔のほほ笑み。
もとい。
天使のほほ笑み。

「っていうか。
質問よろしいですか？」
一応、大天使長様なんで。
オレは丁寧にお訊ねする。
アロハ好きの近所のじーちゃんの幽霊と話すときと同じってわけにいくはずもない。
っていうか、天使ってプライド高そうじゃん。
いや、この目の前の天使様だけがこうなのかもしれないんだけど。
「おまえ、いますぐ殺されたいのか？」
ミカエル様は、右眉だけピクリと動かしてオレを見た。
さっき死なれちゃ困るぐらい言ってたじゃん！！
でも殺せちゃったりする？
蛇に睨まれた蛙。
いんや。
これじゃ、メデューサに睨まれたなんとかだよ。
オレ、あんまり余分なこと考えられないじゃん。
「なんで人間みたいになってるんでしょう？」
ミカエル様はその問いに、またしても底意地悪ーい笑顔を浮かべた。

「人間に見えるか？」
どっちの答えを期待されてる？
人間には見えませんって答えるべきか。
まんま、人間ですって答えるべきか。
こういうときは、日本人の特技を生かさないとな。
「見えるような、見えないような」
ＴＨＥ『曖昧』。
「そうか。仕方ないな。
どうやっても、この美貌だけは変えようがないからな」

「左様ですか」
う〜ん。
美貌はさ、変えられないんだろうけど。
その金髪と名古屋巻きは変えられた方がいい気がするんすけど？
「キレイすぎなのに、金髪じゃ、目立ち過ぎると思いますけど？」
「確かに。
おまえ、頭はそれほど弱くないみたいだな」
なんか、絶対に褒められてない。

「では、仕方ない。おまえと同じ色にしよう。
奴らと同じ色で反吐が出るがこれも仕方ない。
我らが主のためだ」
天使様のわりにお言葉が汚すぎるんすけど。
いや、そもそも天使と話したことあるって人。
人間の歴史の中でどんだけいた？
ただ、想像だけで天使はお上品って決めつけてただけってこと？
だろうな。
知らなかったらよかったなー。
そうしたら、オレの天使様のイメージは素敵なまんまで終わったはずなのになー。
オレ、なんか人生損した気がする。
一方、ミカエル様はと言えば。
目をつむり、小さく訳のわからん言語らしきものを口ずさんだ。
瞬間。
黄金色のキラキラヘアーは、真っ黒なツヤツヤキューティクルヘアーに生まれ変わった。
ああ、便利ね。
そんな風にコロコロ髪色変えられるなら……

３０分置いてから毛染め液流す手間なんてせずに。
髪の傷みなんてのにも気を使わずに。
今日は何色にしようかなぁ？
なーんて。
やってみてぇかも。

「美しいものはどんな姿も似合ってしまう。
おまえのような無様な人間にはムダだがな」
つーか、あれだよ。
この人ってば言葉の選び方しらねーのかな？
侮辱よね、今のって。
無様って……オレ、そんなに下の下なの？
ま、この人たちからしてみたら下の下なんだろうけどさ。
まったくもって、言い返す言葉が見つからない。
上から目線バリバリの上にナルシストかよッ！！
っていうか、名古屋巻きだけはやめないのねってツッコんでもいいものなのか、微妙すぎ。
「さて、テンシン」
「は？　テンシン？」
「おまえ、天林寺真理矢だろ？
略してテンシン。
マリアと呼んでもいいが、複雑になりそうだからな」
って、オレは甘栗か！

「どういうわけか分からないが、おまえとおまえの中にある前世の記憶が融合できていない現状。

おまえは聖母としての力の大部分を使えない。
そうなると、サタンの軍団がやってきたとき、おまえは１００％役に立たない」
「はぁ？」
「忙しい身ではあるが……サタンたちに好き勝手にさせるわけにはいかないから。
このミカエル自ら、おまえのサポート役を買って出てやることにした」
ちょっと待て。
天使様がなにをしてくれるって？
サポート役？
テストの答え、こっそり教えてくれちゃうとか、そういうこと？
「これから寝食を共にし。
悪魔の軍団と戦うのだ。
わかったな？」
ああ、こんなことになるのなら。
オレ、もっと信心深くなっておけばよかった。
そうすれば。
神様はこんなにもオレに意地悪をしなかったはず。
「さて。
これからが楽しみだ」
不敵な笑みを乗せ、大天使様はそう呟いた。
いやー！！
絶対にいやー！！
思いっきり心の中で叫んでみたものの、大天使様のがっつりきつーい睨みによってその声さえも完璧にねじ伏せられる。
ああ、オレって不幸だ。
不幸すぎる！！
天使様の一声は平凡な人生（？）を送ってきた、平凡な男子高生の不幸の始まり大宣言のようで。

ここに、大天使ミカエル様のご降臨はなってしまったのだった。
オレ、この先どうなっちゃうの？

マリア様の憂鬱　☆身に覚えありません

「今度生れ変るときは、私、男として生まれたいんです」
その言葉に、目の前の輝く金色巻き毛をした天使は驚いたように見つめた。
「またどうしてだ？」
この天使にはたぶん分からない。
たぶん？
いいえ。
一生、どんなことが起きようとも分かるはずがない。
女って大変なのよ。
子どもを産むってことも。
産んだ子を育てるってことも。
それが特別な力を持った『神の子』っていうんだから。
それが悪魔たちに命を狙われ続ける運命にあるって言うんだから。
どれほど憂鬱なのか、天使たちにはわかるまい。
それをどんな言葉で紡ごうが。
どんな言葉を投げかけようが。
『大いなる犠牲』を強いる彼らには届くはずもない。
「分かりました。それもいいでしょう。
そのかわり、約束の時が来た時には」
そう言って目の前の天使は目を細めた。
今度はなにをしろとおっしゃるの？
歩く度、黄色い声が飛んでくる。

「なんだ、ここは？
男しかいないのか？」
ミカエル様はとっても残念そうに聞こえる声でそう言った。
「はぁ。なんせ男子校なもんで」
そう。
ここは男子校。
キリスト教隠れ信者の親父の独断で入学させられた、女子禁制の麗しき男の花園。
それなのに。
どういうわけか、黄色い声がそこかしこから飛んでくる。
原因は言うまでもない。
「やはり美しいのは罪だな」
自分で言うな、自分で！！
まぁ、そうは言ってもそれこそ間違いじゃないから全否定もできるわけはなく。
この天使様の美しさと言ったら、モデルも芸能人もみんなジャガイモかなにかにしか見えないほどだ。
そんな超絶美形が禁欲バリバリの危険地帯を優雅に歩いていたら。
いつ襲われたって文句は言えない。
ま、そんな命知らずなヤツがいればの話なんだけど。

「おーい、真理矢ぁ！」
遠くのほうから悪友の声が飛んでくる。
隼人はニコニコニコニコ、人の良さそうな笑顔を浮かべながら、近づいてきた。
「おまえ、一限さぼったと思ったら。
どエライ美形連れて、なにやっとんの？」
なにやっとんの？
と聞かれても。

めっちゃ説明しにくいんすけど。
そんなオレの心を読んだのか。
ミカエル様は小さくため息をついてから「校内の案内をしてもらってるんですよ」と言った。
「私はここに転校してきて、右も左も分からなくなりまして。
そのときに、彼と偶然会い、案内をお願いしたら親切に付き合ってくれたのです」
おいっ。
なんだ、その話し方は！
あの横柄そのものな態度はどこへ消えた？
ミカエル様の背後にでっかい猫のかぶりものが見える。
つーか、化け猫だ。
「へぇ、転校生？
こんな時期にまた珍しいなぁ」
「ま、その。
複雑な事情があるんだよ、事情がさ」
まさかこの人天使様で。
人間じゃないんだよーなんて説明をいくらオレの変人ぶりを許容している隼人にも言えるわけがないのであって。
「なんで、おまえがそんなに焦るん？
おかしなヤツやなぁ」
つーかさ、お願いだから隼人君。
これ以上、妙なツッコミ入れないでくれないだろうか！！
「じゃ、転校生。
改めまして、オレ、余隼人。
真理矢とは幼馴染で、腐れ縁」
「私はミハイル。ミハイル＝アルハンゲロスです」
そう言って、二人はもとい、一人の人間と天使様はがっちりと握手をした。
オレの時、こんなご丁寧なあいさつあったっけ？

んにゃ。
思い当たる限り、まったくなし。

ミカエル様。
あなた、あからさまに差別してませんか？
それとも、オレに対してとっている態度の方が特別なんだから、もっと感謝したほうがいいとでもおっしゃっちゃったりするんすかね？
まぁ、どうでもいいけどね。
仮にこの人に丁寧に挨拶されてもなんだか背中がこそこそかゆくなりそうだし。
化けの皮ってのはいずれ剥がれるもんなんだろうし
にしても、ミハイル＝？？？。
なんて言ったよ、後半の方。
めっちゃ難しすぎて、覚えきれないんすけど。
「んじゃ、ミハイルって呼んでもええ？
オレは好きに呼んでくれて構わんからさ」
なんですかね、このフレンドリーなかんじ。
我が親友ながら大物になりそうな気がするんだけどね。
「はい、では隼人と呼ばせてもらいますよ」
負けじとミカエル様までフレンドリー。
勝手にしてくれよ。
と心で呟いてみた瞬間。
『ヨ〇〇』
頭の中でまた声が響いた。
今、なんか名前を呼んだ気がするんだけど。
頭の音しか聞き取れなかった。
「真理矢、どうかしたん？」
隼人がオレの顔をのぞき込む。
オレはなんでもないと首を振る。

そうそう、オレにはなんも関係ないって。
忘れよう。
そう、いろんな面倒そうなことはすべて忘れて無関係になろう。
これは人生を円滑にするための利口な術である。
「それより、隼人こそなんか用だったんじゃねぇの？」
オレの質問に隼人は「そうやった」と思い出したように言った。

「じつはな、オダケン。体調不良とかで突然学校辞めたんよ」
「はぁ？　昨日までピンピンしとったやん」
「やろ？　オレも信じられんけど。で、代わりの担任がさ。おまえのこと、探しとったんよ」
「オダケンとは誰ですか？」
オレたちの会話についっとミカエル様が割り込んだ。
隼人は「悪ぃ」と軽く謝ると「オレらの担任」と説明した。
「小田賢治（おだけんじ）って言って、オレらの担任。
あ、結構なじーちゃんやったけど、そこらの中高年には負けへんくらい元気やったんよ。
なのに、突然退職。オレ、腑に落ちんもんな」
「で、なんで代わりの先生がオレのこと探してんの？」
「さぁ？」
さぁって、隼人君。
理由聞いてないんかぃ！！
「とにかくおまえ見つけて、社研まで連れて来いって言われたからな。
おまえ、なにやったん？」
なにやったんと聞かれても。
オレ、今日誰に何をした？
ミカエル様から逃げた時、あまりに夢中で誰かにぶつかって、謝りもしないで逃げたとか。

たまたま、それがその先生だったとか？
当たった覚えないけど、なんせ夢中だったから完全否定もしにくい。
「誰かにぶつかってはいないですが。ちょっと興味のある話ですね」
静かに、静かにミカエル様は呟いた。
オレはミカエル様を盗み見る。

顎に右手を添えて。
『名探偵〇〇〇』を彷彿とさせて。
とってもいやーなほほ笑み。
もとい。
素敵なほほ笑みを浮かべ。
「行ってみましょうか、テンシン？」
待ってくれよの一言さえも入れさせない。
つーか、オレに向けるときは視線すらお厳しい。
絶対にこれは差別だ。
このクソ天使ッ！！
「行きますよね？」
ドスのききまくった天使様の声に、オレは命の危機を感じ取る。
やべー。
絶対やべー。
これ以上余分な事言ったら絶対殺される。
ミカエル様にオレはしぶしぶ頷いた。
つーか、お願いだ。
心の中でついたため息が。
――どうか、聞こえていませんように。

マリア様の憂鬱　☆召喚ってなーに？

「ミカエル様に質問です」
オレは社会科研究室。略して社研……に向かう途中、そうミカエル様に切り出した。
「校内ではミハイルと呼べ。他のものに聞こえたら、怪しまれる」
「はぁ」
「で、質問は？」
「あのですねぇ。そのミハイルなんとかってどうやって思いついたんですか？」
オレの質問に、ミカエル様はピタリと立ち止まり、美しい眉間に小さなしわをたてた。
なんでだよ。
なんでそんな顔で見るんだよ。
つーか、オレ。
そんな変な事言った？
「ミハイル＝アルハンゲロス。
英語読みすればミカエル＝アークエンジェル。
ならば、おまえの国の言葉で言うと？」
アークエンジェル……って。
大天使ミカエル。
っていうか、まんまじゃん！？
「おまえのように知識レベルの低い連中では、この名前に気づけるものはいないだろう」
おっしゃるとおりですが。
ミカエル様のおしゃったサタンの軍団なら、わかっちゃうんじゃないでしょうか？
まだ、Ｆ１選手に名前借りたほうが『有名人と同じ名前じゃん』で済む気がするんすけどね。

「人の心配より、おまえはまず自分の心配をしたほうがいい」
「と、おっしゃいますと？」
再び社研へと歩みを進めながら、ミカエル様は静かに言った。
「おまえはこれから死ぬほど命を狙われる」
低い、低い声で。
さらりと天使様はそう言った。
死ぬほど、何を狙われるって？

「命だ。気を抜くと、死ぬぞ」
そのとき。
背中から尋常でない寒気を感じて。
オレは振り返る。
瞬間、オレのちっちゃいハートが凍りついた。
真っ黒いコウモリの羽根に、鍵のようなしっぽ。
口元には鋭い牙をもって。
手には物騒な三つ又槍。
真っ赤に充血した眼玉をギョロギョロさせて。
そいつはにやにや笑って、オレに槍を突き刺そうとしている。
まさにその瞬間にオレは振り返ってしまったのだ。
『セイボマリア。チカラナイ。イマ、コロス』
「ややや。はやまるなって！
だいたい、オレが『セイボマリア』なんてもんになるわけねぇって。
男。オレ、男なんだし！！」
必死に全否定！！
だって、オレ。
さっき、数十分前に宣告されただけで、自覚も宣言もしてないし。
っていうか、絶対死にたくねーっ！！
『シネ！』
なんだなんだなんだ。

悪魔も天使もあったもんじゃない。
なんでこいつらって人の話、聞けねーの？

『召喚して！』
脳の奥底から、例の女の人の声が飛んでくる。
「って、なにを！」
なにを召喚しろって！？
ロープレとかでよくでてくる召喚獣とか？
つーか、召喚ってなんなんだよッ！？
『なんでもいいから早く！！』
確かにごちゃごちゃ言ってる場合じゃない。
ドゴォッ！！
思ったよりスローモーな悪魔の一撃は、そのゆっくりさ故になんとかかわす。
でも、破壊力は抜群で、廊下の壁が見事にごっそり無くなってる。
こんなのくらったら、即死確定！！
「ミカエル様！　あんた、サポートしてくれるって言ったよな？」
オレの隣にいたはずなのに、どういうわけか姿の見えない天使様を探してオレは叫んだ。
死なれちゃ困るとか言ってたはずなのに。
ミカエル様は涼しい顔でオレのずっと後ろの方に立ち、不機嫌そうなため息をついた。
「物を頼む姿勢がなってない」
おいおいおい。
この緊急事態にそれを求めるのかぃっ！！
「サポートお願いいたします！！」
飛んでくる二撃目を寸ででかわし、オレは天使様に手を合わせる。

性悪天使様は、にやりと笑う。
「まぁ、仕方ない。
今、死なれては困るからな」
囁きが聞こえた瞬間。
天使様の顔が自分の顔に迫ってくる。
美しすぎる魅惑のほほ笑みをたたえたまま、天使様の唇があろうことか自分のそれに軽く触れた。
瞬間。
オレの背後から白い光が溢れ出し、何かが絶叫しながら飛び出していった。
白い羽根がバサリと舞い。
光の粒子をまき散らし。
銀色に輝く鋭い槍が、暗黒悪魔の体を突き抜けた。
『ギヤァァァァ！！』
断末魔の叫び声とともに、悪魔は黒い塵となって跡形もなく消えてなくなった。
残ったのは一人の天使。
なんだけど……さ。
「与一郎……じーちゃん？」
バリバリに見覚えある派手なアロハを身にまとった白髪の薄頭をしたじーちゃん天使がにっこりと笑う。
『ワシの槍さばき、見事じゃったろう？』
見覚えのある顔に。
見慣れない大きな槍。
なんつーか。
これ、ほんとに現実？
「聖母の能力その一。
親交深き霊を天の戦士として召喚できる。
類希なる霊能力は、天の戦士を集めるためのもの。
一つ、利口になっただろう？」

簡潔明快にミカエル様はそう補足した。

あまりのことに茫然とし、頭の中がまとまらない。
確かにさ。
与一郎じーちゃんは、四六時中オレんちにいて。
飯食ったり。
テレビ見たり。
風呂入ったり。
自由なことしてるんだよ。
隣の家が自分ちなのに。
オレんちの方がなにかと都合がいいからってさ。
でも、そのじーちゃんが天の戦士？
アロハに白い天使の羽？
オレ、悪い夢ばっか見てる気がする。
でも、待て。
なにか一つ。
とても重要なことを忘れてるような、そうじゃないような。
「とりあえず、社研に急ごうか、テンシン？」
なにもなかったかのように。
廊下の壊れた部分を元通りにして、ミカエル様はにっこり笑う。
壊れたもんも簡単に元通りなーんて、すげー力があるんなら。
イジワルせずにはじめっから助けてくれればいーじゃんか！！
「それじゃ、聖母としてレベルアップできないだろうが」
レベルアップって……オレ、ロープレの初期の頃のヨワヨワ勇者ってこと？
この日、何度目になるか分からないため息をオレはつく。
そして、また社研へと歩きはじめた。

マリア様の憂鬱　☆これ、なにかの罰ゲーム？

社研の扉の前に、オレとミカエル様は並んで立っていた。
いつもの見慣れた扉なのに。
どういうわけか、躊躇したくなった。
なんだか妙に嫌な予感がする。
この扉を開けたらオレの平和な日常がまた一つ、壊れちゃうような気がしてならない。
「つまらんことだ」
ミカエル様がポツリと言う。
またしても、オレの思考を読み取って、いらない返事をしてくれる。
そりゃ、あんたみたいな万能な生き物にとっちゃ、とるに足らない問題なのかもしれないが。
オレにとっては、普通の高校生として、普通の男子としての生活はとっても重要なんだって。
特に17歳。
今、この時間は何物にも代えがたい。
と、よく与一郎じーちゃんは言っている。
「サタンにこの世界を蹂躙されたら、それどころではない」
あっ、そうね。
確かにそのとおりです。
実際、数分前にオレ、その軍団の一人と言うか、一匹に殺されそうになったしね。
あんなもんがこの世にうじゃうじゃ出てきたら……想像するだけで背中がぞわぞわする。

「失礼します」
コンコンとノックする。

諦めと言ってもいい。
これ以上、時間を浪費したって、結局この部屋には行かなきゃならないんだ。
それならそうと男らしく。
ここはスパッと終わらせるほうがいい。
「２－Ａの天林寺です」
ゆっくりと扉を開けて、オレは中へ入る。
社会担当の先生は全部で５人。
担任のオダケンはその一人だった。
けど。
そこにはたった一人の見慣れない先生の姿があっただけ。
「やぁ、待ってたよ。天林寺君」
にこやかにその人は笑った。
赤茶色のストレートの長い髪を肩で一つに束ねた女と見間違えそうになった若い男だった。
切れ長の瞳は黒味が強く、筋の通った鼻ときりっとひきしまった口元はきつそうな印象を与えた。
でも、超美形。
ちなみに、美形の種類が隣にいらっしゃるミカエル様とは異なってる。
ここ、芸能界でも何でもない。
ただの私立の高等学校。
しかも田舎の有名でもなんでもない普通の高校。
なのに、どういうわけか、今日は良くも悪くも超絶美形に出くわしてばかりいる。
これはなんかの罰ゲームなのか、はたまた天からの贈り物なのか？
自分的には絶対に『天からの贈り物』ってのはありえない。
「すまないね。どうしても、個人的にキミに頼みたいことがあった

ものだから」
そう言って、先生らしき超絶美形はおっしゃった。
個人的に頼みたいこと？
まさか『お付き合い』なんて、いかがわしいことじゃないっすよね？
いやいや、これほどの美形なら、それも悪くないのかもしれない。
って、オレ、ノーマル。
キレイなのはいいけど。
絶対的に男はダメ。
な、はず……
「個人的に頼み事はいいが。
その前に名乗るのが礼儀ではないのか？」
超上から目線の発言が、オレの隣から飛んできた。
ちょっと、目の前の超絶美形に圧倒されまくりで忘れていたけど。
隣にも、物凄いのがいましたっけ。
っていうか、その上から発言は、立場的にＮＧでは？
って思うんすけど。
「いや、本当そのとおりだったね。
天林寺君はＨＲいなかったんだものね」
なにか、先生の発言に違和感みたいなものを覚えた。
でも、何が？
何がどう感じたっていうんだ？
それは、よくわからない。

「ボクは山田太郎。
小田先生の代わりでキミたちの担任になりました。
よろしくね」
そう言って山田先生はにっこりと笑う。
こんな美形なのに。
『山田太郎』なんて、ちょー日本的な、というか、代表的なお名前

なんて。
ちょっとしたカルチャーショック。
っていうか、親、もっと考えて名前つけろよって思っちゃうけどね。
「これで構わないかな？」
そんな山田先生に、負けず劣らずな微笑で、ミカエル様は小さく頷いた。
礼儀知らずな、ちょー上から目線の天使様は、とことん礼儀ってのに拘るらしい。
そんなに礼儀を重んじるなら、あんたもそうしてって思うのはオレだけか？
くすっ……
山田先生が小さく笑う。
「あの？」
「ああ、ごめん。ちょっとした思い出し笑い」
超絶美形って、オレの理解の範疇を超えてるのか？
とりあえず、オレは話を元に戻す。
「個人的な頼みってなんですか？」
その言葉に、先生はコホンと一つ咳払いし、「キミのうちってお寺だったよね？」と言った。

「はぁ。そうですけど」
「じゃ、お祓いとかってお願いできる？」
「厄払いの祈祷とか、そんなんですか？」
オレの言葉に、山田先生は小さく首を振った。
「悪魔祓い」
おーい。
それは宗教間違えてる気がするんすけど？
「うち、一応仏教なんで。悪魔祓えないと思います」
仏門なんてものを人に説いてるくせに、心はキリスト教信者な親父

の祈祷じゃぁな。
中途半端すぎて、絶対に悪魔も追い出せないと思う。
追い出すどころか、逆にとり憑かれてよしな気がする。
「そう？　お坊さんって霊感強いかなって思ったんだけど。
祓えなくてもいいから、見てもらうってこと、頼めないかなぁ？」
祓えなくてもいい？
見るだけでいい？
霊感強い人に？
なんか、背中に刺さるような視線を感じる。
無視だ、無視。
そんな嫌な予感バリバリする視線なんて、絶対的に無視！！
「うちの親父なんですけど。
坊主のくせに霊感ゼロで。
頼んでも、まったくお力になれないと思います」
「家の人で霊感強い人、いない？」
先生。
なんでそこまで喰いつくんですか？
家の中で霊感強い人って言われても。
オレが『最強』に霊感あるんですけど。
なんてこと、死んだって言いたくない。
「じゃ、おまえがやってやれ、テンシン」

やっぱり、きたー！！
絶対にそうやって言うに違いないって思ってたけど。
このタイミングで言っちゃうんですね、ミカエル様は。
最悪だ。
ほんとに最悪最凶天使様だ。
「天林寺君が？」
「はぁ。うちの中で霊感あるの、オレだけですから」

「しかも、圧倒的な霊能力だからな」
いらん一言をミカエル様はさらりと付け加えた。
オレさ、この部屋入るのすっごく嫌だったの。
なんか、絶対に嫌なことに巻き込まれるって予感がバリバリでさ。
つーか、逃げたい！！
今すぐ逃げたい！！
「『悪魔』とは『戦え』と言っただろう？」
耳元でささやく極悪天使様。
高圧的で絶対的で。
逆らうことは許されないその言葉に、オレは大きくため息をついた。
おーい、マリア様。
あんた、どんだけ今まで苦労してた？
オレ、なんでこんな目に合されるんでですか？
本当にオレ、あんたの生れ変りなの？
「オレでよければ、協力します」
この一言に。
極悪天使が満足げな笑みを漏らしたことは言うまでもない。

悪魔祓い　☆ゾンビとタイマンはありえねー（1）

その悪魔はこう言った。
『マリア、おまえは賢い人間だ。
だから、己にとって最善の道を選ぶべきだ』
その声はザラザラとした感触を持って、心の隅々を舐めていくよう。
『神の子を産むおまえは、神にとって一体なんであるのか？
駒か？
尊き存在か？
神の子の真の幸せとはなんであるか？』
ええ、本当。
言われてみれば、そうなのよね。
私はいったい何なのだろう？
この子は誰なのだろう？
この子の幸せは何なのだろう？
『我らと戦うことがおまえにとって最善なのか？
神の子を産むのが最善なのか？
おまえは考えるべきだ』
分かる。
それはよく分かっているつもり。
でも、この中で育つ生命（いのち）を絶てるほど、私は強くはない。
『では、未来で選ぶがいい。
おまえが真に望むその道を』
その悪魔はそう言って笑った。
過去と未来を見通す力を持って。
彼の紅玉の瞳は確かにほほ笑んでいた。

もしも願いが叶うなら。
どうか、ここで車でも突っ込んできて、オレを病院送りにしてほしい。
「そんな願い、誰も叶えるわけなかろうが」
この数時間で、オレはこんな会話にすっかり慣れちゃっている。
声に出していないのに、会話になる相手。
大天使ミカエル様は、オレとはまったく真逆の軽ーい足取りで、依頼現場に向かっていた。
「大丈夫かぃ？」
思いっきり重たくなる体。
前に進まない足。
ミカエル様に遅れまくりなオレを気遣う声が飛んでくる。
「……大丈夫です」
山田太郎先生はオレの返事に「申し訳ない」と言った。
「学校までサボらせちゃったんだ。
気が重いのも無理ないよな」
先生、どうしてそんな心配なんですか？
オレ、別に学校サボるくらいでこんな風になりませんよ。
これから起こる嫌な予感っていうのが、全身を切り刻むみたいにビリビリ空気を伝わってくる。
その場所が近付けば、近づくほど、それは物凄い圧力でオレの体を裂くようだった。
こんな感覚は、生まれて初めて。
……な気がする。

「テンシンのことなど、気にしなくてもいい。
それより、山田。
小田先生の家はここか？」
なぜ山田先生は呼び捨てで、オダケンは先生なんだよ！！

でも山田先生は特に気にするわけでもなく「そうだよ」と答えた。
「お祖父さんのうちはここだ」
平屋の小さな借家の前で立ち止まる。
「うっぷ……」
思わず襲う吐き気にオレは急いで口元を覆う。
なんていうか、最悪。
もう、見るからにヤバいってかんじ。
その家、火事でもあったみたいに全体から真っ黒いオーラが立ち上ってる。
オレさ。
過去にそれでも何度か悪霊ってのを見たことがある。
でも、大抵そういう悪霊を見た時には隣にあの陽気なアロハじーちゃんがいて。
「見るな」って追い払ってくれてた。
でも、今日に限ってはそのじーちゃんもいないし。
オレが全力で「イヤだ！！」と猛ダッシュして逃げ出そうとしたとしても、速攻追いかけて、首根っこ捕まえてでもあそこに抛り込むであろう『極悪天使』様がいらっしゃる。
絶体絶命すぎ。
っていうか、この先にあるもの、見たくない。
「ショウキで満たされてるな」
いつにない真顔で、ミカエル様はおっしゃった。
ショウキ？
勝機？
正気？
笑気？
全然話、見えてないんですけど。

「瘴気だと言ったのだ、バカテンシン。

悪魔でも低俗な種が出す毒ガスみたいなものだ。
ま、上位種でもまき散らすアホな悪魔はいるがな」
ちらりと山田先生をミカエル様は見る。
山田先生は妙に感心した面持ちで「詳しいですね」と言った。
「あの。
彼、宗教ヲタなんです」
「じゃ、詳しくても当たり前だねぇ」
山田先生はくつくつと喉を鳴らして笑った。
なんか、その笑顔。
オレ、前に見たことあるような気がする。
でも、どこで？
「さて。
では、入るとするか、テンシン？」
オレを振り返り、ミカエル様は『行け』と顎で指図する。
あんた。
先頭きって行ってたのに、この場はオレに行けって無慈悲なこと言うんだ。
ロープレだって、主人公が弱い時は列の最後尾に回すのに。
このご主人さまはドSっていうか、超スパルタなんすね。
オレは小さく深呼吸する。
あんまり大きく息を吸い込むと、あの黒いオーラまで吸っちゃいそうだ。
あれは絶対、煙草の煙より性質悪いに決まってる。
癌どころか、あらゆる病気を併発しまくりそうだ。

そもそも、なんで学校をさぼってまで、オレたちがオダケンの家に向かったのかと言えば。
『小田賢治は僕の祖父なんです』
山田先生はそう言って、『悪魔祓い』って言った意味を話て聞かせ

た。
『祖父が急変したんです』
そりゃさ、オダケンって結構年いってたから。
体を急に崩すこともあると思う。
でも、先生は『そうじゃない』とはっきり、きっぱりと言ったんだ。
『人格が急変したんです』
オダケンの人格？
優しくて、シャキシャキして。
でも、ちょっと耳が微妙に遠いオダケンが急変？
『祖父はまるで獣です。あれは悪魔にとり憑かれたとしか言いようがない』
オレね、ここでもちょっと引っかかってるの。
でもさ、どこに引っかかってるかって聞かれると『さぁ？』としか答えようがないんだけど。
『あんなお祖父さん、見たことがない』
具体的に言うと。
朝から肉を食い続けているらしい。
普通じゃん！！
ってツッコミそうになったけど。
その後の一言で『ああ、超ヤバいじゃん！！』って思った。
オダケンは。
朝から『生肉』を食い続けているらしい。

山田先生は、ずいぶん前から一人住まいのオダケンを気にかけていたらしい。
近所に住んでいるってこともあって、ちょこちょこ顔を出していた。
で、昨日の夜も遅く。
『オレは仕事を辞める。
代わりはおまえだと校長には申請してあるから、明日から行け』

なんてとんでもないことを言われ。
昨日から家に訪ねたけど、扉も開けてくれない。
うちの中からはオダケンが飼っているミックス犬の『たつろう』が吠える声がするから、本人はいるのだとわかるけれど、応答なし。
で、今朝もう一度出直した先生は。
『たつろう』の声がしないことにまず気がつく。
嫌な予感っていうのが走ったらしく、何が何でも家に入らなければと思っていた。
昨日は開いていなかった鍵が、なぜか今朝は開いていて。
恐る恐る中へ入っていくと。
まず、血の匂いがした。
真っ暗な廊下を進んで、台所までやってきた先生が見たのは。
『たつろう』の腹に喰らいつき、内臓を引き出し、肉を貪る祖父の変わり果てた姿だったらしい。

そんなグロい現場の前に立たされているオレ。
今から、そこに踏み込まないといけない。
っていうか、これってオレみたいな『普通の男子高生』が抱える事件の範疇を超えまくってなぁい？
いやだょ、オレ。
今から超おっそろしー体験しなくちゃなんないなんて。
これなら、イレギュラーな数学のテスト受けてた方が何倍もましだって！！
「ぐだぐだ言わず、入れ！」
腰を蹴られ、オレは半開きになった扉の奥へ押し込まれるようにして中に入る。
そして、すぐに鼻と口を押さえる。
耐えがたい異臭。
たぶん、これが先生の言う『血の匂い』。

部屋は真っ暗だし。
外は快晴だってのに、一筋の光も差し込んでいない。
台所はまっすぐにのびる廊下の向こう。
奥の方からミカエル様の言った『瘴気』とやらが、風もないのにこちらへ流れてくるのが目に見えた。
「マジで」
行かなきゃなんないの？
この期に及んでって言わないで！！
オレ、気持ち悪すぎて本吐きしそう。

「大丈夫ですか、天林寺君？」
山田先生が再度オレに気を遣って言った。
大丈夫であるはずない！
でも、大丈夫ですって言わざる得ないじゃないですか！！
引き受けちゃったんだし。
男だし。
そう。
オレ、男の子だもん。
『男って……』
面倒ね。
って、頭の中で声がする。
男って面倒？
そうだよ。
これが男なんだよ。
一度決めたことはひるがえせないんだよ。
っていうか、邪魔すんな！！
オレ、今自分保つことだけで精一杯なんだから！！

悪魔祓い　☆ゾンビとタイマンはありえねー（2）

意を決し、オレは一歩踏み出した。
先生が『靴は脱がない方がいい』と言うもんだから。
とりあえず、心の中で詫びて。
「おじゃまします」
と一歩ずつ。
暗闇のさらにその奥へと突き進む。
考えてみれば。
ここに一人で行かされているわけじゃなく。
後ろには先生やミカエル様がいるんだから。
だいじょう……
「え――っっっ！！」
後ろを振り返る。
けど、どういうわけか、そこには誰もいなかった。
辺りはどす黒い闇に覆われて、一寸先も見えない。
「なんでなんで！！」
さっきまでいたよな？
先生の気配とか、絶対してたのに。
残されているのは、前に進む道だけ。
超最悪。
オレ、逃げだせないし。
助け船もないってことじゃん！！

ゆっくりと、本当にゆっくりとオレは前を向く。
瘴気のあふれだす廊下の奥。
空気さえ震える、深い闇。
嫌な音が響いてる。

ぴちゃぴちゃ。
くちゃくちゃ。
想像するだけで、背筋が冷たい。
手先も心なしかひんやりしてる気がする。
ホラー映画の主人公じゃん、これって！！
この先でオレ、殺されちゃうってことはないよな？
一歩。
また一歩。
踏み出すたびに、あの不快な音は大きくなる。
オダケン、『たつろう』喰ってるの？
腹壊すから、もうやめた方がいいと思うんですけどね。
台所の扉は開け放たれている。
闇は深いはずなのに、はっきりとそれらは見て取れる。
どうしてなのか？
オレが異常に霊感あるからなのか？
オダケンらしき老人は、体育座りみたいにコンパクトに足を折りたたんで座っていた。
薄くなっている白い髪は乱れ、背中を丸めて何かにかぶりついている。
無心。
一心不乱。
ただ、そこにあるものに喰らいついている。

足元はおびただしい血の海で。
肉の破片がポツポツと落ちていた。
肋骨らしき骨と、毛のついた皮が横たわっている。
内臓なのか、なんなのか。
そんなもんまで見えている。
手に取っている骨には肉がこびりつき、血が滴っていた。

無心に肉に喰らいついていた当人がゆっくりと振り返る。
知ってるぞ、オレ！
こんな場面、体験してるぞ！
バイ〇ハザードの一場面。
オレ、コントローラー持ってる手、汗でびっしょりになったもん！！
「ひぃっっっ！！」
あれはゲームの世界だったけど。
目の前のこれは現実で。
真っ白い顔。
異常にしわまみれになった顔。
口元は大きく裂け、真っ赤な血と肉片がこびりついている。
むき出しの牙からは、よだれが垂れ落ちる。
悪魔にとり憑かれてるっていうよりも。
ゾンビじゃん、これ！！
オダケンの影も形もない。

オダケンもとい、ゾンビらしいそれはオレを見てしっかりと、はっきりと、ニタッと笑った。
おいおいおいおいおい！
新鮮な食べ物がやってきた。
なーんて思ってないよな？
オレ、食べても絶対美味くないですって！
年こそ17歳で食べごろですけど、別に肉付きいいってわけじゃないし。
むしろ絶対に食べたら腹壊す系だと思いますです。
『マリア……タマシイ……ウマソウ……』
またしても出ました、固有名詞！！
『マリアの魂』？
オレじゃなくて、魂が美味しそうってこと？

ある意味、がっかりなんすけど。
でもでもでも、考えろ、オレ！！
コイツ。
意味は違っても、オレのこと食いもんだと思ってるんだぞ！！
オレ、逃げないと食べられるってことじゃん！！
これ以上はないってくらい素早い動きで、オレはくるりと後方を見た。
覚悟はしてたよ。
絶対にこうなるってさ。
さっき体験したばっかだもんな。
そう。
後方に逃げ道なし。

『マリア……タマシイ……タベタイ』
オダケンゾンビがオレを捕まえようと動き出す。
思ったよりもスローな動き。
オレでも勝てそうな気がする。
それくらい、ゆっくり。
でも、次の瞬間。
「うそぉっ！」
オレの顔をオダケンゾンビの手がかすめた。
動作の一つ一つはさ。
本当に亀みたいにゆっくりだったのに。
手が伸びた。
手が倍くらいに伸びて、オレのこと掴もうとした。
これ、なによ？
ゴムゴムの～なんていう某アニメキャラも真っ青な手の伸びようじゃん。
悠長に勝てそうかも～なんて言ってる場合じゃない。

やっぱりどうにかしてこの場から逃げるか。
もしくは、一緒に来たはずの二人の助けがあるまで、この暗い空間で逃げ回るか。
どっちにしても、オレ、かなり分が悪い。
そんなこと考えてる間も、オダケンゾンビはオレを捕まえようと、腕を伸ばし、振り回す。
その攻撃をかろうじてオレは避けているわけだけど。
日頃の運動不足ってのは、こういうときに影響するもんなのね～。
オレの持久力、半分以下に低下中。

息が切れはじめる。

言いわけじゃないけど、オダケンゾンビ、攻撃の仕方ハンパじゃないんだって。
食欲に対しての本能のなせる技だとは思うけど。
おっそろしく、しつっこく、オレを捕まえようとしてる。
さらに、相手は体力なんつーものとは無縁らしく。
全身全霊でオレを捕まえようとしてるように見えた。

「ダメだ……」
弱音吐いたら負けだ。
なんて言葉、聞いたことある。
でも、オレ、マジでどうしていいか分んないんだよ。
だいたい、どうしてこんな目にあうんだよ。
悪魔祓いなんて、はじめからできないって言うんだった。
いや、見るだけでいいって頼まれたから来たのか？

でも、これって代償でかすぎる。
オレ、霊感なんてものほんとにいらねー！！
っていうか、この絶体絶命のピンチを招くことになった一番の原因ってなんだよ。
あの『極悪天使』のせいじゃん！！
オレに死なれたら困るとか言っといて、これってなんだよ！！
スパルタ教育って言うんなら、ここを無事に切り抜けられたあと、アイツ、八つ裂きにしてやる！！
「おもしろい」
は？
なんか、今、声がしたような気がするけど。
……気のせいだよな？
気のせいだと思いたい。
「八つ裂きにできるものなら、してもらおうか？」

深い深い闇の中。
小さな小さな光がオレの頭上から降りてくる。
ぼんやりと見つめるオレの顔の上に、やんわりとした光が降りる。
光を掴む。
見覚えのある真珠色の羽根が一枚、オレの手の中で光り輝いている。
「ミカエル……様？」
「死にたくなければ、懺悔したほうがいいぞ、テンシン？」
ああ。
なんて高圧的なお言葉。
でも、それすらも今のオレには救いの声。
唯一の。
「もうしわけございませ～ん！！」
情けないと言われようが。
へたれだと言われようが。

このときのオレには関係なかった。
「今死なれては困るからな」
お決まりの台詞を口にして、その方は闇を引き裂くように現れる。
溢れる光を纏って。
大天使ミカエル様はにっこりとほほ笑んでいた。

悪魔祓い　☆祈りの言葉（1）

神々しいって言うのはこういうことを言うんだねぇ。
「ぼんやりするな、テンシン。死ぬぞ」
その声にオレは我に返る。
そうだった。
救いの手ってのはやってきてくれたけど、オダケンゾンビはまだ健在だった。
「あれ？」
うそだろー！！
ミカエル様が登場したと思ったら、オダケンゾンビの動きがぴたりと止まった。
そして、なにやらまたぶつぶつ言いながら、首や肩をゴキゴキと鳴らし始めた。
途端、肩から手が増えた。
肉を引き裂くように、肩から手が生えてきた。
『テンシ……ウザイ……タマシイ……タベル……』
おーい、ミカエル様。
あんたも御馳走って思われてるみたいなんすけど。
ミカエル様を見る。
暗闇の中で、彼の体が輝いていたのはここに降り立ったときだけで、今は普通に戻っている。
ミカエル様はピリピリしているみたいだった。
オダケンゾンビを凝視している。
オダケンゾンビは、生えてきた二本と、元々の手を一斉に伸ばしてきた。
それは複雑に絡み合いながら、オレとミカエル様を同時に狙って来ていた。
「まったく、おぞましい」

一言言い放ち、ミカエル様は伸びてくる手をつかみ上げる。
ごもっともです。
けど。
天使様ってばお強いのね。
「触れるのも汚らわしくて、虫唾が走るが仕方ない」

言いながら、そのままミカエル様はオダケンゾンビの腕を握りつぶした。
パラパラと、まるで泥団子が崩れるように、オダケンの腕が崩れる。
オレはそんなミカエル様の姿に圧倒されながら、オダケンのもう二本の手から必死で逃げていた。
「それもこれも。
マリアが役に立たないからだ」
あからさまにオレの方に嫌悪の視線を向けながら、ミカエル様はオレに伸びていたオダケンゾンビの腕を捕まえた。
っていうか、とばっちりじゃね？
オレだって役に立ちたいけど、普通の男子高校生にゾンビやっつけろってそりゃ無理すぎるって！！
けど、ミカエル様は全くこっちの話を聞いてないみたいで。
「善良であった者を、このように変貌させるとは。
昔からアイツは好かなかったが、今回は余計に嫌いになった」
オダケンゾンビの残りの腕を再び握りつぶし、ミカエル様は言った。
超ご立腹。
オレのことをすっげー怒ってるのは分かるよ。
『役に立たない』とか言われたし。
でも、その後のお言葉は誰のこと言ってんの？
「さぁ、テンシン。
本当の悪魔祓いをするぞ。

力を開放しろ」
んなこと言われたって。
むちゃブリすぎですって！！
この状況下で。
しかもやったこともないのに『力を開放しろ』とか言われてもできるわけねー！！
「手は貸してやる。
後のやり方は、おまえの中の女にでも聞け」
っていうか、不機嫌ＭＡＸじゃん！！
オレ、泣きたい。

ミカエル様はオレに背を向けて、オレの前に立った。
不機嫌なオーラをバリバリに出しながら、オダケンゾンビの脅威の再生パワーで生える腕を次から次に握りつぶしていた。
とりあえず、ミカエル様はオレを守ってくれてるみたいだし。
悪魔祓いってのをやらない限り、オダケンゾンビは大人しくなってくれないみたいだし。
やるしかない！！
やるしかないぜ、真理矢！！
で、やり方は女に聞けと言ったけど。
教えてくれるの？
『仕方ないじゃない』
うわっ！
こっちもかなーり不機嫌ってかんじじゃん。
『今から私が言う言葉を、気持ちを込めて、一語も間違えることなく唱えるの。
出来なかったら、そこの天使に殺されるかも』
おいおいおいおい。

そんな『絶対』にありえないって否定できないようなことまで言わないで！！
この極悪天使様なら、『死なれたら困る』とか言いながら『役に立たないならいないほうがいい』とか言って、オレの存在、瞬殺しそうなんだから！！
「じゃ、間違えるな」
ああ。
そういうことは聞こえるのね～。
って、勘弁してくれよ～！！
『いい？』
「……いいっす」
しぶしぶ頷くオレの頭の中で、女がゆっくりと言葉を切りだした。

悪魔祓い　☆祈りの言葉（2）

『まず、胸の前で両手を組む』
仏教語で言うなら『合掌』って感じだな。
オレは言われたとおりに両手を組んだ。
っていうかさ、普段が合掌っていうか、手を合わせることに慣れているせいか。
『手を組む』っていう行為がなんつーか、違和感というか。
はたまた新鮮というか。
『次に　私は全ての人を許します　と言って』
「……私は全ての人を許します」
『そうしたら、次に悪魔祓いをする人の過去の実績を言って』
「は？」
『過去の実績。
その人が、今の年までどんなことをして生きてきたのか。
もちろん、善き行いよ』
待て待て待て。
オダケンの過去の『善き行い』？
そんなもん、オレがわかるわけねー！！
オダケンとの関係は『担任』と『生徒』。
プライベートも何も知ったもんじゃない。
どうするよ？
どうしたらいいんだよ？
ちらりと天使様を見る。
不機嫌そのものなお顔で、黙々と次々と際限なく生えてくるオダケンゾンビの手を握りつぶし続けている。
聞けるわけねー。
聞ける雰囲気じゃねー。
そのときだった。

『そこの者は……』
男の声？
それとも女の声？
分からない。
分からないけど、確かにオレの頭の中に響いてくる声がある。
これは、オレの中に常にいる『マリア』様とは全くの別物。

声はオレの戸惑いなど無視して、頭の中で反響する。
『その者は、貧しい家に生まれ、父や母を助けながら、教師の道を目指した。
そして、同じように貧しい家に生まれ、学校に通うことのできなかった子供たちに無償で読み書きを教えた。
家族ができてからは、その幸せのため、けっして贅沢はせず、謙虚に生活をし、廃棄処分される犬を引き取って、自分の家族としていた』
これってオダケンのこと？
っていうか、あんた誰？
「いいから、実績を言え、テンシン！！」
苛立ったミカエル様の言葉に。
オレはとりあえず、その声の主のことは一時的に忘れることにする。
ええっと。
どう言うかな？
まんま言えって言われても、ちょっとムリだから。
「その者は、貧しい家に生まれ、父や母を助けながら教師の道を目指した。
貧しい子には無償で読み書きを教え、家族ができてからは贅沢はせず、謙虚に生きていた。
廃棄処分にされる犬を引き取って、自分の家族としていた」
ま、ほとんど正解でしょう。

っていうかさ。
どうせ教えてくれるなら、もちょっと簡単に。
簡潔に。
分かりやすく教えてくれたらいいと思うんだけどね。
『上出来』
くすり。
笑い声が聞こえた気がする。
どこかで聞いたような気がするこの笑い方。
でも、どこで？

『さぁ、祈りの言葉を捧げ、神に救済を頼むわよ』
女の声が復活する。
神に救済ねぇ。
オレ、熱心な信者じゃないけど、神に祈りの言葉なんて届くのか？
「サポートはすると言っただろう」
ミカエル様が不機嫌そうにオレを見た。
今回のサポートって言うのはそういうことね。
確かに、神様のお傍に使えるミカエル様なら、オレの言葉、しっかり届けてもらえそう。
「間違えるなよ」
超重圧。
間違えたら絶対に殺される！！
『天におられる我らの父よ』
「天におられる我らの父よ」
女の声に続いて、オレは復唱する。
『御名が聖とされますように』
この祈りの言葉。
初めて聞くのに、初めてじゃない。

全部、分かる。
「御名が聖とされますように」
自然と口の端からするすると。
まるで生き物のように言葉が飛び出していく。
「御国が来ますように。
御心が天に行われるとおり、地にも行われますように。
私たちの日ごとの糧を今日も　お与えください。
私たちの罪をおゆるしください。
私たちも人をゆるします。
私たちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです」
頭の中で声はしない。
それなのに……オレはすべての祈りの言葉を一人で唱えていた。
なんで？

「テンシン。
主はおまえの言葉を待っている。
目の前にいる男の魂の救済を求めよ」
ミカエル様はそう言って振り返った。
その向こうに、星のように瞬く光が見えた気がした。
あれが神？
それともただの光？
でも、いい。
オダケンゾンビの悪魔祓いなんてさっさとお終いにして。
オレはここから早く出るんだ！！
「我らが神よ。
その者の御魂を悪魔の呪縛より解放ください」

言った瞬間。
オレはオレの中のもう一人の存在を感じた。
安らかなオーラ。
でも一本筋の通った強い存在。
何か大切なものを守るためにいる。
それはどこか、おふくろみたいなイメージ。
ああ、きっと。
これがあんたなんだろう？
マリア様。
ミカエル様の向こうに瞬く光が大きくなり、それは一瞬で闇を飲み込んだ。
ミカエル様の姿も。
オダケンゾンビの姿も。
その光の中に溶け込んで見えなくなった。
そして、例外なくオレ自身も溢れる虹色の光に包まれた。
やべぇっ！！
この光、すっげー気持ちいいんですけど。

悪魔祓い　☆なんとかできたみたい？

『大丈夫ですか？』
誰のこと？
っていうか、この声は誰だ？
男なのか、女なのか分からないけど。
聞いたことはある。
艶がある。
魅力もある。
でも、どこか恐怖心を抱かせる不思議な声？
なんで、オレ、この声が怖いんだ？
っていうか、オレが怖がってる？
それとも、あんたなのか？
「天林寺君？」
はっきりと聞こえてきた声に、オレは飛び起きた。
この声は知ってる。
「僕が分かりますか？　天林寺君」
赤茶髪のきれいな男の人が、オレの目の前にいた。
漆黒の瞳にオレが映ってる。
「山田……太郎先生」
そう言うオレに、山田先生は安堵したように小さく息を漏らした。

オレは改めて、先生の顔を見る。
キレイなお顔がすぐそこにある。
って、おいおいおい。
この距離感って近すぎ！！
「だいじょーぶ大丈夫です！！」
山田先生の腕の中で横たわっていたらしいオレ。

急いで起立して、足の屈伸運動なんてしてみせる。
痛いところなし。
気持ち悪いっていうこともなし。
とりあえず、正常。
「あれ？」
周りを見てみる。
見慣れない和室にいるのは、オレと先生だけだった。
あの、名古屋巻き極悪天使様の姿と、オダケンゾンビはどこに行った？
「ミハイルくんなら奥の台所で、お祖父さんを見てくれてます」
「そうだ！！　オダケン！！
オダケンどうなったんですか？」
「キミの意識も戻ったし、行きましょうか？」
オレの質問にあえて先生は答えなかった。
オレは、こくりと頷いた。
悪魔祓い、失敗したとか？
それなら、絶対に天使様の機嫌は最悪に違いない。
オダケンのことは気になるが、もしも最悪に機嫌が悪くなっている天使様がそこにいるんだったら、オレ、逃げちゃおうかな？
って、ダメか。
全速力で逃げたって、いつのまにか前にいらっしゃるんだもんな。

オレは小さくため息をつきながら、先生の後をついていく。
真っ暗で何も見えなかったはずの廊下は、玄関から入ってくるわずかながらの日の光でうっすらと明るくなっていた。
木目の廊下は、オレがやってきたときよりもずっと短くて、狭いものだった。
あのときは。
本当におっそろしく長い廊下に感じたはずなのに。

その向こうにある台所は薄暗い感じはしたけど、真っ暗ではない。
引き戸のすりガラスの向こうに、天使様らしき姿があった。
「ようやく目が覚めたか、テンシン」
オレの姿を見ることなく、ミカエル様は言った。
言葉の端々に痛い刺がある。
どうやら予想通り、天使様はご立腹らしい。
ってことは、やっぱ失敗？
「おまえ一人でならあり得るが、私がいるのにそれはない」
ああ、そうですか。
じゃ、悪魔祓い成功ってことで。
不機嫌の理由ってのはいったいなんでしょう？
「己の胸の内に聞け」
もしかして、八つ裂きとか言ったこと根に持ってんのかなぁ？
でも「やってみろ」とか徴発された覚えあるし。
「おまえには呆れて言葉も見つからん」
天使様は諦めたように大きくため息をついた。
おいおいおいっ！！
オレの方がよっぽどため息つきたいんですけど！！

「まぁまぁ、天林寺君もミハエル君もそこまでにして。
で、ミハイル君。どう、お祖父さんは？」
山田先生の問いかけにミカエル様は「意識は戻らない」と答えた。
「悪魔の呪縛から解放はされた。
けれど、小田先生の心はこの世界に戻ることを拒否している。
それも仕方ない。
自らの意志ではなかったとしても、自分が家族と同じように愛していた飼い犬を残酷な形で殺してしまったのだ。
その罪に、耐えられる者の方が少ないだろう」

「オダケンは……意識があったってこと？」
オレの質問に、ミカエル様は小さくうなずいた。
「残酷なことをする。
己のしたことすべてがわかるように、ごくわずかだが意識を残してあったのだ」
「じゃあ、自分が『たつろう』食ってるのも……」
「先生の両目を見てみろ。
うっすらだが涙の伝った後が残っているだろう？
今も、心の痛みを叫んでいる。
おまえにも……それが聞こえるんじゃないのか？」
ミカエル様はそう言って瞳を閉じた。
オレは同じように目を閉じる。
静まり返った部屋に、時計の秒針の音だけが小さな刻み音を立てている。
『キャァァァァァ！！』
鼓膜を破るような絶叫に、オレは思わず耳をふさぎ、目を開けた。
周りを見る。
山田先生が心配そうにオレを見つめていた。

「大丈夫かい、天林寺君？」
先生には聞こえていなかったらしい。
これが、オダケンの心の叫び？
その声は痛くて、痛くて。
身を引き裂かれるような。
強烈な痛み……
「山田。おまえの依頼はなした。
あとは、おまえたち家族の問題だ」
「生かすも……死を選択するのも、ということかい？」

「そうだ。我々ができるのはここまでだ。
テンシン、帰るぞ」
ミカエル様はそう言って、台所をさっさと出て行ってしまった。
「お役に立てたかどうかは別として。
あいつ、先生に失礼ばっかでほんと、すみません」
ぺこり。
頭を下げるオレに先生は「構わないよ」と言った。
「にしても、彼にとってキミは本当に大事な存在なんだね」
「え？」
「キミがいなくなったとき、血相変えて闇の中に飛び込んで行ったんだよ。
ほんとに彼とは初対面なの？」
痛いところを突っ込まれ。
オレの心臓がドキッと大きく波打った。
「テンシン！！」
玄関の方から苛立ったミカエル様の呼び声が聞こえた。
「今日はありがとう。
さぁ、早く行って」
にっこり。
山田先生は柔らかな笑みを浮かべた。

「じゃ、失礼します」
オレは小さく頭を下げて、不機嫌ＭＡＸな天使様の元に走っていく。
それを確認し終わる前に、天子様はずんずんと。
長い脚を大きく開いて帰っていく。
っていうか帰り道分かるのかよ？
急いで追いかけたって、どっちにしろ置いてくんじゃん。
なんて心の声に天使様が耳を傾けるわけがない。
『面白いね、面白いよ』

ふいに頭の中に声がした。
『キミたちは……』
どこかで聞いたことのあるその声に、はたと立ち止まる。
振り返った先にはにこやかに手を振る赤茶髪の超絶美形だけで……
オレはもう一度会釈し、もう二度と振り返りはしなかった。

不安的中　☆天使様も大変らしい

選択の時が近付いている。
天の一員として人を導く神の子を誕生させるのか。
地の住人として悪魔に力を貸すのか。
私にできるだろうか？
私に神を裏切ることができるだろうか？
だって、そうしなければ『あの子』を守れないのだとしたら？
ミカエルたち天使は私を許すはずがない。
けれど私は……
あの悪魔が怖いの。
どうしようもなく、あの悪魔が怖いの。
ねぇ、私はどうすればいい？
――っていうか、マリア様？
あんた、なんの話してんだょっ！！

「っつーか、なんでオレが床なわけ？」
オダケンゾンビの『悪魔祓い』を終えて。
ぐったりなオレたちは結局学校にも戻らずにオレの実家に帰って来ていた。
学校を早退してきた息子がハンパない美人を連れて帰ってきたことに。
オレの家族たちは何の疑問も抱くこともなく「どうぞどうぞ」と大歓迎で。
で、戻って来た早々。
ミカエル様はこう言った。
「寝るから起こすなよ」

オレだって、休みたかったのに。
もちろん、その権利はいただけず。
オレはフローリングの床を指定され、今ベッドにはおっそろしく深い眠りについた天使様がいらっしゃる。
「今悪魔に襲われたら、どうすんの？」
キレイなキレイな寝顔。
まつげなんて、ビューラーぎゅんぎゅんにかかってるみたいにクリンクリンで。
お人形さんみたいなんだよなぁ。
この方の本性さえ知らなけりゃ、こんなオレでさえツンツンしたくなる。
うーん。
不毛の一言に尽きるな。
それにしても。
さっき、オレの中でマリア様が妙なことをブツブツと呟いていた。
オレが聞いても回答はなし。
いつもの独り言なんだけど、内容が内容だけにちょっと聞き逃せない。

『なぁに、小難しい顔をしとるんじゃぃ』
不意に聞き覚えのある声がして顔をあげると、そこには派手な色のアロハシャツを着たじーさんがふわふわ浮いていた。
「なーんでこのタイミングなんだよ、じーちゃん。
もっと来てくれてもいいときあったんだけど」
『わしらは召喚されないと天の戦士になれんのよ。
まして、あーんな上位種が作った闇の中になんぞ、一般霊のわしらみたいなのが行けるわけなかろうが』
上位種が作った闇？

オダケンの家を覆う闇ってこと？
『なんだ、おまえ。
天使様になーんも聞かされてないのか？』
与一郎じーちゃんはそう言うとふわふわ浮くのをやめて、オレの隣にあぐらをかいた。
「聞いたような、聞いてないような」
『おまえ、とことん頼りがいがないのぉ。
誰に似たんじゃろうなぁ。ヒデ坊かのぉ』
うーんと頭を抱え込むじーさん。
ちなみにヒデ坊とは、オレのじーちゃんの名前。
オレのじーちゃんと与一郎じーさんは、幼馴染。
オレのじーちゃんはこのアロハじーさんと比べると、ものすっごく物静かな人で、読書とか囲碁とかが好きで、平和的な人。
オレは小さい時からじーちゃんと、このアロハじーさんと一緒にいることが多くって。
口下手な本物のじーちゃんの代わりに、弁の立つこのじーさんがオレのいろんな悩み相談の相手になっている。
「上位種の作った闇って、そんなにヤバかったの、オレ？
もしかして、一歩間違えたら死んでたとか言わないよねぇ？」
『なーんじゃ、自覚あるんじゃのぉ』
おいおいおいおいおい！！
死ぬのもありだったんかぃ！！
いやー。
もういやー。
悪魔なんてもう金輪際関わり合いたくないー！！

『ま、危険この上ない場所だったのは、はじめから天使様も分かっておいでだったし。

なにより、おまえさん、守ってもらったじゃろう？
ま、そのせいで今、こんなことになっておるんじゃがなぁ』
じーさんはそう言って、ついっと視線をベッドの上で死んだように眠るミカエル様に移した。
『人の世界でな。
天使様が人の姿を保たれるのは、相当な力を浪費するんじゃよ。
大天使様だから、そんな弱みはおまえのような若輩者には見せてはくれないじゃろうけど』
「じゃ、人の世界で、人の姿で天使の力を使うって。
死ぬほどキツイッてこと？」
『本来なら、おまえがそのサポートをせんといかんのよ、真理矢』
「サポート？」
『聖母マリアの特殊能力その2。
天に捧ぐ純粋なる魂の力をもって、天使の武器とならん』
意味わかんねー！！
オレがミカエル様の武器になるってこと？
なんか、剣とか銃とか、槍とか、そんなもんに変化させられちゃうってこと？
『ま、今はいいさ。
だがな、真理矢。これだけはよく覚えておくんじゃよ』
いつになく真剣な調子で、与一郎じーちゃんはオレに向き合った。
いつも屈託なく、だじゃればっか言うようなじーさんのあまりの真剣さにオレはごくりと息を飲んだ。

『おまえは確かに聖母マリアの魂をその身に宿しておる。
でも、それはおまえの一部であって、おまえ自身ではないんじゃよ』
「はぁ……？」
『おまえはおまえ。

１７歳の天林寺真理矢なんじゃ。
迷った時はわしの言葉を思い出すんじゃよ』
「よくわからんけど……覚えとくよ」
にっこり。
与一郎じーちゃんは小さい頃みたいにオレの頭をポンポンと叩いた。
そしてフッとその姿を消した。
なんか、好きな事言って、好きなタイミングでどっか行っちゃうんだもんなぁ。
とはいえ、じーちゃんになにを聞こうとか。
どうしたらいいとか、そういう相談をする気持ちもないんだけど。
オレはミカエル様を見る。
深い深い眠りについていらっしゃる。
まさに安眠中というか。
なんか警戒心がまるでないのが怖いんだけど。
「それにしても……」
ミカエル様の寝息を拾うように耳を澄ましながらぼんやり思う。
迷った時は思い出すようにって……
オレ、この先もっと何かで迷うってこと？

不安的中　☆不安なケータイ（1）

世の中で今一番すごい体験してる人って言われたら、オレ絶対に『あんたが一番』って喝さいを浴びると思う。
「おい、真理矢。飯、食わんのか？」
太いだみ声に、オレははぁぁと大きくため息をついた。
現在の時刻、夕方６時。
ここへ帰ってきたのが昼前だったけど。
オレも天使様も極度の疲労で昼をすっ飛ばして爆睡し。
やっと目が冷めた頃には日が落ちていた。
で。
今、オレは。
実家の居間のテーブルで、両親と兄貴、弟と食卓を囲んでいるが。
そこには例外なく。
極悪天使様がいらっしゃり、オレたち人間と同じように食事をなさっていた。
外人みたいなお顔のくせに、箸の持ち方も使い方も完璧で。
「美人は何をやっても完璧なのだ」
なーんて、この上なく高ピーな調子でおっしゃった。
寝てるときは本当に麗しい天使様だったけど。
起きたらやっぱり。
「言いたいことがあるのなら、はっきり言えよ、テンシン。
ま、事と次第によっては容赦はしないがな」
「いいえ、いいえ。
ささ、どんどん召し上がってください」
ああ、オレってどこまでも『長いものには巻かれちゃう』へたれじゃーん！！
「そうよ、ミハイルくん！！
真理矢のことなんて気にしないで、たくさん食べてね」

おいおいおいおい、おふくろさん。
息子はどうでもいいんですかって！！
っていうか。
「どうして、みんな、なんの疑問もないわけ？」

「疑問って何が？」
家族一斉に、それはそれはきれいなハモリでご返答。
わかってたけどさ。
絶対にこんな答えしか返ってこないって。
でも、もっと疑えって！
息子が突然、とんでもない美形の同級生を連れてきて。
今日からこいつ、住まわせてやって。
なーんて言ったらさ。
向こうのご家庭の事情もあるから、そんな簡単に事は済ませないわとか。
もっと反対しろって！
なんで即答「いいんじゃない？」ってなんなんだよ！！
「おまえ、もしかしてミハイルくんばっかりちやほやされてて妬いてるの？」
にーちゃん。
オレってば、そんな小さな男に見えるんかぃ！！
いや、実際に器は超ちっちゃいけどさ。
もう、家族にちやほやされたいかわいい時代は過ぎましたって！
「真理矢にーちゃんってば、子供だねぇ！！」
っていうかぁッ！
小学生のお前に言われる筋合いないって！！
この生意気ブラザーが！！
「もう……いい」
あきらめよう。

何を言ったところで、オレの立場がどんどん追い込まれるだけだ。
この人たちはいいんだ。
目の前の外人みたいに見えるお方が。
自分たちが毎日拝んでいる空の向こうからやってこられた天使様だ
なんて知らなくったっていいんだ。
知らないほうがむしろ幸せかもしれない。
そうだ。
オレのように不幸になる人をわざわざ増やさなくてもいいんだ。
「納得できたか、テンシン？」
にやり。
ミカエル様は意地悪な微笑みを浮かべる。

「はぁ」
ミカエル様、きっとこうなることもお見通しだったのね～。
こんな家族じゃなきゃ、オレ自身を受け入れてくれることもなかっ
ただろうな。
そうだよ。
オレの異常に強い霊感は、周りの人にはものすごく気持ち悪く映っ
てたみたいだった。
葬式のとき、にこにこして空に向かってブツブツ会話している小さ
い子見たら、誰だって気持ち悪くなるよなぁ。
それに、墓場で自分ではわいわい周りの気のいい霊たちと遊んでた
って、他の人には一人でなんかはしゃいでるようにしか見えなかっ
たし。
そんなオレをいつでもかばってくれたのが、この能天気な家族なん
だもんなぁ。
『この子は特別なんですよ。
選ばれた子なんですよ』

たぶん、この人たちは今でもオレを『特別に選ばれた子』だと思ってる。
実際、そうだったからびっくりだけど。
「そう言えば、真理矢。
さっき電話があったわよ」
「電話？」
「携帯つながらないからって隼人君が」
「隼人？」
「なんだか、すごーく切羽詰まった感じの電話だったけど。
大丈夫かしら？」
「って……その電話、いつかかってきたの！？」
「４時くらいかしら？」
オレは急いで自分の部屋に走った。
なんか嫌な予感がする。
今日のオダケンの一件といい、不安が胸をかきむしる。

「ケータイ。
ケータイ！！
ケータイ～ッ！！」
クッションの下やら、脱いだ服の下やらを大捜索する。
どこに置いたっけ？
いつもは制服のポケットに突っ込んであるけど。
手で探る限り、それらしい形はないし。
「ああ、もうっ！！」
こういう時に限って、探し物ってのは見つからない。
落ち着け、真理矢。
ケータイが見つからないんなら、鳴らしてみりゃいいんだよ。

って、バイブにしてあるのに分かるかなぁ？
「おいっ、テンシン。
おまえは何を探してるんだ？」
背後からミカエル様のお声が飛んでくる。
って、今、あんたの相手してる場合じゃないっての！！
「そうか。じゃ、これは要らないのだな」
その言葉に、オレは勢いよく振り返る。
ミカエル様がブラブラと顔の前で『探し物』を揺すって見せた。
「それー！！」
って、なんであなたが持ってるんだよ、オレのケータイちゃんを……さ。
「睡眠の邪魔だった」
おいおいおいおいおいおいっ！！
もしかして、携帯の電源切ったのってあんたかよっ！！
ミカエル様の手から携帯電話を急いで取り上げる。
天使様の顔は見ないでおく。
この場合、絶対に不機嫌というか、お怒りモードに入っているのは間違いない。

「……っと。メール、メール受信！！」
急いで電源オン。
メール受信を確認する。
メール３件。
１件目。
ＰＭ４：３２。
件名はなし。
相手は『余　隼人』
『ヤバい。

とにかく学校がヤバい。
おまえ、絶対に学校に来るな』
「ヤバい？　学校がヤバいから来るな？」
２件目。
ＰＭ５：１３。
件名なし。
相手はやっぱり『隼人』
『オレに何があってもおまえは来るな』
「隼人に何がある？」
３件目。
ＰＭ５：３０。
件名はなし。
相手は『隼人』
『健気な親友くんは預かった。
キミは何を選ぶ？
天使たちと共に闘うのか？
天の一員として人を導く神の子を誕生させるのか？
地の住人として悪魔に力を貸すのか？
天使たちを裏切り、親友を助けるのか？
すべてはキミ。
聖母マリアの心次第』
「って……なんだよ、これ！！」
最後のメールはなんなんだ。
隼人がどうしたって言うんだよ！！
天使を裏切る？
裏切って親友を助ける？
このメールの相手って。
一体誰！？

不安的中　☆不安なケータイ（2）

「最悪だな」
オレの手から携帯をひょいっと取り上げて、ミカエル様は呟いた。
「相手、知ってるんだろ？」
「口のきき方」
「相手、知ってらっしゃるんですか！！」
「おまえだって、知ってるだろう？
ずっと、不安がってるんだから」
すっとミカエル様は携帯を持つ手とは逆の手を伸ばし、コンコンっとオレの胸をノックした。
その瞬間オレの体は自然に強張り、胸の奥がドキンッと大きく波打った。
「ここにいる誰かさんがずっと怯えてるだろう？
おまえはそれに影響されそうで、ずっと不安が消えないのだ」
全部お見通し。
そんな目でミカエル様はオレを見た。
それから、もう一度最後のメールを見てため息をついた。
「こうも正面から挑戦してくるとは。
よほど自信があると見える」
「挑戦？」
ミカエル様はパチンとオレの携帯をたたむと、オレの手に携帯を握らせた。
「おまえはどうしたい、テンシン？」
ミカエル様の琥珀色の瞳が一際凛と輝いた。
その瞳にオレが映っている。
いや、違う。
金色の髪の線の細い、怯えた顔の女の人の顔だ。
彼女が言う。

『私は怖い』
あんた、なんでそんなに怖がってるんだよ。
ミカエル様を裏切るのが怖いのか？
悪魔が怖いのか？
それとも自分自身？

「オレは……」
オレの中で、聖母マリアが悩んでいる。
彼女の意志にオレは飲み込まれそうだった。
でも、オレは絶対にやらなくちゃいけないことがある。
誰に何を言われようとやらなくちゃいけないこと。
「オレは、隼人を助けに行く」
まだ、相手の悪魔の正体をオレ自身把握はしてない。
オレの中のあの人がこれだけ怖がっているのだから、相当すごい相手には違いない。
でも、オレ、男だからな。
こういう正面から売られた喧嘩は買わなくちゃならないんだって！！
へたれだけど。
オレにはちゃんとついてるもんがあるんだから！！
「理由は何にせよ」
「は？」
「おまえがそう決めたのなら、サポートしてやる」
天使様はそう言うと、オレの頭をポンポンと叩いた。
「役に立たないマリアでも、今死なれたら困るからな」
ミカエル様のこの時の笑顔が、いつもと違って優しいものに見えたのは。
オレの不安の表れなんだろうか？

不安的中　☆天の軍団と悪魔の軍団（1）

不安的中なんて。
悠長なこと言ってる場合じゃないじゃん！！
「なん……だ、これ」
夕飯も早々に切り上げて、オレはミカエル様とともに学校にやってきた。
そんなオレたちが目にしたもの。
それはオダケンの家を覆っていたあの、『瘴気』と呼ばれるドス黒い霧に覆われた学校の姿だった。
まだ、7時。
学校には先生も生徒も残っているはずなのに。
その息遣いを感じることはない。
ひっそりと背筋がびりびりと痛くなるほどの寒気とともに、学校は息を殺しているみたいだった。
「大したもんだな」
学校の様子を校門から眺めながら、ミカエル様はふうっとため息をついた。
オダケンの家の時以上の気持ち悪さが襲っていた。
頭から血の気が引いていく気がする。
汗ばむ手をズボンで拭いて、オレは口元を手で覆いながらまっすぐ校舎を見た。
瘴気の煙。
それが空へと立ち上り、校舎の上の空は渦を巻いている。
どっかのファンタジーアニメとかにありがちな風景がオレの前に広がっている。
でも、これが現実。
信じたくないけど、信じないわけにはいかない。

「覚悟はできてるのか、テンシン？
これを見て、帰りたいとか言わないよな？」
たぶん、いつものオレなら間違いなく『帰る』って言っていたと思う。
でも、今回はそんなこと言ってられない。
この瘴気にあふれた学校内にアイツがいるんだ。
小さい頃からオレの味方だった。
オレを『変なヤツ』って笑い飛ばし、初めてできた生きた友達。
それがアイツ『余　隼人』。
アイツは自分が危険な目に合っているのにもかかわらず、オレのことを優先させた。
オレのことを案じ、自分を見捨てろと言った。
ここでオレが男を見せなかったら、オレ。
『聖母マリア』の前に絶対に『人間失格』だと思う。
「じゃ、『男』を見せてもらおうか」
天使様はいつになく楽しそうに喉を鳴らして笑った。
なんなんだ、その突っかかる言い方は。
「気だけは抜くなよ。
ここからは、ヤツのテリトリー。
嫌ってくらい、ヤツの手下どもがやってくるぞ。
ほら、言っている傍から騒がしいだろう？」
そう言うと、ミカエル様はオレの顔に自分の顔を近づけた。
くっつきそうになるほど近い場所で、ミカエル様は魅惑的な笑みを浮かべ「召喚」と言った。

「召喚？」

「一人で戦ってもいいが、おまえを守りながらではヤツにたどり着く前に体力がなくなりそうなのでな」
召喚って言うのはいいんですが。
そのやり方って……
思い出しちゃいけない気がする。
すっげー思い出しちゃいけない気がする。
「早くしないと、山ほどいる下級種に喰われるぞ」
ニヤリ。
意地の悪い笑み。
つーか、喰われるのはパス！！
生きてこの場を去りたいです！！
「しょ……召喚しますっ！！」
「仕方ないな」
オレの言葉にミカエル様はため息交じりにそう返し、その美しすぎる顔をさらに近づけた。
柔らかいものが軽く自分の唇に触れたその瞬間。
オレの口は空に向かって大きく開き、白光色の光が空へと勢いよく噴き出していく。
キラキラ光る粒子を纏った白い羽根。
何人も何人もいる槍をもった天使たち。
そのどれもが見覚えのある顔で……
「おまえは本当にお年寄りに好かれてるな」
天使の軍団は見覚えのある墓場のお年寄りの皆々様。
そこにはオレのじーちゃんも、ばーちゃんもいる。
先頭に行くのはもちろん、見覚えのあるアロハシャツ。
天の戦士と言うには少々頼りなげな気もするけど、これがオレの今の精一杯だから仕方ない。
ああ、いつか、若くてムキムキマッチョな霊と仲良くなってやる！！

「さぁ。行くぞ」
天の戦士と天使様と。
オレはゆっくりと校門の鉄格子を上って降りる。
漂う瘴気の向こうから、物凄い土煙が上がっていて。
それらはまっすぐにこっちに向かって突進してきた。
牛の顔やら。
コウモリの顔やら。
犬やらなんやらわからないけど。
とにかく『人』ではない輩が、手に槍だの。
矛だの。
剣だのもって、こっちに向かって来ている。
『マリア。テンシ。ミナゴロシ！！』
『そんなこと、させてなるものか！！
行くぞ、皆の衆！！』
頼もしい、ご老人戦士たちが一斉に返事をした。
オレの目の前で白熱した戦いが繰り広げられる。
天のじーちゃん、ばーちゃん戦士と、悪魔の軍団が剣を交えている。
「頼もしいな、おまえの戦士たちは」
ミカエル様。
本心でちゃーんとそう思っていらっしゃる？
でも、ミカエル様の言うとおり。
年寄り軍団とバカにはできない。
その姿からは想像もできない速さで動きまわる戦士たちは、次々と悪魔の軍団を蹴散らしていく。
それらは天の戦士の武器で瘴気に戻り、姿を消していく。
それでも、また瘴気から悪魔たちは復活し続け、天の戦士と剣を交える。
「大元を叩かないと、どうしようもないか」
ミカエル様はそう言うと、スッと視線を校舎の方に向けた。

三階建ての校舎。
一か所だけ、電気がついている。
あれはどこだ？
あれって。
「社研？」
社会科研究室？
「大元はそこにいるらしい」
初めから分かっていたけど。
そんな感じをプンプン臭わせて、ミカエル様は顎に手をあてた。
「テンシン、おまえはどうする？
あそこに大元凶がいて、おまえを待っている。
おまえ、あそこにいる上級種と戦えるのか？」
何度も何度もミカエル様は意思確認をする。
なにが言いたいんだ？
オレは行くって言ってるのに。
「おまえの意志だけを確認したいから」
それならなおさら再確認の意味がない。
でも、どうしたっていうんだろう？
ミカエル様が不安を抱いている？
だからこんなに何度も聞いてくる？
まさか！？
相手は極悪意地悪天使様だぜ？
「ミカエル様こそ、怖気づいてないですよね？」
オレの言葉に、ミカエル様はぴくりと片眉をあげて見せた。
「『極悪意地悪天使様』に怖いものなんてあるわけないだろうが？」
オレの心の中の一言にどうやら不安も吹っ切れたらしく、いつもの
調子でミカエル様は返事をした。

不安的中　☆天の軍団と悪魔の軍団（2）

大丈夫。
なんの心配もいらない。
オレの傍にはミカエル様がいて、オレのサポートしてくれるって言うんだから。
オレはオレなりに、最善を尽くすだけだ。
「与一郎じーちゃん、ここは頼んだ！！」
オレは校舎に向かって走りながら、振り返ってご老人戦士を仕切っているアロハシャツのじーさんに言った。
与一郎じーちゃんは『しっかりやってこい！！』とニカッと笑った。
校舎に向かう道は瘴気であふれている。
黒い霧は足元を覆い隠し、気を抜けば地の底に引きずり込まれそうだった。
とにかく、あの明かりの場所まで全速力。
こんな訳の分からない霧なんかに、邪魔されてたまるかっての！！
ミカエル様とオレがその部屋の前に立った時。
オレは息が切れ、肩で大きく呼吸していた。
乱れた様子のないミカエル様は、そんなオレを静かに見守っているようだった。
ズシンッ！！
突然、物凄い圧力がオレを襲う。
重力がすごいっていうのか。
鉛のように体が重くなる。
「ヤツの気圧に押されるな」
トンッ。
ミカエル様が背中を軽く叩くと、フッと体が軽くなる。
「この先は、これ以上だぞ」
ごくりと喉が鳴った。

扉の向こうから、瘴気が漏れでていた。
他の何よりもドス黒く、圧倒的な密度の霧が自分たちを誘っているように手招きしている。

ああ、いやだ！
できることなら、悪魔と戦うなんてこと、これっきりでお願いしたい。
パチンッ！！
気合いを入れるように、オレは両手で両頬を叩く。
泣き言はお終い。
ここからは気合で行くのみ！
待ってろよ、隼人！！
オレは扉のノブに手をかける。
瘴気がノブの鍵穴からシュルシュルと蛇のように出てきて、オレの手に絡みつく。
それは霧の姿からヌメリとした感触を伴った触手へと姿を変えた。
「うぇぇぇっ！！」
オレは片方の手でそれを薙ぎ払おうとしたけれど。
それはどんどん腕を昇り、締め付ける。
「ミカエル様！！　どうにかして！！」
「これくらいで泣くな、バカテンシン」
「オレ、武器ないですからっ！！」
「じゃ、武器を出せばいい」
簡単に言うなって！！
武器の出し方知ってたら、オレ、ちゃんとやってますって！！
「頭の中で武器をイメージしてみろ。
ま、今のお前じゃカッターナイフに毛が生えた程度の武器しか出て

こないだろうがな」
カッターナイフに毛が生えた程度。
でも、それでもなんでもいい。
これが取り除けるなら何でもＯＫだ！！
「カッターナイフ、カッターナイフ。
ナイフナイフナイフ」
頭の中でイメージを作る。
でも、どうもミカエル様の一言が邪魔をする。
カッターナイフに毛が生えた程度。
カッターナイフに毛？

光が頭上から降りてくる。
残った片手でそれを掴んでみる。
「やっぱりねぇ……」
イメージどおりですよ、この武器。
カッターナイフの持つところに、なぜかファーがついている。
オレ、脳トレのセンスもないかも。
「って、離れろって！！」
カチカチとカッターナイフのナイフの部分を伸ばし、それに突き立てる。
刺した部分から瘴気の霧がもやもや立ち上り、それは姿を消した。
「ま、初めてにしては上出来だろう。
面白い武器だがな」
ミカエル様は苦笑して見せる。
あなたが『カッターナイフに毛が生えた』なーんてことを言わなけりゃ、もうちょっとマシな剣とか銃とか、そういったカッコいい武器絶対イメージしてたと思うんすけどね。
「心外だ」
苦笑から真顔に変わるミカエル様を見ないようにして、今度こそオ

レはドアノブを回す。
キィ……
こんな音したっけ、この部屋？
瘴気の溢れる部屋の扉がゆっくりと開いていく。
その先にあったのは。

「待ってたよ」
聞き覚えのある声とともに、その人はそこにいた。
『ウワオォォォン』
真っ黒い巨大な竜の背にまたがって見下ろす、黒い二枚の羽を持った人。
天使に似て、天使でない者。
紅玉の瞳。
赤茶の長いストレートの髪。
身の細い、美しい男性。
オレはその人をこう呼んでいた。
「山田太郎先生？」
彼の向こうにマグマ流れる漆黒の山々がそびえ立っている。
社研はもはや部屋でなく、地獄へと続く最初の一歩みたいだった。
「待ってたよ、天林寺君」
彼はにっこりとほほ笑んだ。
「地獄へようこそ」
不安的中？
おいおいおいおいっ！！
悪魔って。
上級種って。
先生ってことなの！？

悪魔の使い　☆全ての元凶（1）

悪魔はその昔、みな天使だった。
神の考えが分からず。
神がなぜ人を創ったのかを理解できず。
神を疑い。
神を呪い。
神に逆らい。
闇の世界に堕ちたる者たち。
それが悪魔。
上位種は天使の頃の名残である羽を持っていた。
美しい容姿は変わることがなく。
ただ、心を神と分かつことになった者たち。
みな、かつては同胞。
自分と同じ天使の称号を持つ者たち。
でも、決めたのだ。
神の剣として、神の逆賊共を討ち滅ぼすと――
たとえ、逆賊の長が自身の兄であろうと。
そう、ルシフェル。
最高位の天使でありながら地獄へと回帰した、我が兄であろうと……

「待っていたって……あんた、先生だろ？
なんだってこんなこと」
オレさ、この人ヤバいかもって思ってたんだよね。
だいたい、ミカエル様級の超絶美形ってだけでもとんでもなくバケモンだってのに。
結果は最悪。

すべての元凶。
ってことは、オダケンをあんなにしたのって。
「あんたかよッ！！」
オレの言葉に山田先生はニヤリとほほ笑んだ。
ミカエル様。
オレ、ちょっと反省した。
あんた、極悪天使で悪魔みたいに笑うって思ったけど。
あれ、撤回する。
悪魔の笑い方って、あんたのほほ笑みなんかより数段性質悪くて気持ち悪い。
「お褒めにあずかり光栄だよ、天林寺君。
それともマリアって呼ぼうか？」
「オレは天林寺真理矢！！
マリアなんてのは、オレの……なんだろう？」
振り返ってそこにいらっしゃる天使様を見る。
ミカエル様は例の如く呆れ顔で一言。
「バカテンシン……」
確かに、緊張感なさすぎたな。
「まぁいいか。
天林寺君。
それより、余興は楽しんでもらえたかぃ？
良い体験だったろう？
キミの経験値にも大いに貢献したと思うんだけど」
待てよ、待て！！
おまえ、今聞き捨てならないこと、スラッと吐きやがったよな？
オダケンのこと。
余興って言った？
「……ざけんな」
余興であんなにしたって言うのかよ！
オダケンはオダケンは……

死にたいくらい苦しがってたんだ！！

「だから殺してあげたよ。
苦しがっているから。
それにそこの天使君も言ったでしょ？
あとは私の問題だって」
確かにそれらしいことは言っていた気がする。
でも、あんた悪魔だろ？
ミカエル様は『身内』の問題って言ってたろ？
「そうだねぇ、身内の問題って言ってたかな？
でも、残念。
私は彼の身内じゃなぁないの。
じゃぁ、なんで私の問題なのか。
それは心をいじったのが私だから。
天使は神じゃない。
人の命を奪うとか、そう言った倫理的な問題には手を出せない。
面倒だと思わないかぃ？」
おいっ！
身内じゃないおまえが。
神でもないおまえが。
オダケンの人生勝手に奪ったって言うのかよっ！！
最低じゃん！！
最悪じゃん！！
ふっざけんなッ！！
「仕方ないでしょう？
私は悪魔。
それもお仕事」
シレっとした態度で山田太郎もとい、上級種らしい悪魔はニヤニヤ

笑った。
オレ、この沸々とわき上がる怒りをどうにかしてアイツにぶつけてぇ〜！！
「マリア、男に生まれて物騒なことばっかり言うようになったよねぇ、ミカエル？」
「おまえのような輩に気安く呼ばれたくない」
ミカエル様の返答に悪魔はクスクス笑う。
「相変わらずの性格だねぇ。
高飛車で、心を開かないかんじ？
ま、そうだよねぇ。
一番信じていた身内に裏切られれば、そんなもんだよねぇ」

どうやら、この悪魔とミカエル様は相当前からの知り合いらしい。
だから呼び捨てしてたってことか。
じゃ、はじめに会った時から悪魔がコイツって知っていながらオダケンの件を引き受けたってこと？
「ミカエルはね。
私に初めて会ったとき、なんとなく感じてはいたんだよ。
でも確証がなくて、私のゲームに付き合うことにしたんだよ。
かわいそうに。
人の姿に変わった時に、天使の力の大半が使えなくなる。
その力を引き出すにはね、マリアであるキミの力が必要なんだよね」
「はぃ？」
「ミカエルはプライド高いからねぇ。
人間ごときに頭を下げて、力を貸してくださいなんて言えないよねぇ」
「アスタロス！！」
「いいかぃ、天林寺真理矢君。

天使はね。
人の世界では神によって力を制限されるの。
天使の力は強大だから、それによって人の世界に混乱を招くのを恐れて神がそうしたの。
だから、その力を発揮するにはね。
神に選ばれし者の力が必要になるんだよ。
その一人がキミ。
ミカエルにとって、キミは彼の力の扉を開ける鍵なの」
フフフ……面倒な規則だねぇと付け加えて、アスタロスと呼ばれた悪魔は心底面白そうに笑った。
「ちなみにね、キミの親友の余　隼人君も、神に選ばれた者なの。
『使徒ヨハネ』
神の子に最も愛された弟子であり、マリアといつも一緒であった者。
懐かしくないかぃ？
彼といたとき、懐かしくなったことはない？」
誰が誰だって？
隼人が『ヨハネ』？
『黙示録』とか書いた人？
オレ、頭爆ぜそう。
これ、ほんとにリアルかよ！？

悪魔の使い　☆全ての元凶（2）

昨日まで、オレ、普通の高校男子だったのよ。
ちょっとエロい会話をしちゃったり。
彼女ほしーいなんてほざいたり。
マックで帰りに買い食いしたり。
くだらない会話で大笑いしたり。
自転車で走る他の学校の女子を見て興奮したり。
テスト勉強とかいいながらメールしたり。
雑誌読んだり。
寝ちゃったり。
なのに今目の前にいる悪魔はベラベラと。
頭の痛くなるような聖書の中のお話をし続けてやがる。
オレ、宗教興味ないですから。
一応、表面上仏教徒のお家柄。
聖書の話されたって、従順なる信者にはなれそうもない。
コイツ、それ分かってる？
「ほんと、今回のマリアは変わってるな、ミカエル」
「おまえには関係のない話だ」
ミカエル様とアスタロスの視線に火花が散って見える。
こんなお怒りモードのミカエル様には、できることなら触れたくない。
「っていうか、おいっ！
隼人、どこやったんだよ！！」
余分な話ばっかしやがって。
「私のメール見た？
一人でおいでって言わなかった？」
「見た。
一人でと書いてあった気がする。

でも、戦力的にオレとあんたじゃ、オレ圧倒的に不利だもん。
これくらいのハンデはあっていいと思う」
「……反抗的なのね」
は？
っていうか。
どうしてオレ、誰にでも素直な『ＹＥＳ』マンじゃなくちゃいけないわけ？
意味不明だけど？

「朕、なってないみたいね、ミカエル」
「朕などしてないし、おまえに従順である必要はない」
「それでお互いやり辛くないっていうところが、面白いには面白いんだけど」
そうだねぇ……とアスタロスは顎をさすって見せた。
それからオレにちらりと視線を投げると、またニヤリと笑って見せた。
「じゃ、行ってみる？
ヨハネを助けに」
「おまえ、ムカつく！！」
「反抗的な目は嫌いじゃない。
その剥き出しの感情に応えてあげよう。
ただし、キミの天使はここに置いて行ってもらうよ」
まぢかよッ！！
それハンパなくヤバい条件じゃね？
「私、そこの天使には個人的にもう少し話があるの。
その間、キミに自由をあげよう。
ヨハネを助け、戻ってくるといい。
でも簡単じゃないよ。

ヨハネにはそれなりに試練を与えてある。
彼もさ。
さすがに神に選ばれただけあって、普通の人間のように簡単には心をいじらせてくれないの。
だから、心の中に直接私の部下を派遣したよ。
彼は一人で傷だらけになって戦っていると思う。
その彼をキミは助け、ここへ戻って来れるかな？」
「隼人を助けたら。
おまえ、半殺しじゃ済まさないからな！！」
オレの返答に、アスタロスはまた喉を鳴らして笑った。
「威勢がいいのも大好きだよ。
じゃ、頑張って。
地獄のその向こうへ行ってごらん」

竜の背にまたがったまま、アスタロスはオレに道を譲った。
竜が移動するたびに、地響きのような揺れがする。
「テンシン」
ミカエル様に名前を呼ばれ、オレは一度振り返る。
っていうかさ。
テンシンって全然名前じゃないし、甘栗みたいなんだけど。
オレ、この短時間で、なんか妙にその呼び方になじんじゃってる。
ミカエル様は特別ってこと？
なーんて、そんなふうにおまえなんかが思うのは百万年早いって言われるのがオチだな。
「テンシン」
だーかーらぁ。
何度も呼ばなくたっていいじゃないっすか。
だいたい、あんた、オレの心の声丸聞こえなんでしょ？

「テンシン」
「わっかりましたよ。なんですか、ミカエル様！！」
めんどくせー。
思ったよりもこの方、めんどくせー。
「絶対に帰ってこい」
いつになく真顔で。
いつになく優しいかんじのミカエル様にオレは苦笑する。
このお顔。
女だったら、即死だな。
っていうかさ。
あんた、オレを信じてるんだろ？
なら、そんな不安な目で見るなよ。
オレ、絶対帰ってくるし。
隼人も助けるし。
オレ、へたれちゃんだけど、か弱い女の子じゃぁないんすよ。
ついてるもんはしーっかりついてる男の子。

「ミカエル様こそ、オレが戻るまでにその悪魔にやられちゃわないでくださいよ」
ミカエル様とオレが離れるということは、ミカエル様は満足に天使としての力を使えないってこと。
まして、相手のテリトリーでは、さらに分が悪い。
それをオレも、ミカエル様も承知したんだ。
「おまえに心配されるほど、落ちぶれてはいない」
そうそう。
その調子。
それでこそ、オレの知ってる天使様。
ちょいちょい弱いとこ見せちゃってさ。
案外、可愛いところもあるんだねぇ。

「じゃ、オレ、ちょっくら行ってきますから！」
ミカエル様に背中を向けて、オレは小さく手を振った。
ミカエル様の姿は見えないけれど。
オレの背に向かっていつものあの意地悪な笑みを浮かべている。
それが手に取るように分かった。
これがきっと分かり合えてるってことだな。
オレはアスタロスが導く道へと走り出す。
マグマ吹き荒れる黒い山脈の向こうへ。
振り向くことなく、ただひたすらに――

悪魔の使い　☆ミカエル様と悪魔の対話

「マリア様、どうかお気を確かに」
ああ、どうしてこんなことになってしまったの。
「マリア様、こうなっては致し方ございません。
これも天の御意思。
きっと師は復活いたします」
ああ、なぜそんなことが言えるの？
この子の命を神は、天使たちは見捨てたのではないの？
「マリア様。
私目が師に代わり、いつもお傍におります。
師に代わり、マリア様を慕い、マリア様をお守りいたします。
ずっと、ずっと、永遠にこの約束は違えません。
わが師との約束を未来までお守りいたします」
ですから、これ以上、悲しまれるな。
そうやって、あの子は言った。
我が子が一番目をかけた、一番の弟子。
最愛の使徒。
名は『ヨハネ』。
ああ、ヨハネ。
私はあなたをどんな窮地に追い込んでしまったというのでしょう。
これも、すべて神の意志だとあなたは思うことができるの？
だーかーらぁ。
助けだせばいいんじゃん。
マリア様、ここんとこ、悩みすぎなんじゃないの？

「行っちゃったけど、本当にいいのかぃ？」

真理矢の姿を見送ったアスタロスはそう言って、こちらを向いた。
「戻って来れるって本当に思ってるのかぃ？」
嫌な言い方をするのは、今も昔も変わらないらしい。
「だって、アレ。
マリアであって、マリアじゃないじゃない？」
聖母マリアであって、マリアでない。
確かにアスタロスの言うとおりだ。
マリアに『男に生まれ変わりたい』と言われ、その願いを叶えてやった。
どんな意図でそう言ったのか、その真意すら問わなかった。
それがいけなかったのかもしれない。
『天林寺真理矢』という魂と。
『マリア』の魂は独立し、融合できていない。
転生はしたけれど、一つの器に二つの魂が宿っているような状態だ。
つまり。
アイツの中で、自我が二つあるということ。
もしも。
マリアの自我がアイツの中で勝る瞬間が来たとしたら。
それはそれで、望ましい結果ともいえる。
我々、天の軍団が必要としているのは『聖母マリア』の力。
『聖母マリア』として覚醒してくれるのなら、それほどやりやすいことはない。
でも、それを望まない自分がここにいる。
「おまえ、ちょっと変わった？」
アスタロスが小首をかしげながら、そう言った。

「昔のおまえなら、無理やりにでもマリアとアレを融合していただろう？

だって、おまえは心を誰かに開こうなんて思わないはずだもの」
昔のことをペラペラと、おしゃべりなところも変わらない。
「サタンの復活はおまえにとっては嬉しい再会の時だ。
それももうすぐ為せる。
私はその使いだもの」
サタンの復活。
それは地に堕ちた兄の復活の時。
復活できないようにすることができたのなら、こんなに嫌な思いを
毎度しなくてもいいはずだろうに。
そう。
このおしゃべりな悪魔（サタン）の使いと、悪魔の復活の度に顔を合わさなく
てもよくなるはずなのに。
「おまえはおしゃべりで、好きじゃない」
その一言に、アスタロスは大きく笑った。
腹を抱え、下品に笑ってみせる。
天にいたときと、全く違う。
姿こそそのままだけれど、性格は全く変わってしまった気がする。
「私はおまえが好きだよ、ミカエル。
おまえは突けば、こちらに堕ちる。
それが見えるんだよ、私には」
過去と未来を見通す力を持つ悪魔、アスタロス。
その言葉に、絶対の自信が見え隠れしている。
「心は主とともにある。
おまえたちなどに明け渡すものはない」
「そう？
でも、おかしいねぇ。
おかしいよ、ミカエル。
本来なら、告知に来るのはガブリエルだろう？
なぜ、マリアの記憶をいじってまでおまえは地上に降りた？
それは対話を望んだからじゃないのかぃ？

神の真意に揺らぎを感じたからじゃないのかぃ？
マリアと同じように。
天に不信を感じているんじゃぁないのかぃ？
それとも、あの出来損ないを助けに来たとでもいうのかぃ？
聖母にはなれない、あの人間を？」

天に不信を感じている？
主を信じられなくなっている？
自分が？
マリアが？
「それはない」
きっぱりと答えて見せる。
兄とは違う。
兄、ルシフェルは。
神が人を創ったことに疑問を感じた。
神に似せた出来損ないだと罵倒していた。
天使よりも力なく、器だけ似た存在に嫉妬していた。
神の愛が天使よりも人に向いたことに、彼は激怒していた。
それはそんなに大事なことだったのか？
幼かった自分には、兄の意思が分からなかった。
「おまえは天に不信を抱いて、地に下った。
ルシフェルとともに、人を守ることを拒絶した。
天の意思に背き、地を這うことしか許されない存在のおまえにとやかく言われる筋合いはない」
「はっきりしているねぇ。
やっぱり、人のようには扱えないか？
一応は、四大天使だものね。
ま、位としては私よりも下位だけど」

「おまえは天に住まうものではない。
位も今のおまえには関係ないだろう？
悪魔の公爵となったおまえには」
「可愛くないねぇ。
昔はもう少し、可愛げあったのに。
会うたびに生意気になっていくみたいだね」

「いい加減、回りくどいやり方はやめたらどうだ？
おまえはベルゼバブのように気長にやれる性質じゃない」
その言葉に、アスタロスは一瞬、嫌な顔をして見せた。
それから、今一度、ニヤリと薄笑いを浮かべて「いい根性だ」と返した。
「おまえの望みどおりにしてあげるよ。
でも、最初に言っておく。
私はベルのように優しくないよ。
おまえが信じた『マリア』ちゃんが帰ってくるまで、なんて悠長な時間はあげるつもりはないからね。
死にたくなければ、おまえの全力を見せてごらん」
「交わした約束は違えない。
これは自分の信条だ」
そう。
決めたのだ。
初めて、テンシンの魂に触れた時から。
もう決めていたのだ。
新しい『聖母マリア』となるアレに、未来の可能性を見た時から――
あの男子を信じ、あの男子とともに歩むと……
その先の未来を踏みにじろうとする輩は全力でもって排除する。
ただ、それだけのことだ。

今、残されているのはテンシンにずっと託してあった一枚の羽根。
彼の者の魂にずっと触れていた自分の羽根が、今残された唯一の武器。
「ま、これではまともな武器など作り出せはしないだろうが」
それでも、これで今は十分。

羽根が手の中でその姿を変える。
想像はしていたが、やはりアレの経験値をもう少し稼がないといけないな。
形を変え、作りだされた武器の柄を握る。
握り心地は悪くない。
「銅の剣……笑わせる」
アスタロスがまたクツクツと喉を鳴らして笑った。
仕方ないさ。
勇者は初めから、伝説の武器など携えられないのだから。
「おまえには十分だ」
剣を構え、前を見据える。
銅の剣だろうと構わない。
武器の種類など問わないのだ。
武器は意思を象徴するものにすぎない。
今の自分の意思があれば、この目の前の輩に負ける気はしない。
そう、守るのだ。
アレが帰ってくる場所を、自分は絶対に守らねばならない。
それが自分の使命なのだ。
黒竜が威嚇する。
テンシン。
絶対に、自分を失望させるなよ。

届いたかどうかは分からない。
でも、アスタロスに向き合う自分の耳に、微かに『分かってますよ』と返事があったような気がした。

悪魔の使い　☆案内悪魔？（1）

全速力ってのは長くは続かない。
「っていうか、マジ運動不足すぎ……」
体育大会とか、マラソン大会の時にもっと普段から体鍛えておけばよかった。
なーんてときと同じように、今大後悔中。
「隼人、どこだ！？」
ここまでやってくるのにだ。
ご丁寧なことにあのアスタロスという悪魔は道しるべというか、標識を置いてくれていた。
矢印で『こっちへどうぞ』なんてメッセージまであった。
それを見るたびに、オレ、罠に思いっきりかかっちゃってるよと痛感しまくり。
最終地点についたとき、そこに案内看板を持った人。
もとい、見たからにチャラ男なかんじの悪魔が立っていた。
「おっ待ちしてましたぁ、マリアさん。
こっからさきはぁ。
オレっちが案内するですよぉ」
茶髪に鼻とか耳とかピアスして。
レザーのパンツにジャケット羽織って。
体中チェーン巻きまくった悪魔が軽い口調でそう言った。
明らかに見た目はあの二人には劣るけど、間違いなくオレよりはカッコいい。
つーか、オレより見た目よくない人型悪魔っていないのかよっ！
「あー。
それは、力の差ってやつですよぉ。
悪魔も天使も、力が強ければ強いほど美しいんでぇ。
っていうと、マリアさんは弱小ってかんじ？」

失礼極まりないこと言いやがって！
オレの場合、力とか関係ないの！
これは遺伝！
美形になるには整形が必要なの。
でも、整形したところで遺伝子は変わらないから、子供世代に責任は持てません。
「おっもしろい人間ですねぇ。
っていうか、マリアさんってこんなかんじだったかなぁ？
なーんか、オレっち、やりにくいですよぉ」

おまえのやりやすい、やりにくいはこの際どーでもいいっての！
それよりも。
「おまえ案内悪魔なんだろ？
早く隼人んとこへ案内しろ！！」
オレの言葉に、悪魔はうーんと首をかしげた。
「マリアさん、せっかちですぅ。
やっぱり、やりにくいですぅ。
オレっちのペースでやらせてほしいですぅ」
このあーくーまぁ！！
こっちは急いでいるってのに、間延びしたしゃべり方してんじゃねぇ！！
「男になったマリアさん、物騒で怖いですぅ。
でも、いいですぅ。
案内しますぅ。
では、準備運動してくださーい」
「ふっざけんな！
オレ、今ここまで全速力で走ってきたの、わかる？
もう十分、運動したの。

準備運動なんて要らないの！！」
そう一気に言うと、悪魔は「いいんですかぁ？」とまた聞いた。
「オレっちはぁ、肉体的なことを言ってるんじゃないっすけどぉ。
でも、マリアさんが良いって言うし、急いでるんですからぁ、いいってことでぇ。
じゃ、遠慮なく」
そう言うと、悪魔は持っていた看板に息を吹きかけた。
すると、看板はみるみる姿を変える。
「ウッソ、マジで……」
目の前に、真っ黒い大きな鎌がある。
黒光りして、異様に切れ味よさそうに見える。
っていうか。
それで、あんたは今から何をしようっていうんだよ。

「んじゃぁ、マリアさんの準備ができているってことで」
ブゥンッ！！
目の前の悪魔が、思いっきり鎌を振りあげた。
「ちょちょ……ちょーっと待て！！
そんなんで切られたら、オレ死ぬ。
マジ即死ですから！！」
両手を目の前に突っ張って出して見せる。
悪魔は振りあげた鎌をガッツリ地面に刺すと、「おかしいですぅ」
と言った。
「オレっちはぁ、案内しようとしているだけですぅ。
マリアさん殺すのはぁ、確かに手柄なんですけどぉ。
それ、オレっちの仕事じゃないんでぇ、ご主人に怒られちゃいますぅ」
お願い。

もうちょっと、的を絞って、要点だけ伝えて！！
「オレっちはぁ、今からこの鎌でぇ。
マリアさんの肉体とぉ、精神をぉ切り離すんですぅ。
強い精神力を持ってもらわないとぉ、切断の時にそのまま肉体まで切っちゃうことになるんでぇ。
でもぉ、準備運動はマリアさん要らないって言うしぃ。
いいんですよねぇ？」
そういう説明はきちんとしろって！！
なーにが。
『強い精神力を持ってもらわないと、切断の時に肉体まで切っちゃう』
ってさらっと言ってやがるんだ！！
それって事故じゃすまないじゃん！！
もしも、それで間違って肉体まで切れちゃったら、オレ、成仏ってことでしょ？
「はぁい、正解ですぅ。
たぶん、天には行けません。
だって、地獄で悪魔に殺されちゃうんですもん」
最悪なんてもんじゃないじゃん、それ……
「あ、でも。お仲間もいますからぁ、安心ですぅ」
「隼人！！
隼人が死んでるってことか！！」
「ヨハネさんは今、戦いの真っ最中ですぅ。
ご老人ですぅ。
ワンちゃんも一緒でした」

悪魔の使い　☆案内悪魔？（2）

老人？
ワンちゃんも一緒？
それって、それってもしかして！！
「オダケン！！」
「オダケン？
なんですぅ、それ？」
案内悪魔は小首を傾げる。
でも、ヤツは確かにお仲間って言った。
それはたぶん、オレと関わりが深い人ってことだと思う。
だとすると。
地獄に最近堕ち、かつ理由が悪魔に殺されたっていうことだとしたら、『オダケン』以外にありえない。
「なぁ、ちょっと質問していいか？」
「短いのでお願いしますぅ」
「地獄に堕ちた人間って助けられないのか？」
オレの質問に案内悪魔は「できますよぉ」と答えた。
「天に属する神に認められた者ならできますよぉ」
天に属する神に認められたもの？
天使様は勿論だけど……マリア様の生まれ変わりなら。
「じゃ、オレも？」
「ああ。
マリアさんも、たぶんできるんじゃないですかねぇ。
でも、オレっち。
それが成功したところ見た事ないんですよぉ」
「なんで？」
「だってぇ、助ける前にソイツが死んじゃうんですもん」
マジですか……

死んじゃうってなんでだよ。
「そりゃ、オレっちが殺しちゃうからに決まってるじゃないですかぁ。
オレっち、悪魔だし。
地獄の門番だし。
ご主人が殺した人間や天使を天になんて帰したら、オレっちがご主人になぶり殺しですぅ」
ってことは。
オダケンを助けるためには、この案内悪魔をぶち殺さなくちゃ無理ってことか。
結構、大問題じゃん。
「また物騒なこと、考えてますねぇ。
オレっちが別にマリアさんと戦ってもいいですけどぉ。
今のマリアさんじゃぁ、オレっち楽勝ってかんじなんですけどぉ」

やっぱ、そうなっちゃう？
オレのこと弱小とか言ってたもんなぁ。
っていうか、かなり失礼な事言われてる気もするけどね。
ま、考えてたって仕方ない。
隼人助けてからもう一回練り直しだ。
オレは大きく深呼吸する。
大丈夫。
オレ、約束したんだからな。
あの天使様のことだ。
約束破ったら。
地獄だろうと構わずにやってきて、もう一度地獄を見させられるに違いない。
っていうか、オレにはそっちのほうがよっぽど怖いんだけど。

「おいっ。準備いいぜ。
一気にやってくれ」
オレの言葉に案内悪魔は「そうですか」と答えた。
「じゃ、遠慮なく」
大きく鎌を振りあげて、オレに目がけて思いっきり振るう。
見てらんねー。
まぢ怖ぇって！！
鎌が食い込む瞬間は目を開けていられなくて、オレは咄嗟に目を瞑っていた。
ザシュッ。
オレの体に鎌が食い込んだ瞬間、体が軽くなったような気がした。
痛みはない。
血とか、そんなもの出てないよなぁ？
頼むから、腹から下がないなんてホラー映画みたいなことはなしにしてくれよぉ。

ゆっくりとお腹から下を見る。
足はある。
血も出てない。
違うのは、自分の体が透けていて、自分の体が足元にうつぶせに倒れていることくらいだ。
「マリアさん、よかったですぅ。
成功ですぅ。
魂と器、分離できましたよぉ」
案内悪魔がよかったよかったと胸をなでおろす。
いや、それはオレの方なんすけど。
「ではでは、これからヨハネさんの心の中へ案内しますです。
ええっと。

武器はありますかぁ？」
武器？
あるって言えばあるけど……これで戦える相手なんだろうか？
「おっもしろい武器ですねぇ。
ナイフ？の割には極小ですぅ」
サバイバルナイフみたいなごっついのじゃなく、これカッターですから。
「じゃ、武器もＯＫっということで。
頑張ってくださいねぇ」
ニカッと白い歯を出して悪魔は笑うと、オレの手をぎゅっと握りしめた。
瞬間、オレの視界が揺らぎはじめ、それは大きなうねりとなった。
頭の先から地中へと吸い込まれるような感覚が襲う。
「無事に戻ってきてくださいよぉ、マリアさん。
帰ってきたら」
『あんたをぶちのめして殺すのはこのオレっちなんですから』
揺らぐ意識の中にはっきりと聞こえたのは、あの悪魔の声だった。
それきり、そいつの声は聞こえなくなり、オレの意識もぷっつりと途絶えた。

悪魔の使い　☆まさか隼人君？（1）

なんだか大きなものがオレの目の前にそびえ立っている。
全身毛むくじゃら。
オレの身長よりはるかにでかく、見上げるようにそこに立つ。
全身を覆う毛は全部逆立っていて、腕とか、足とかやたらに太かった。
それがゆっくりと振り返る。
「うるさいのが来たようだのぉ」
下の歯から二本、とんでもなく太い牙がにょっきりと姿を見せている。
簡単にこれを表現するのなら『鬼』ってかんじ。
でも、そんな日本ちっくなものじゃぁ、たぶんない。
これもおそらく悪魔。
でも、人型っぽいのに獣チック。
じゃ、そんなに強くないってことかな。
さっき言ってたもんな。
力の強さが美しさに関係するってさ。
どう見ても。
どう頑張って見ても、キレイには見えない。
つーか、オレ勝った？
「おいっ、バカ真理矢ッ！！
おまえ、オレのメール見たん？」
そいつに隠れて見えなかったけど、その奥の方から聞きなれた声が聞こえてきた。
「隼人！　無事か！！」
オレの呼びかけに、隼人は大きくため息ついて「大馬鹿野郎！！」と叫んだ。
「来んなっつっただろうが！」

「来んなっつわれて、『はい、そうですか？』とでも言うと思ってたのかよ！！
バカはおまえだっつーの！」

「おまえの霊感強いの、オレよく知ってるんよ！
こんなとこ、おまえ来たら最悪なことになるに決まってる。
オレはおまえを思って、言ったんよ！！」
「そんなん、オレもよくわかっとる！！
でも、オレにとっておまえは、危険を冒してでも助けなくちゃなんない相手なの！！」
オレの言葉に隼人は一瞬言葉を飲み込んだ。
でも、すぐに「お前に何ができるんだ」と聞いた。
「こんなん、倒せるとでも思っとるん？」
チラリと『こんなん』と呼ばれたものに目を移す。
大きくそび立つ巨大な悪魔。
うーん。
そう聞かれると、倒せる自信はまったくなし。
しかもノープラン。
「だったら、犬死じゃねぇ？」
まったくそのとおりって。
ダメダメ。
オレは約束あるんだから。
なにがなんでもぶったおす！！
ここでぶったおさなかったら、あとでぶちのめされる。
どっちにしろ、オレは必死になんないとダメなわけ。
悪魔の向こうにいる隼人の姿が目に入る。
学生服姿だけれど、その服はいたるところが切り裂かれている。
その服の切れ目から、血がにじんでいるのが見えた。

「おまえ、ボロボロじゃん！！」
「たわけ！！
こんなん、普通の生活で出くわしたことないっつーの！！」
「そりゃそうだ」

逐一、ごもっとも。
オレも学校で小悪魔ちゃんつーか。
この目の前にいるのに比べたら、ほんとに小さいサイズに突然襲われた時はもう、どうしていいかわからなかったもんなぁ。
いやぁ。
あんときのオレに比べたら、隼人君。
キミはとっても冷静よ。
っていうか、尊敬。
「感心してるなっての！！
この状況ヤバヤバなん、もっと自覚しろって！！」
「わりぃ。
で、どうしたもんかね、隼人君」
「おまえ、マジで言っとる？」
「んー。半分は」
「この、たわけっ！！」
隼人は大きくため息をつく。
オレ、ほんとにノープランで申し訳ないんだけど。
こういう場合、気合で乗り切るしかオレたちみたいな『ふつー』の高校生には手がないと思うんだよねぇ。
「おまえ、気合で乗り切ろうとか思っとるやろ？」
「わかる？」
「つーか、一瞬おまえに期待したオレがアホやったわ」
一瞬でも一応は期待してくれたのねぇ。

じゃ、やっぱりその期待を裏切らないようにしないと。
オレ、もっと期待されてるみたいだし。
どこかの怖ーい天使様に。
「武器あるし。
あとはオレとおまえ次第だって思う」
そう言って、オレは胸ポケットから例のカッターナイフを取り出し、
大きく掲げて見せた。
「それ、なんなん？」
隼人が眉をこれでもかってくらいに寄せて尋ねた。
ま、そうなるわな。
「武器。聞こえんかった？」
「聞こえた。
変なもんついたカッターナイフにしか見えんけど、オレの目の錯覚
？」
「んにゃ。カッターナイフよ、これ」
オレの返答に隼人は絶句した。
オレ、なんか隼人の機嫌損ねること言ったっけ？

「ホント、おまえってアホやな。
ま、おまえらしいって言やぁ、そうなんやけど」
「とりあえず、なせば成る。
なさねば成らぬ、何事もっちゅーことで」
オレの言葉に、隼人は満面の笑顔を浮かべた。
「だな」
オレはもう一度、目の前にそびえ立つ悪魔を見る。
悪魔はオレたちの会話の最中、それを傍観しているように手を出し
てこなかった。
たぶん、この悪魔。

これがオレたちの最後だからと、お情けをかけているっぽい。
それはそれでなんか腹が立つ。
『普通の高校生』なめんじゃねーぞ！！
「最後の別れは済んだってことかのぉ。
ワシは遠慮せんぞ」
ギョロギョロとした血走った眼で、悪魔はオレを凝視した。
最後の別れのつもりなんか毛頭ない。
オレは隼人とここから出るんだし。
でも、できるなら手加減してほしいっ！！
「おいっ！　真理矢！
そいつ、思った以上に早いぞ！！」
隼人の声が飛んでくると同時に、悪魔の野太い腕がゆっくりと動く。
おーい、隼人君。
キミの助言はありがたいけど、思った通りのロースピードなんですけど。
「へっ！？」
気がついた時には、オレの体は吹っ飛んでいた。
まてまてまて！！
なにがどうなったって言うんだよ！！
悪魔の腕がオレに向かって伸びてきたのは見た。
超ゆっくりじゃんって思ったよな。
ちゅーか、途中からスピード変わったよね？
1速↓5速。
そんなギアチェンジあり？

ドサッという重たい音とともに、オレの体は地面の上に叩き落ちた。
一応、受け身はとってはみたものの。

想像以上の大ダメージ。
なんか殴られたというか、ぶっ飛ばされたっていうか。
とにかく、ものすごく体全部が痛いって言うのが本音。
「真理矢！！」
隼人の声が飛んでくる。
心配されちゃってるよねぇ、オレ。
助けに来たのはオレのはずなのに。
オレ、めっちゃ弱いんだもん。
これじゃ、なにしに来たんだか全然わかんねぇ。
っていうか、オレ。
やっぱりあの天使様にすんごく守られちゃってたんだろうなぁ。
今更だけど、超実感。
無事に帰ったら天使様に謝っちゃおうかな？
「だいじょうぶ、だーいじょーぶよ、隼人君」
オレはゆっくり起き上がる。
なめてかかっちゃいけないのは分かっていたけど。
こうも見た目と動きにギャップがあると、やりにくいったらない。
で、そんな相手にどう立ち向かうかってとこだけど。
オレよりも運動能力がはるかに上の親友に、囮になってもらうしかチャンス作れなさそうかなぁ。
「頼んじゃってもいいよねぇ」
オレの言葉に、隼人は苦笑した。
長年一緒にいるせいか、隼人にはオレの言いたいことがちょっとした言葉だけで伝わる。
ん？
長年、一緒にいるせい？
なんかアイツ。
オレの心の声、聞こえてるっぽいときがあったよなぁ？
「おまえ、頭ン中おしゃべりすぎるんよ」
言いながら、隼人は背を向けている悪魔の足に向かってスライディ

ングし、そのわずかな隙間をかいくぐってオレの隣にやってきた。

悪魔の使い　☆まさか隼人君？（2）

「いつから聞こえてたの？」
「おまえがオレと遊ぶようになる前から。
オレ、おまえのやーらーしーい想像とかまで全部知っとるよ」
さらりとそう、言いのける親友H。
辛いわ。
辛すぎるわ。
なんも知らんと隼人の前でオレ、いろんな想像していた気がする。
恥ずかしい。
めっちゃ恥ずかしいッ！！
その瞬間、隼人がオレを突き倒す。
オレたちが倒れこんだその頭上を、悪魔の野太い腕が通過していく。
「なぁ、真理矢。
オレな、おまえと一緒におってずっと黙ってたことあるんよぉ」
二撃目、三撃目を寸前でオレもろともかわし続けながら、隼人はそう言った。
これ以上、他にも何かあるってんですかぃ！
「おまえとな、一緒におるようになってオレな。
人には見えんもんが見えるようになったんよ」
人には見えないモノ？
それって霊感ってこと？
オレのせいで隼人の霊感アップしたってこと？
「ああ、お前みたいなんとは違うのよ。
なんて言うの。
相手の魂が見えるっちゅーか」
「意味分からん」
「なんかなぁ。
人によって魂のある場所っていうか、部位ってのが違うらしくって

な。
その場所とか、その人の魂の輝きみたいなんが見えるんよ。
で、この悪魔に関してもオレ、一応見えてるんよ」
それってば、相手の弱点が見えてるってこと？
「そ。正解。
でも、オレ、見えてるだけでそこを攻撃できる武器持ってんかったやろ？
そこに都合よくおまえが現れたってことは、もう偶然じゃなくって必然ってかんじなんやけど」
あの悪魔の使い。
隼人のこの力のこと、分かっててオレを行かせた？
「で、どこなのよ、弱点」
オレの言葉に、隼人はにやりと意地の悪い笑顔を浮かべた。

「それがなぁ、とっても言いにくいんやけど」
「なんだよ！」
「ベロ」
は？
ベロ？
それって『舌ベロ』の『ベロ』ってこと？
「そうなんよ。
で、どうしたらそこを攻撃できるかなぁって考えてるんやけどな。
どうしても、答えが一つしかないんよ。
聞きたい？」
意地の悪い笑みをニヤニヤと。
こういうときの悪友の考えは聞いちゃいけない。
いや、聞きたくなくてもこいつは絶対に言うんだけど。
もう言わなくても分かる答えにオレは自分で答えていた。

「喰われろって言いたいんだろ、おまえ」
にっこり。
口には出さない『大正解』の答え。
「だって、それしか手ぇないやん」
おまえ、言うのは簡単でいいよ。
オレ、下手したら『地獄送り』ってことじゃん。
つーか、生きて帰れんのか？
「ここ、すでに地獄だから関係ないやろ？
っていうか、がんばりやぁ」
それまで、オレをかばって紙一重で敵の攻撃をかわし続けていた隼人がオレを全面に押し出した。
っていうか、隼人君。
キミの動体視力に感心するよ。
いやいやいやいや、頑張りやって。
他人事にしないでくれッ！！
「うおぉっ！！」
野太い悪魔の腕がオレを掴み上げる。
その動きがオレには全く見えなかったのに、隼人は避けて悪魔に向けてこう言った。

「悪魔って、強い力持ったヤツの魂喰うと強くなれるんやろ？
そいつ、食べんとおまえ、オレのこと殴れんのじゃなぁい？」
隼人の言葉に、オレを掴み上げたままの悪魔がじろりと睨む。
お願いっ、隼人君。
それ以上、敵さん刺激しないでっ！！
「おまえ、自分が何言ってんのか、分かってんのかのぉ？
おまえ、助けにきたマリア喰ってもええんか？」
「喰えるもんなら喰っといた方がええと思うんよ」

にっこり。
アイツのあの笑顔。
なんか、天使様に似てる。
っていうか、天使様が乗り移っているように見える。
やめてくれっ！
これ以上、オレ、苦労したくない。
「ほぉ。言うもんだのぉ。
では、そこでおまえの大事なもんの死に様をよぉく見ておくがいい」
ゆっくりと、ゆっくりとオレを顔まで持ち上げて。
オレの服の襟をつまみあげ、大きな牙をむき出すようにでっかい口を開く。
「真理矢ぁ。
先端なぁ。
狙い外すなやぁ！！」
オレが口の中に投入される瞬間に、隼人はそう叫んだ。
『舌ベロ』の『先端』なら、オレのカッターちゃんでも狙いは外しにくい。
っていうか、絶対に狙えるじゃん！！

悪魔のお口の中に、オレのちっちゃい体が投入される。
鋭い牙で噛み砕かれないように、ちょっと回転しながら舌の上に不時着する。
っていうか、転がり過ぎて喉の奥の方に倒れこむ。
悪魔の舌がゴロリと動き、オレを喉の奥に押し込もうとする。
ちょいちょいちょいっ！！
オレ、絶対に飲み込まれねぇって！！
飲み込まれたら完全ｏｕｔじゃんっ！！
それはやだ！！

絶対にやだ！！
オレは必死に舌の上を泳ぎ、下先に向かう。
唾液らしい、ヌメヌメした感触になんか肉の腐ったような異臭のする口腔内。
早く脱出しないとたぶん、このガス臭さでオレ死んじゃうと思う。
牙の近くの下先が見え、オレは愛用カッターちゃんの刃を伸ばす。
チキチキ、チキチキと音を立てるカッターちゃんの刃を長めに出しておく。
「お願いだから、刺したらポッキンなんてオチはやめてくれよ」
どうせなら、小刀あたりをイメージしたかったと今更ながらに大後悔。
あの極悪天使様の一言さえなければ、絶対にカッターなんて庶民的な刃物を想像しなかった。
同じ庶民的なら包丁の方がずっとましだったな。
「って、とりあえず、先端に目がけてっと」
尖った下先にずっぷりとカッターの刃を突き立てる。
１、２、３、４、５、６。
７、８？
９？
１０？？
おいおいおい。
なんの反応もなしなんですけど。

「もしかして、オレ外しちゃってる？
なーんて、そんなわけないよなぁ」
自問自答してみる。
ベロの先端に、カッターナイフはがっつり刺さっている。
もしかして狙いは外してないけど、刃の長さが足りてないとか。

ツンツンと。
カッターを突いてみる。
その瞬間、突き刺さったカッターの根本から虹色の光が一筋、オレの目にのびてくる。
「なにっ！？」
光は二筋、三筋と増えて、それは口腔内に広がった。
「なになになにっ！！」
どうなってるの？
どうしたらいい？
光がオレの体を包み込み、その光にオレの体の輪郭が溶けていく。
「真理矢ぁ。
よぉやったぁ！！」
オレの体が光の中に完全に溶け込む寸前、そんな隼人の嬉々とした声が聞こえてきた。
「隼人ぉ！！」
オレは力の限りに叫んだけれど。
そのまま虹色の光に溶け込まれ、またしても。
またしても。
オレの意識はその中に押し込まれるように吸い込まれていった。
っていうか、本当にオレ、どうなっちゃうわけ？

マリア様の痛み　☆誰かお助けを！！（1）

あなたはこの先、このままでいいと思ってる？
あなたはこの先、このままミカエルとともに歩めると思ってる？
天があなたに味方して。
天があなたを守ってくれると思ってる？
天はどこまであなたを必要としているのか。
いいえ。
必要なのは『あなた』じゃないの。
あなたの中にいるこの『私』。
あなたの意思に関係なく。
その時はやってくるの。
その時、あなたはどうするの？
その時、私は……

なぁ、マリア様っ。
あんた、ずっとなに言ってるんだよ！？

「お帰りなさいですぅ、マリアさん」
どこかで聞き覚えのある声がする。
聞いたことがあるってだけで、懐かしさとか親しみなんつーもんはない。
むしろ、イラッとする。
この声、誰だっけ？
「目ぇ、覚ましてくれないとぉ。
このまま首刈っちゃいますけどぉ、いいですかぁ？」

間延びしたしゃべり方なのに、とんでもないこと言ってる？
首を刈る？
おい、オレの首はそこらの草とかじゃないっつーの！！
首狩り反対！！
絶対反対！！
パチリ。
思いっきり目を開ける。
自分の顔の十数センチ離れた所に、そこそこ男前の顔がある。
「あ……案内悪魔！！」
オレを隼人のところに案内した。
というか、なんか魂と器に分けてなんかしたチャラ男悪魔がすぐそこでオレの顔をのぞいていた。
目が覚めたオレを見ると、悪魔はにやりと笑った。
「やっぱりぃ、ご主人の言うとおり。
サルガタナスは役に立たないですぅ」
オレの顔から自分のそれを離し、顎に手を当てて考え込む素振りをしてみせる。
それから、また思い出したようににやりと笑った。
「思ったよりも、レベル高いみたいですぅ」
って、オレのこと？
「じゃぁ、ないですぅ。
ヨハネさんのほうですぅ」
ああ、そうですか。
そうでしょうね。
あっさり否定すんなっての！
傷つくじゃん。

「マリアさんはぁ。まぁ。想定内ってところですぅ」

『想定内』
なんつーイヤなお言葉。
「っていうか、おいっ。案内悪魔！
オレがここにいるってことは、あのでっかいのはぶっ飛ばしてきたってことだよな？」
案内悪魔は眉間にしわを寄せ、嫌そうな顔をして見せた。
「オレっちぃ。ずっとその呼ばれ方は嫌ですぅ」
「おまえの名前知らないし」
「自己紹介する前に送っちゃいましたっけ。
オレっち、ネビロスって言うですぅ。
ネビちゃんでも、ロスでも良いですぅ。
だから、案内悪魔とか、妙な呼び方は止めてほしいですぅ」
ネビちゃんとも、ロスとも絶対に呼ばねーっ！！
そんなに親しみ持てねーし。
そんなに仲良しになりたくねーし。
「淋しいですぅ。
っていうか、男になったマリアさん、優しくないですぅ」
じゃぁ、女のマリア様は優しかったって言うのかよっ！
いや、ちょっと待て。
それじゃ、なにかぃ？
面識あるってこと？
「マリアさん、男になってからのほうが口数多くて、オレっち、頭痛いですぅ」
人の心の声、勝手に聞いといて。
『口数多い』はないんじゃなぁい？
「まぁ、その口塞いじゃえばいいんですよねぇ。
ヨハネさんも厄介ですからぁ。
もろとも？
ってかんじ？」
っつーか、おまえの方がよっぽど厄介で性質悪いじゃん！！

ソフトなしゃべり方してるくせに、言ってることハードすぎですから！！

「おまえ、オレの質問、無視すんな！！」
オレの言葉に、ネビロスは面倒くさそうに「言いませんでしたぁ？」と答えた。
「オレっち、言ったつもりですけどぉ。
役に立たなかったってぇ」
そう言われると、そうだけど。
きちんと聞きたかったんだって。
ちゃんと倒しましたよってさ。
じゃないと不安じゃん。
またあんなバケモンと戦って勝つ気力なんてオレないっすから。
「本当に。
ご主人の想像よりもはるかに的確に仕留めてくれちゃってましたぁ。
これも全てヨハネさんのご助力あってのことでぇ。
マリアさんは微妙に役に立ってなかったっていうことでぇ。
でも、ヨハネさんだけじゃ、サルガタナスは倒せなかったのでぇ。
ま、それなりに来た意味はあったみたいですぅ」
オレ、コイツぶっ飛ばしたい。
心底ぶっ飛ばしたい！！
「それ、オレも賛成やで」
不意に背後から声がして振り返る。
ボロボロの制服姿の隼人がそこに立っていて、コキコキと首を回しながらネビロスを睨んでいた。
「隼人。無事だったんだな！」
「っていうか、無事じゃなかったらここにおらんし」
「オレ、光に急に包まれて分んなくなったからさ」

「ああ、それならオレもおんなじ。
おまえの声で意識戻ったってかんじ。
口数多いのも悪くないと思うんやけどね」
隼人はそう言いながら、今度は拳を鳴らして見せた。
「オレ、ああいうタイプ、一番好かんのよ」
それ、めっちゃ共感。

マリア様の痛み　☆誰かお助けを！！（2）

そんなオレたちの様子に、ネビロスはくつくつと喉を鳴らして笑った。
「あらら～。
オレっち、相当なめられちゃってるですぅ。
オレっち、これでもこの地獄の悪魔を監視する役職付きなんですけどぉ。
それなのに、未熟な聖母と使徒ごときにぃ。
ぶっ飛ばされるなんて、ぜーったいにありえないですぅ」
そう言ってネビロスは右手で拳を作ると、それをぐっとオレたちに向かって突き出した。
その手が黒い瘴気を纏い、それが黒光する大鎌に姿を変えた。
「見解一致みたいなんでぇ。
ぶっ殺させてもらうですぅ」
間延びしているのは話し方だけで、ネビロスの瞳は全然笑っていなかった。
赤く光る瞳は刺すようにこちらを睨みつけていた。
瞬間、ネビロスの姿が目の前から消える。
「え？」
「真理矢、上やっ！！」
見上げた瞬間、隼人がオレの体を突き倒す。
ガッ！！
オレの立っていた場所に大鎌ががっつりと突き刺さる。
そこから黒い瘴気がシューシュー音を立てながら、まるで蒸気のように立ち上り始めていた。
「ん～。狙いはよかったですぅ。
でも、やっぱりヨハネさんの眼力は厄介ですぅ」
突き刺さった鎌を引っこ抜きながら、ネビロスは不満げな顔をして

見せた。
つーか。
オレはネビロスが消えたくらいにしか思わなかったのに。
隼人君はその姿が見えてるんだって。
どんな動体視力だって！！
すげー。
まぢすげー！！
ちょっとだけテンション上がるッ！！

「日々の鍛錬の賜物ってことやろな」
「つーか、鍛錬してたの？」
「当たり前やろ？
おまえ守るのオレの使命なんやし」
なんだろ。
告白されたみたいで妙な気持ちになりそうですが。
ってオレ！！
そんな悠長な事でいいわけねーっての！！
「つーかさ、長期戦はまずいと思うんよね」
「じゃ、サルガなんとかみたいに弱点は……」
「見えとるよ」
そう言いながら、隼人は小さくため息をついた。
「サルみたいにはうまくいかんと思うんよね」
「どうして？」
「対象物小さすぎるやろ？
サルみたいに飲み込んでもらうなんて簡単にはいかんのよ。
それに、あのサルは頭も単純やったやろ？
あいつ。
ネビはしゃべり方はアホやけど、その分腹黒いかんじするんよね」

腹黒いって、そりゃ悪魔だもんな。
「じゃ、どうする？」
「あのなぁ、真理矢ぁ。
オレにばっかり聞かんと、おまえももちょっと考えやぁ」
「学校のテスト、おまえのが出来とるやろ？」
「学校のテストと一緒にすなやぁ。
あれ、微分積分よりも厄介やよ」
確かに、確かにそのとおり。
でも、コイツを倒さないとオレたち元いた場所には戻れないってことだよな？
ってことは、天使様との約束を守れないってことだよな？
『そんなにミカエルとの約束を果たしたいの？』
「はっ？」
こんなときにどういうわけか、頭の中に『マリア様』の声が響いた。
当たり前だって！
オレ、これ以上苦労したくないし。
できることなら、はやく普通の高校男子に戻って平凡な日常をつつがなく送りたいもの。

『方法は……あるのよ』
方法？
目の前にいる悪魔を倒せる話？
『あの悪魔を倒したいの？
それともミカエルとの約束を守りたいの？』
悪魔を倒したいかと言われると、そりゃ倒してオダケンを開放してやりたいけど。
天使様に『隼人を連れて戻る』って約束したことは、男として守りたい。

『欲張りね』
欲張り？
オレが？
いいや、そうじゃない。
オレは普通のことを普通に言ってるだけだと思う。
『……ミカエルとの約束は守らせてあげるわ』
その言葉が頭に響いた瞬間。
ドクン……心臓が大きく脈打った。
そして、それが合図かのように、尋常でない頭痛がオレを襲う。
「な……なんだって……」
立っていられない。
頭の中がキリキリする。
痛すぎて、涙まで出てくる。
なんなんだよ！！
なんだってんだよ！！
こんなときに、こんなふうになってる場合じゃないのに！！
「真理矢！！」

「…やと」
誰か助けてくれ！！
頭が。
頭が割れるみたいに――！！
視界が揺れる。
グニャグニャと、視界がブレる。
隼人の顔も姿も。
ネビロスの姿も。
地獄の山々も。
すべてがすべてねじ曲がって、それはマーブル模様のように一つに

溶けていく。
『これで、あなたの役目は終わり……』
今まで聞いたこともない、冷めた突き放すような女の声が聞こえたが最後。
オレの意識はぷっつりと。
まるでピンと張った糸をハサミで切るようにぷっつりと。
真っ暗な世界の中へと沈んでいった。
っていうか。
オレ、どうなっちゃうの？

マリア様の痛み　☆イジワル天使様登場です（1）

超絶美形の天使様。
悪魔よりもはるかに怖ーい天使様。
オレの声、聞こえますか？
なんか、オレ。
真っ暗なところに閉じ込められちゃって。
どうしようもないかんじなんですよ。
あなた様との約束をオレ、できることなら守りたいんすけど。
どうもできそうにないかんじで。
「って、許してもらえるわけ、ねーよなぁ」
本当に光の一つも見当たらないところに今、オレはいる。
たぶん、正解としては『オレ』じゃぁなくて、『オレの意識』なんだろうけど。
真っ暗なところで、一生懸命に目を凝らしても。
全然なんにも見えないし。
歩いてみても、どこに進んでいるかもわからないし。
だからとりあえず、そこに寝てみることにした。
だって、何かしたって真っ暗だからムダなんだよな。
で、やることないから目を閉じて。
あの金髪天使様への言い訳を考えてるんだけど。
考えれば考えるほど。
あの高ピーな声が聞こえてくるんだよ。
『バカテンシン！
そんなもの、なんとかしろっ！』
って。
たぶんね、たぶん。
オレの声は天使様には全く届いてないと思うのよ。
でも、想像できちゃうのよ、簡単に。

付き合いっていう付き合いなんて、ほっとんどないのにさ。
オレはあの天使様を、思った以上に理解できちゃってる。

「昔から知ってるから？
って、知ってるのってオレじゃないじゃん」
そう。
オレであってオレでない。
オレの中にいたもう一人の意識。
『マリア様』
「どーなってんだよぉっ！」
寝がえりをうってみる。
寝心地なんてものは特にない。
真っ平らな地面に突っ伏しているかんじ。
特に痛いとか、気持ちいいなんてのはない。
意識のある中で聞いた彼女の声が耳から離れない。
『これであなたの役目は終わり……』
一体、あれはどういう意味なんだ？
オレ、いなくなっちゃうってこと？
「うおぉぉっ！！
それは絶対にありえんって！！」
オレがいなくなっちゃうなんて、絶対ダメに決まってる！
オレ、まだ青春を謳歌してないじゃん！
彼女もいないし。
デートもしたことないし。
ファーストキスは……なんか微妙だけど。
とりあえず、女の子とはないんだし。
もちろん、初Hだって未経験だし。
だから、こんなところにいていい訳がない！！

「戻らないと……！」
どこへ？
どこに行けば戻れる？
それにさ。
オレ、ネビロスと隼人、置き去りにしたまんまじゃん。
隼人は、あの尋常じゃない人離れした『動体視力』があるから、すぐにやられちゃうなんてことはないと思う。
でもなぁ。
あいつ、すっげーボロボロだったし。
スタミナ切れちゃったら、ヤバいよなぁ。
って、オレがいたら余計に足手まといか？
いやいや、真理矢。
もっと自分を信じろよ！
おまえはやれば出来る子なんだから。
「ねぇ、独り言、もう終わるかな？」
突然、オレの頭上から声が沸いた。
なんだよ！
なんで声がするんだよ！
空耳か？
空耳だよな？
こんな真っ暗な空間にオレ以外がいるわけないよな？
いや、見えないから分からなかっただけなのかもしれない。
オレはゆっくりと声のしたほうを見る。
「はぃ？」
真っ暗な空間が、ぼんやりと照らしだされていた。
発光元は声の持ち主だった。
二十代半ばっぽい、超絶美形。

青い瞳に、白にも見える薄い金色の髪は、ゆるくウェーブしている。
そして、その背中に見えるのは。
あの極悪天使様ばりのゴージャスな白い翼。

オレ、夢見てる？
これはなんだ？
この人は誰？
オレの知っている天使様とは絶対に違う。
オレの知ってる天使様は、名古屋巻きのクルクル縦巻きロールだし。
オレの知ってる天使様は、殺気にも似た痛すぎるオーラ纏ってるし。
オレの知ってる天使様は。
「そうだね。キミの知っている天使様じゃぁないよ」
にっこり。
オレ、この笑顔はトロけそう。
これぞ、まさしく『天使のほほ笑み』。
「ミカちゃんから聞いてはいたけど。
マリア君はとっても面白いねぇ」
ミカちゃん？
それって『あの天使様』のことでしょーか？
「うん、そうだよ。
ミカちゃんってボクは呼んでるんだけど、彼には不評でね。
可愛いと思うんだけど。
ミカちゃん、実際可愛いし」
可愛い？
見方によればそうかもしれないけど。
『あの天使様』が『ミカちゃん』って。
そりゃ、本人嫌がりますって。
そんなタイプじゃないもんねぇ。

「マリア君はミカちゃんに、とっても理解があるみたいだねぇ。
ま、だからミカちゃんもキミには心を開いてるんだろうけどね。
うーん。
可愛いなぁ。
あ、でも、ちょっと妬けちゃうなぁ」
『あの天使様』がオレに心を開いてる？
開いてるってかんじじゃない。
オレには恐怖政治を強いる絶対君主だってば！
そんなオレに妬かないでくれ～！
っていうか、妬くほど好きならあなたが代わってくださいよ。

「うん。代わってあげたいよ、代われるならね。
でも、ミカちゃんはキミがいいって聞かないだろうから。
諦めるしかないんだよ」
そう言って、超絶美形は苦笑した。
その眉間にちょっとしわが寄る笑い方も、とーっても素敵なんですけど！！
でも、やっぱりどう見てもこの人は『男性』だよな？
「天使に性別はないんだけどね。
ボクにしても、ミカちゃんにしても『男性体』をとってるよ。
『女性体』になるのは、ちょっと厄介だから。
思考も微妙に変わっちゃうしね」
天使って性別ないんだ。
雌雄好きに選べるのって便利だな。
って、やっぱり天使様なのね。
「あの……どちら様でいらっしゃいますか？」
オレの問いかけに天使様は「やだなぁ」と答えた。
「名乗るほどのものじゃぁないよ。

今のボクは本当のボクじゃないし。
なんて言うの？
簡単にいえば、ホログラムってかんじなんだよね。
わかる？」
「実体じゃないってことでしょうか？」
「そうそう、実体じゃないの。
実体でキミたちの世界に来るには主の許しもいるし、何より降臨手続きしないといけないから。
なにかと面倒なんだ」
降臨手続き？
天使から人間に変換するっていう、アレのことですかね？
「そうそう、それだよ。
アレはね、リミッター外しが大変でね。
だからとりあえず、こんな姿で申し訳ないんだけど。
これでも多少は役に立つからね。
とりあえず、ボクのことは『天使さん』で構わないから」
「はぁ……天使さん、ですか」
「不満？
名前、知りたい？
教えてあげたい気もするけど、名乗るとまた面倒だから聞かない方がいいと思うよ」
面倒なこと起きるんなら、聞かないでおこう。
オレ、ミカエル様だけで、十分苦労してるから。

マリア様の痛み　☆イジワル天使様登場です（2）

「じゃ、ぼちぼち本題に入ろうか。
えっとね。
キミも薄々は気が付いているとは思ううんだけど、ここはキミの深層心理内でね。
もともと、ここにはキミのもう一人、『マリア』がいたんだよ」
オレの深層心理？
こんなところに『マリア様』がいた？
「本当はこんな真っ暗じゃぁないよ。
マリアがここをロックしちゃったから、こんなふうになっちゃってるのね」
ロック？
鍵をしてるってこと？
「そう。
キミを閉じ込めてるの。
ここからキミを出さないように。
出しちゃったらややこしくなるから。
なんでそんなことをしたのか、まぁ、おおよその見当はつくんだけどね。
だからって、やりもしないことを初めから咎めるわけにはいかないし。
だから、マリアが動くまで待ってたんだけど。
思った以上に、マリアの意志は固いみたいでねぇ。
説得なんて生ぬるいのは無理みたいなんだよ。
で、仕方ない。
キミにお願いってわけなの。
まぁ、それがミカちゃんの望みでもあるし。
キミならできるってお墨付きもあるし。

でも、一人じゃ無理だろうからってことで、ボクがサポートお願いされたのね。
降臨しちゃったミカちゃんじゃぁ、キミの深層心理には入れないからさ」
超絶美形天使さんは早口に、しかも一気に話した。
ちょいちょいちょいっ！！
って、言っていること、オレちょっとついていけてないんすけど。

「マリアはさ。
悪魔と取引するつもりでいるんだよ。
気持ちはね、理解できるの。
ボクはミカちゃんほどつれないわけじゃぁないから、一言相談してもらいたかったんだけどね。
ボク、そのときちょっと出張中でね。
相談に乗ってあげられなかったんだよね。
それはすっごく後悔してるんだけど。
今更、そんなこと言っても始まらない。
それにここを脱出しない限り、キミはキミとして生きられない。
マリアの思考を持ったキミが悪魔と取引をしたら、ボクの大事なミカちゃんもただじゃぁすまない。
それにサタン。
アレの支配が強くなると、天上も困るんだよね」
「ちょっと！！
それってかなりヤバいじゃないっすか！！」
オレの言葉に天使さんは大きく、うんうんと頷いた。
「うん。ヤバいねぇ。
ヤバすぎるよねぇ。
だから、早口で説明してるんだけどねぇ」

っていうか、悠長ですって！！
「どうしたらここから出られるんですか！
どうやったら元に戻るんですか！！」
「あっ。嬉しいねぇ。
ヤル気だねぇ、マリア君♪」
つーか、オレの天使様とはタイプが違いすぎて、このペースに微妙
についてけねぇかんじなんだけど。
オレ、やっぱMなんだろうか？
「Mじゃぁないね。
ドMだね」
いや、その、今そんな答えいらないっすから。
って、ドMなんかぃっ！！

「日々、鍛えられるよね。
ミカちゃんはSだもんね。
でも、まだまだSっぷり、抑え気味だから。
大丈夫。
キミ、素質あるから。
ミカちゃんとは相思相愛でやっていけるよ。
本当、磁石みたいだもんね、キミたちは。
って、横道それちゃった。
ダメだねぇ。久しぶりに面白い子に会っちゃったから。
おしゃべり止まんないかんじだねぇ」
あの天使様、あれでSっぷり抑え気味なの！？
聞かなきゃよかった新事実だな。
この先相思相愛でやっていけるって言われたこと自体、オレ、引き
ますけど。
「さてと。

じゃ、マリア君の覚悟も決まったみたいだし。
頑張ってもらおうかなぁ」
天使さんの表情が一変し、固くなる。
一拍の後、天使さんは両手を胸の前で合掌して見せる。
「主よ。
この者に記憶の扉を見せることをお許しください」

呟いた瞬間、天使さんは合掌していた手を少しずつ離していく。
手の間に、トランプのような光のカードが一枚、また一枚と姿を見せた。
その姿はまるでマジシャンがカードをシャッフルしている時のようだった。
ごくりと息を飲む。
天使さんはそんなオレに優しく微笑みかけ、カードを空間内に放り投げた。
投げられたカードは宙で大きさを変える。
手のひらサイズのカードはオレの等身大ほどになる。
「これは……」
それは版画のような絵だった。
モノクロの絵画。
色がないその絵画には、オレの知っている顔が描かれていた。
オレの夢の中によく出てきた女の人。
「マリア様？」
オレの呟きに、そのうちの一枚のカードに触れながら「正解♪」と天使さんは答えた。
「そう。
このカードはね、マリアの記憶。

マリア自身がキミの深層心理の中に埋め込んだ『過去の心理の記憶』だよ。
マリアは逃げ場所が欲しかった。
だから、融合しやすい女性体としての転生を望まず、拒絶しやすい男性体を望んだんだ。
マリアの思惑どおり、男性体はマリアの女性的な記憶を拒絶した。
男だからね、女の気持ちなんてもの、真には理解できないよ」

なにを言ってるのか、オレ全然理解できないんすけど。
融合しやすい女性体？
拒絶しやすい男性体？
そりゃさ、オレ男だから。
女の気持ちなんてさっぱりだけど。
マリア様が男に転生したかったのは、そんな理由だったわけ？
なんか、少し腑に落ちない。
だってさ、男性体だって必ずしも拒絶するわけじゃないんだろうし。
女の気持ちを理解できる男だって絶対にいるわけで。
逃げ場？
マリア様は追い詰められてたってことかな？
なにに？
天使に？
それとも悪魔？
あるいは……
「マリアを追い詰めた要因は複数だよ、マリア君。
女の気持ちを理解できる男子がいたら、それは本当にすばらしいことだよね。
でも、実際、男性と女性はさ、異星人同士ってくらい理解できかねる生き物同士なんだよ。

真に理解はできないさ。
共感はできるだろうさ。
でも、キミはマリア自身じゃぁない」
ごもっとも。
確かに、『共感』はできるかも。
でも、気持ちのある部分は理解できても、完全にとまではいかないんだろうな。
他者を理解するって簡単じゃないもんな。

「そのとおり。
ボクら天使だってね。
共感はできても理解はできない。
だから、マリアを追い詰めちゃったんだろうけどね。
特に、マリアは過去でとっても辛ーい目にあってるだろう？」
「辛い目？」
「そ、辛くて耐えられないこと。
きっとキミには想像もできない」
想像もできない辛いこと？
拷問……とか？
「肉体の責め苦など、精神のそれに比べたら赤子ってかんじだよ。
ね、思いつかないでしょ？
だーかーらぁ。
キミには頑張ってもらわないといけないんだなぁ」
なんか、ものすっごく大変なことを言われちゃうような気がする。
聞くな！
聞くな、真理矢！
でも、聞かなかったらオレ、元に戻れないんじゃないの？
「今からキミにはマリアの痛みを追体験してもらうよ。

マリアの痛みを真に理解し、マリアをその痛みから解放してあげること。
それが今からキミに課す試練だよ」
「ちょ……ちょっと待ってくれって！！
さっき、共感はできても理解はできないって言ったじゃないっすか！！
なのに、真に理解しろなんて……」
オレの言葉に、天使さんは悩殺のほほ笑みを湛えた。
「キミにならできるよ、天林寺真理矢君」
って、そりゃちょっといい加減すぎません？
「いい加減でこんなことは言わないよ。大丈夫。
だってキミは『やれば出来る子』なんでしょ？」

からかうように天使さんは言った。
つーか、やっぱり天使ってイジワルが多いと思う。
「やらなきゃここから出られない。
キミの家族も。
キミの世界も。
サタンによって崩壊するよ。
キミはそんなこと許せるの？」
「それって脅しっすか？」
「やだなぁ、そんなつもりなーいよ。
でもね、ボクも一応大天使なんで、この成行きを黙って見過ごすわけにはいかないんだよ。
だからって、ボクができることはここまでなんだけど」
そう言いながら、天使さんは小さくため息をついた。
「キミの天使は、キミを信じて今、サタンの使いと戦っている。
圧倒的不利な状況でも、キミの帰りを信じて待っている。

だから」
『キミは絶対に戻らなくちゃいけないんだ』
天使さんの体の輪郭が急にぼやけ始める。
「天使さん！？」
『ホログラムだからねぇ。
しかも、アイツのテリトリー。
ちょっと限界みたいだねぇ』
残念だと言いながら、天使さんは苦笑した。
「天使さん！！」
『ボクもキミを信じてるよ、マリア君。
キミを選んだキミの天使を信じてるから』
ニッコリ。
天使の微笑みを残し、天使さんは光の粒子になって消えていった。
その光の粒子は真っ暗な世界をほのかに照らし、何枚ものカードが風もないのに揺れるのをぼんやりと映し出していた。

「やるしかねぇ……っか」
あれだけ信じてるって何回も言われたら、やるしかねーじゃん！！
それに。
「あの極悪天使様、一人にしとけねーし」
オレの帰りを信じて戦っている、オレの天使様のためにも。
オレはここから元の世界に戻んなくちゃ！！
って、オレの天使様？
ああ。
オレ、なんか完全に毒されてる。
「おっしゃ！！
待ってろよぉ！！」

オレはゆらゆら揺れるカードの一枚に触れる。
電流のように触れた指先から光がほとばしり、絵の輪郭を縁取っていく。
すべての縁取りが終わるとき、オレは真っ暗な世界からそのカードの世界へと引き込まれていった。
っていうか、またワープ？
もう、勘弁してくれ～！！

マリア様の痛み　☆妊婦さんを追体験

その絵を見た時、オレ、なんとなく嫌な予感はしてたのよ。
あの超絶美形、お兄様的天使様はこんなことをおっしゃってた。
『追体験してもらう』
追体験ってさ。
オレが、マリア様の経験したことを経験するってことだよな。
じゃ、なくちゃ追体験じゃぁないもんな。
「マリア、大丈夫かい？」
オレはそう言った相手を見上げる。
「だ……だいじょーぶ」
そう。
オレは今、オレじゃない。
高校生の天林寺真理矢じゃない。
マリア様の記憶に入り、本当の『マリア様』になっちゃったオレ。
しかもね。
しかも。
「お腹が痛いのかい？
なんだか、とっても苦しそうだけど」
はい。
とっても苦しいです。
「だ……だいいじょーぶ」
にっこり。
ノープロブレムと偽って、オレは笑ってみせる。
オレさ。
今までお腹の大きな人は見てきたよ。
電車やバスに乗っててさ。
そういう方に席を譲ったこともあるんだよね。
でもさ、でも。

まさか、オレがそうなるなんて想像もできなかった。

そう、今のオレ『妊婦さん』。
『救世主』を身ごもった『マリア様』なオレ。
『追体験』ってすごいね。
男のオレが『妊婦さん』。
どうやったって、自然の摂理で言ったら不可能でしょ、これ。
これぞ、『神のなせる業』ってことですかね？
「マリア……なんだか、今日はとっても苦しそうだよ。
大事にしないと。
キミは『神の子』を宿しているんだから」
優しい、優しい男の人。
たぶん、この人。
マリア様の旦那さんだな。
えっと、名前は確か『ナザレのヨセフ』だったかな。
オレも親父の聖書かぶれがなかったら、絶対にこの人の名前なんかでてこなかった。
親父の話では、なんでもヨセフさんは相当いい人で。
夢に現れた天使からの『受胎告知』を信じ。
ひたすらにマリア様と子のイエスを愛し、守ったって言う。
うーん。
オレにはそんな器ねぇなぁ。
だってさ。
いくら夢に天使様が現れて
『あんたの嫁さん、神の子を妊娠したからよろしくね』
なんて言われても、そんなこと信じられないって。
絶対、オレの知らないところで他の男と不貞を働いたに違いないって思っちゃうし。

まして、どこの馬とも知れない子供をそんな愛情たっぷりに育てちゃうなんて。
並の男じゃ、絶対にできねー！！
って、この人、どうしてそんなふうにできたんだろう？
まぁ、あの天使様に睨まれたら『ＮＯ』とは言いにくいだろうけど。
「マリア？」
小首を傾げる髭のおじさん。
いや、ほんとはおじさんっていうほど年とってない。
けど、なんだろうなぁ。
老けて見えるのは、この時代の服装とか、髪型のせいなのかなぁ？

「わかんないんだけど……」
オレは思い切って聞いてみる。
これは『追体験』なんだろうけど、オレにとっちゃ『初体験』。
今後の参考に。
いや、オレがより『でっかい器』の男になるために。
ここは一発聞いてみる価値ありな気がするんだよね。
「なんで、あなたはそんなに寛大なんでしょう？」
女言葉に変換できたらいいんだろうが。
オレ、そんな器用じゃないからねぇ。
とりあえず、丁寧な言い回し。
これなら、まぁ、そんなに変な顔されないよねぇ？
ちらりとヨセフさんを見る。
げっ！
想像以上に怪訝なお顔。
「何を言いたいんだぃ？」
言っている意図がわからない。
そんなふうにヨセフさんは言った。

そりゃそうだ。
ある日、突然奥さんから
『あんたのこと、よくわかんないのよ。
どうしてそんなに〇〇なのか、ちゃんと言ってよ』
みたいなこと言われたら、そりゃわかんないわな。
「ああ……その。
なんていうか。出産前で不安でぇ。
いろいろ考えちゃって」
聞いたことあるんだよね、オレ。
妊婦さんってさ、『マタニティ・ブルー』ってのがあるって。
誰からって？
誰だっけ？

「不安。それはいけないよ、マリア。
キミは『聖母』になる身。
もっと自分に自信を持たなくちゃダメだ」
おーいっ！
待ってくれよ。
今、なんて言ったの？
『聖母』になる身って言ったよね？
「そんなの好きでなるんじゃないよ」
そうだよ。
そうなんだよ。
これは勝手に向こうが指名してきたことで、オレの意思じゃぁないんだよ。
プロ野球のドラフト並に一方的なことなんだよ！
出来ることなら『聖母』になんてならずに『普通』でいたいんだって！

「今日のマリアは疲れてるのか？」
ヨセフさんは心底心配そうに、オレのおでこに手をあてた。
熱はありません。
もちろん、血迷ったわけでもありません。
ああ、オレ。
なんか、すこーしだけ分かったような気がする。
このプレッシャー。
このお腹の重み。
これは『痛い』って。
「質問してるんですけど？」
今、はっきりと思いだした。
マリア様はオレが今考えていることと同じことを思ってた。
だって、オレはずっと聞かされていたんだよ。
頭というか夢の中で。
『どうして、あの人はこの事実をすぐに飲み込めたの？』
っていう、疑問の声をね。

彼女はその答えを聞くのが怖くて聞かなかったけど。
オレはしっかり聞いちゃうもんね。
だって、疑問は残しておけないでしょう？
解決しないと、ここから出られない気がするし。
「どうしてそんなことを聞くんだい、マリア？
答えなんて……たった一つしかないのに」
ヨセフさんは困ったように笑った。
答えは一つ？
「神が決めたことだから？」
に決まってるよなぁ、この場合。
だって、『神の子』だよ。

『救世主』だよ。
そんなこと、あの天使様に言われちゃったら言うこと聞くしかないじゃん。
「いいや、マリア。
それは違う。
それは全く違う答えだよ」
ウッソ―！？
じゃ、他に答えって何？
オレには全然皆目見当もつきませんって。
そんなオレ、もといマリア様になってるオレの肩をヨセフさんは優しく引き寄せた。
ふさふさの顎髭が額に触れる。
抱きしめられた手の温もりも、彼の鼓動も、なんだかとても気持ちいい。
って、オレ、男に興味ないですって！
ノーマル。
あくまでノーマル！！
「キミの言うとおり、天からのお告げがきっかけにはなったさ。
ボクは、キミとひそかに離縁を考えていたから……でも、そうはできなかった。
悩みはした。
ものすごく傷つきもした。
疑わなかったかと言えばウソにもなる。
でも、どんなに考えてもたどりつく答えは一つしかなかったんだよ」
ヨセフさんはオレの体を引き離し、ぽっこり膨れたお腹に優しく手を置いた。

それからもう一つの手でオレの手を包み込むと、まっすぐにオレの瞳を見つめた。
なんか、ものすっごい緊張するんですけど。
「ボクが必ずたどり着く答え。
それは『キミを愛している』ということだよ、マリア」
はぃ？
『愛している』って、それが答えなんすか？
「ボクの中の真実は『キミを愛している』ということ。
だから、キミの中に宿る子が『神の子』であろうと。
そうでなかろうと。
そんな事実は関係ないんだ。
ねぇ、マリア。
事実だけを見よう。
キミは今、確かに新しい命を宿していて。
その子はちゃんと元気に育っている。
ボクとキミとの間に確かにそんな行為はなく、その子はボクの子ではないけれど。
キミの子ではある。
ボクはキミを愛している。
だから、キミが愛する我が子はボクにとっても愛する我が子なんだよ」
ああ、やばいよ。
オレ、胸がじーんってしちゃってる。
目頭すっげー熱くなってる。
うん。
そうなんだよな。
この人、相当いい人ってわけじゃないんだ。
普通の人。
普通に当たり前のことを思って、それをしただけなんだよな。
マリア様は聞けなかった。

きっと答えを聞くのが怖かったんだ。
『愛している』って言葉を聞けるかどうか、それが不安で仕方なくて。
聞かないでおけば、ごまかしていけるって思ったんだよな。
あんたの『痛み』。
オレ、わかったよ。

『第一のペイン……解放』
聞いたことのない声が頭上から響いた。
オレはふっとその声がしたほうを見上げる。
「うぉっ！！」
半透明の巨大な手がぬっと現われて、オレの体を引っつかむ。
おいおいおいっ！！
妊婦になんてことするんだよ！！
オレ、神様の子供妊娠してんだぞ！
神の子生まれなくなっちゃったら、どうする気だよ！！
って、おまえ、悪魔なの？
『第二のペイン……開口』
巨大な手がオレを空へとブン投げる。
その先に、ゆらゆら揺れるさっきとは絵柄の異なったカードが待ち受けていた。
「ひぃぃぃっ！！」
カードに激突したオレは、ふとお腹が軽くなっていることに気がつく。
ぺっちゃんこだ。
っていうか、胸もない。
元のオレの体。
瞬間、くっついたオレの体全体から電流のような光がほとばしる。

だいたいの想像はつきますよ。
だって、さっき体験したばっかだもんね。
そう。
絵の輪郭が電流のような光によって縁取られ、それが全部に渡ったら。
「ひぃぇぇぇっっ！！」
オレの情けない絶叫がこだまする。
オレの体は再びワープ。
いや、三度かな？
なーんてアホなこと、考えてる場合じゃないって！！
今度はどんな体験だよ！
まさか。
『出産』
なーんてこと、ないよねぇ！？

マリア様の痛み　☆産んじゃったよ（1）

妊娠の次に来るものは何ですか？
それは『出産』ですよ、真理矢君。
って、自問自答してる場合じゃねぇ！！
まさかとは思ってましたよ。
でも、そんなことありえるわけがないって超否定しまくってたのに。
残念ながら、本当に起きてしまうミラクルワールド。
オレ、何度も言うけど『男子』です。
大事なもの、しっかりついてます。
そして、それはしっかり機能します。
女の子は大好きだし。
エロ本だって、エロいビデオだって見ます。
家にこっそり隠してあるし。
前に兄貴と弟に見つかったこともあったけど。
本当に、本当に普通の思春期の高校男子なんですよ。
なーのーにーぃ！！
「痛い痛い痛い痛いいいいっっっ！！」
なんなんだよ、この痛み！！
普通じゃない。
普通であるわけがない！！
なんかテレビとかで言ってたよな？
『出産』って『鼻の穴からスイカだすかんじ』って。
鼻の穴からスイカ。
想像できますか？
絶対に想像できないでしょ！？
だって、鼻の穴からスイカなんて絶対に出せないもんね。

でもさ、現実にオレに襲ってるこの痛み。
まさに『鼻の穴からスイカ』なんだって！！
これ『第二のペイン』なの？
この痛みを追体験しなくってもさ、尿道結石とかでいいじゃん。
だって、あれって妊婦と同じ痛みを『体験』できるって言うじゃん。
「うううううぅぅぅぅ……」
もう声も出ねぇし。
うずくまるしかねぇし。
痛みが波みたいに襲ってきやがって。
オレ、もうどうしていいかわかんねぇ！！
「気をしっかり持つんだ、マリアッ！！」
あー。
ついさっきまで『愛の告白』をされていたヨセフさんが、オレの手をしっかり握りしめて言った。
「キミの意識がなくなったら、赤ちゃんも死んでしまうんだぞ！！」
そうなの？
って……それどころじゃない。
女の人は『痛み』に耐えられるように作られてるって。
なんか昔、そんなことをおふくろが言ってた気がする。
でもね。
オレ男の子。
女の人じゃないから『痛み』に耐えられるような精神力、まったくもって持ち合わせてない。
だから、オレには『出産』は無理だって！！
「うううっっっ！！」
痛い！

痛すぎる！！
この痛みをなんて表現していいのか、まったくわからん！！
転んで膝すりむいた……の何十倍、いや、何百倍ってかんじだな。
痛みはどんどん速くなって、息が詰まる。
オレ、呼吸出来てる？
いや、こんな痛いの体験するくらいなら、オレ。
今すぐ死んじゃいたいっ！！
知らなかった。
知らなかった。
知らなかった。
ああ、お母ちゃん。
あんたもオレを産むとき、こんなに苦しんだの？
こんなに痛い思いしたの？
「マリア、ボクがついてるっ！！」
オレの手をしっかり握りしめ、ヨセフさんは言った。
ありがたいです。
ありがたいお言葉です。
励みになるんだけど、ねぇ。
代わってくれ〜！！
「マリアさん、しっかり！！」
どこからともなく野太いおばさんの声がして、オレは腕をがっしりつかまれる。
うずくまったオレを立たせると、おばさんは引きずるようにオレの体を小屋へと引っ張っていく。
小屋？
そういや、イエスって馬小屋で生まれたんじゃなかったっけ？
じゃ、あれが馬小屋？
オレ、今からそこでご出産なわけ？

やめてくれ～！！
オレ、男だもん！！
そんな女性の聖なるお仕事『体験』したくない～っ！！
おばさんはそんなオレの心中など知らず、オレを小屋の藁の上に寝かせた。
ああ、なんとも言えない家畜の匂い……
こんなところで出産って。
不衛生じゃぁないの？
オレ、なんか病気になっちゃわないよね？
って、これは追体験なんだから、実際のオレには無害なのかな？
でも、精神的にはかなりの大ダメージ。
オレ、立ち直れない。
「マリアさん、準備はいいかい？
これからが正念場だよ！
あんた次第でこの子の命の行方が決まるからね」
ひぇぇぇっっ！！
なんですか、命の行方って！
それって、オレ次第で生かすも殺すもできるってこと！？
「いいかい。
出産はあんた一人で頑張るもんじゃないんだよ。
お腹の子も一緒に頑張るってことなんだよ。
あんたはね、一生懸命外の世界へ旅をしてくる子供をサポートしてやらなくちゃぁならないんだよ。
わかるかい？
この子はあんたに会うために、あんたの中を苦しみながら旅をするんだよ。
あんたはその子がなるべく苦しまずにすむように、最大限のことをしてやらないといけないんだよ。
それはね、他の誰でもない。

あんたにしか出来ないこと。
母親であるあんたと、あんたを信じているその子にしか出来ないことをするんだよ。
いいね？」

いいねって言われても。
オレ、どうしていいのかまったくわからないし。
っていうか、痛すぎるから早く解放して！！
「よし、産道は開いたね。
あとは押し出してやらないとね。
破水しちゃって、水がなくなってるから大変だよ！！
おいっ！！
しっかりしなさい！！
あんたがそんなんじゃ、赤ちゃん死んじゃうよ！！
そらっ！！
赤ちゃんに空気を送ってやるんだよ！！
呼吸整えて。
大きく吸って、吐いて。
よしっ！
行くよ！！
お尻の穴に力こめて！！
便秘ででないうんこを押しだすかんじ！！」
なんだよ、なんだよっ！
その例え！！
大きく息を吸って、吐いて、力込めてっ！！
便秘で出ないうんこを押しだすかんじ！！
わかんねぇ！！
超わけわかんねぇ！！

でもやるしかねぇッ！！
「うぅぅっっ！！」
ダメだっ！！
ここじゃ、力入んねぇっ！！
踏ん張れる握り棒が欲しいっ！！
「ヨセフさんっ！！
ちょっとこっちにきて、マリアさんの手を握ってやって！！」
おばさんの声にヨセフさんが飛び込んでくる。
それからオレの両手をそれぞれ握りしめた。
「ほらっ、マリアさん、もう一度！！」
息を吸って、吐いて、力む！！
「うううっっっ！！」
出てこい出てこい出てこい！！
「いいね、その調子。ほら、もう一度！！」

もう一度？
ああ、でもなんとなく、赤ちゃんが外へと降りてきている感じはするんだよね。
って、オレ男の子だよね？
なんかさ。
こんな体験しちゃって、オレ『男』としてこの先きちんと生きていけるのかなぁ？
将来がすっげー不安。
「集中してっ、マリアさんっ！！」
そうだった。
こんなこと考えてちゃいけないんだ。
今のオレは『出産中のマリア様』なんだから。
三度、おばさんの音頭とともにオレは力む。

なんか、便秘のうんこよりももっとすさまじいモノが下ってくるかんじがする。
それに股のあたりに物凄い固い感触がある。
「ほら、赤ちゃんの頭が出てきたよ。
いい？
こっからは力んじゃいけないよ。
力を抜いて。
ヒッヒッフーだよ」
もしかして。
それはかの有名なラマーズ法？
こんな時代から使われてた？
おいっ！
真理矢、余分なことを考えるな！！
今は無事に赤ちゃんを出産するんだって！！
じゃないと、精根尽き果てるまで永遠の『出産』の『痛み』地獄が続きそう。
うぇぇぇっ！！
それだけは絶対にＮＧだ。
「ひっひっふー」
おばさんほど上手にできないけど。
とりあえずチャレンジ。
頼む。
頼む。
頼む。
頼む。
本当に頼むから、早くその子を取り上げてくれっ！！

マリア様の痛み　☆産んじゃったよ（2）

ズルッていう感覚とともに、痛みから一気に解放された。
なんか、疲れた。
本当に疲れた。
もう、なーんにもできないくらい、疲れ果てた。
そんなオレの耳にその声は聞こえた。
「おぎゃあっっ！！」
赤ちゃんの泣き声に、オレは思わず閉じかけた目を開いた。
赤ちゃんを受け取ったヨセフさんが、オレの顔近くにその子の顔を近づけた。
「よく頑張ったな、マリア。
元気のいい男の子だよ」
その赤ちゃんの顔は、まだ血が付いていてキレイじゃなかったし。
水にふやけてなんとも言えない肌の色だし。
よくよく見てみると、顔とかパンパンで浮腫んでる感じだし。
でも、オレすっげーこの赤ちゃんが可愛いというか。
愛おしい？
って、これは追体験です。
ああ、マリア様。
オレ、この『痛み』の意味が分かりましたよ。
これは『喜び』の『痛み』で。
かつ、『苦しみの始まり』の『痛み』でもあったんだよな。

無事に産むこと、生まれてくること。
これがどれほど素晴らしいことで。
すごいことで。

大変なことなのか。
世の中のお母様方をオレ、尊敬します。
『生んでくれてありがとう』
心底そう思うけど、あなたは不安で不安で仕方なかったんでしょ？
これから、その子が歩む道はどうあっても『茨の道』で平坦じゃない。
『神の子』として生きなくちゃならない。
『普通の男の子』『普通の男性』としての『幸せ』をその子は手にすることができないことを、あなたはずっと『痛み』として心の中に飼ってたんだよな？
でも、オレ、その子は幸せだと思う。
だって、こんなにも生まれてきたことを、両親に、多くの人に喜んでもらえるんだから。
『第二のペイン……解放』
またしても声が降ってくる。
またあの半透明なでっかい手に、オレ放り投げられるのかな？
ぼんやりとする意識の中で見える巨大な左手。
「さっきは右手だったのになぁ……」
思わず呟いたオレに驚いたようにヨセフさんが覗き込む。
「もうちょっと……優しくされたいなぁ」

オレ、ソフトＳＭならまだ我慢するのになぁ……
そんなオレを問答無用で引っつかむ巨大な左手にオレの体は持ち上げられ、また放り投げられる。
地平線の彼方へまっすぐに。
「今度はなんだろうなぁ？」
現れたカードに、ヒキガエルよろしく貼りついたオレ。

もういいよ。
本当に、もういい。
オレ、出産体験しちゃったから、あとのことはもうどうでもいいし。
どうにでもしてってかんじ。
絵の輪郭が電流によってなぞられる。
この絵はなんだろう？
幼い男の子と、マリア様。
そして夫のヨセフさん。
その背後に見えるのは……悪魔？
とにもかくにも、起こるのは例の如くワープ現象。
こうも頻繁だとね。
慣れてきちゃって、もう言葉もないよ。
オレの意識は絵の中へと吸収される。
今度はどんな『痛み』だろう？
『妊娠』
『出産』
と来たら？
『育児』の『痛み』？
『幼児虐待』なーんてことなら、オレ断固拒否しますからっ！！

マリア様の痛み　☆思いやりを持たなくちゃ（1）

「マリア、危機が迫っている。
ここから逃げないと、この子の命はない」
オレの顔を覗き込むその人は、もちろんナザレのヨセフさん。
マリア様の旦那様で、救世主イエス・キリスト様のご養父。
その人が、低い声でオレにそう告げた。
オレの傍で幼い男の子が小さい寝息を立てて、安らかな顔で眠っている。
オレはその子を見てから、ヨセフさんを見た。
『妊娠』『出産』を経て、オレはほんの少し、母親の気持ちを理解できてきた。
この寝顔は可愛いし、愛おしいとも思える。
当たり前だよな。
あんな辛い思いして、大事に大事にお腹の中で育ててさ。
あんなに苦しい思いして、世に生み出すんだ。
可愛くないわけがない。
でもさ、逆にあんな思いしたにもかかわらず、幼児虐待とかのニュースはあって、苦しむ子供も沢山いるんだよな。
っていうか、『追体験』したオレにははっきり言ってその気持ちがわかんない。
「マリア？　大丈夫かぃ？」
ヨセフさんが心配そうにのぞき込む。
ええっと。
ここから逃げないと、この子の命が危ないんでしたっけ？
って、それまたなんで？
「ヘロデ王が、新しい王の誕生を知って恐れをなしたんだ。
この土地にいる二歳以下の子供はみな殺しにされる。
王にこの子の正体が見つかったら、この子は即刻死刑だ。

だから、この子を助けるために逃げなくてはならないよ。
それもすぐに」

ヘロデ王って、どっかで聞いたことがあるような気がする。
確か、大量虐殺したんじゃなかったっけ？
もしかして、みんな子供？
「どうしてそんなこと……」
よく考えろ、真理矢。
天は天で選んだ人間がいる。
その人間と天使とともに悪魔と戦おうとした。
天が選んだ人の最高指導者が『イエス様』だとしたら、悪魔はどうしたってその子を滅ぼしたいに決まってる。
でも、悪魔が全面に出てきて何かするってのはたぶん難しいから、利用しやすい人間使ってやるんじゃないのか？
だって、そういう腹黒さが奴らにはあるような気がするから。
「悪魔の使い……」
ポロリとこぼれた言葉に、ヨセフさんはごくりと息を飲んだ。
そうだ。
人が人を滅ぼしたいというよりも、これは天使と悪魔、天と地獄の争いなんだ。
『イエス様』の生死で、均衡状態にある両者の行く末も決まる。
大人になった『イエス様』を亡きものにするよりも、おそらく幼子であるときの方がはるかに簡単にけりをつけられる。
あいつらなら、そう考えてもおかしくないだろうな。
この子の命を守るために逃げなくてはならない。
その事実は変えられない。
だって、この子は『神の子』である前に『自分たちの子供』なんだから。

親としては当然、そう思う。

でも……ちょっと待ってと言いたい。
逃げることは賛成。
そうしなくちゃいけないとも納得できる。
でも、そうすることでこの子の命は守れるけれど。
けど。
「他の子たちはどうなるの？」
そうなんだよ。
『イエス様』を守らなくちゃならない。
それは目に見えて分かることなんだけど、他の子たちはどうなるんだろう？
歴史的に見れば、ヘロデ王は実際幼児の大量虐殺を行い、その子たちは最初の『殉教者』と呼ばれるらしいけど。
はたして、それが最善の選択肢なんだろうか？
「他の子のことはボクたちが考える問題じゃないだろう？
ボクたちはボクたちの子を守らなくちゃ！！
人の心配よりも自分たちじゃないのか！？」
ヨセフさん。
オレ、他人だから。
そう言われたら第三者的には納得だし、正解だって思う。
でも、オレ知っちゃったんだ。
想像する。
子供たちが無理やり親元から引き離され、拷問や酷い最期を強いられる。
その泣き叫ぶ声とか、悲鳴とか。
それすらもリアルに想像できちゃうんです。
それは、我が子をそうされるときと同様、胸が張り裂けるような『

痛み』になるんだよね。

だから、どうしなくちゃいけないのか。
オレには解決する方法は分からない。
ヘロデ王を操る悪魔をぶっ飛ばせれば、それが一番いいんだろうけど。
今のオレにそんなことができるかな？
だって、手を貸してくれるような天使様も近くにいないみたいだし。
「今は逃げろ。
その時が来るまで」
ふと聞き覚えのある声が聞こえた。
オレの視界にその方ははっきり姿を見せた。
ヨセフさんの後方に、腕を組んでたたずむ見慣れた金髪の名古屋巻き。
「ミカエル……様？」
オレの声に天使様は怪訝な視線を送った。
そしてツカツカ近寄ってくると、1？くらいまで顔を近づけてオレを見つめた。
その間、数十秒。
ミカエル様は顔を離すと「マリアはどうした？」とオレに尋ねた。
っていうか、なんかいつにもまして、キツイしゃべり方。
それに心なしか、若く見える。
「どうしたって聞かれても……なんとも説明が」
その言葉をミカエル様は「なら口を開くな」と一蹴した。
あんたが言うから答えただけなのに、なんなんだよ、その態度！！

マリア様の痛み　☆思いやりを持たなくちゃ（2）

「どこの馬の骨かわからんが、自分に対しての口のきき方には注意しろ。
二度目にはおまえの舌はこの世にないぞ」
ぞくりと背中が寒くなるほど、冷たい目で天使様はおっしゃった。
つーか、この天使様、ほんとにミカエル様？
オレの知ってるあの天使様？
「もう一度言う。
今は何も考えず逃げろ。
おまえの子はおまえの子であって、おまえの子ではない。
『我が主の子』だ。
おまえは『神』の『子』であるその子を悪魔たちから守る義務がある。
それが主の子を産み落とす『女』の『使命』だ」
楯突くことは許さない。
逆らうことは許さない。
それが義務であり、使命だと。
有無を言わさぬ圧力を天使様はかけてくる。
なんでだ？
なんでそんな言い方しかしない？
確かに天使様のおっしゃることはそのとおりなんだと思う。
それが『選ばれた』『人間』に課せられた神の『意思』なんだとしても。
「そんな言い方ないと思いますけど」
たとえ『舌』を切られても、オレは言う。
はっきり言わせてもらう。
これが『追体験』だというのなら、なおさらだ。
そして、こんな『ミカエル様』はオレ的にちょっと受け入れられな

い。
「おまえ……何者だ？」

天使様は怪訝顔。
そりゃそうだ。
天使様は何にも知らない。
オレが生まれるずっと前。
はるかに前に起きたこと。
オレなんて、宇宙の塵だった頃の話なんだ。
オレ、マリア様がどうして追い詰められたのか、その『痛み』がよく分かる。
天使からこんな高圧的に言われたら、それはすっげーストレスだと思う。
好きで『神の子』を産み落としたわけじゃない。
出来ることなら、好きな人の子供を産みたかったに違いない。
なんの不安も抱かず、普通の子どもとして育てたかったに違いない。
自分の子供のために多くの子供を犠牲にしなければならないという現実の前に打ちのめされ。
天使様の心ない言葉に傷つき。
それでも『神の意思』を文句も言わずに遵守したマリア様を、オレは尊敬する。
だってオレ。
追体験したって、絶対そんなマネできねーもん。
理不尽だし。
納得いかないし。
こんな『思いやり』の欠片もない言葉には怒りしか感じない。
「これは……悪魔の罠なのか？」
天使様はなんだか混乱しているみたいだ。

いいえ、違います。
これは『悪魔の罠』じゃなく、あなた自身の『意思』のなせることでもあるんですよ。

「あなたは間違ってる。
そんな言い方じゃ、あなたの主の意思なんて人には通じません。
心のない言葉は相手を追い詰めて、やがて自分に返ってくるもんです。
あなたが本当に『マリア様』を必要とするのなら、もっと『思いやり』を持たなくちゃ。
この先絶対に痛い目を見ますよ」
そう、マリア様は傷ついている。
だって、マリア様はか弱い女性なんだから。
『聖母』と祭り上げられ、それを演じたか弱い女性。
『神の子』ではなく、腹を痛めて産んだ『自分の子』を必死に守りたかっただけの普通の女性。
そんな彼女を少しでも理解してあげなくちゃ、彼女が可哀想すぎるって。
だって、誰も『本当の彼女』を知らないから。
彼女がどれほど心の中で泣いているのか、その声を聞いてあげようともしないんだから。
『第三のペイン、解放』
三度目にもなると、もう覚悟がしっかりできてくる。
出来れば、これが最後であってほしいけど。
カードって三枚っきりじゃなかった気がする。
ミカエル様の向こうから、半透明の両手が伸びてくる。
それらはミカエル様やヨセフさんの体をすり抜けて、オレの体を握りしめる。

『最後のペイン……開口』
そう。
次が最後か……

オレは目を閉じる。
言いたいことは言った。
過去を変えることはできない。
だけど。
「待てっ！！
おまえの名はなんだ！！」
ミカエル様が宙に投げられるオレを見て言った。
ああ、そうね。
じゃ、よく覚えていてもらおうかな。
「テンシン……天林寺真理矢で『テンシン』ですよ、ミカエル様」
ミカエル様の姿が小さくなって見えなくなる。
目の前に最後のカードが現れて、オレの体は引き込まれていく。
最後のペインってどんなことだろう？
これ以上の『痛み』って。
もう想像すらできねー。

マリア様の取引　☆マリア？　それとも真理矢？

私は正しい。
私の選択は間違っていない。
信仰を捨て。
天に背き。
天使たちを裏切って。
悪魔の言葉に惑わされ。
地獄の底に堕ちようと。
私は間違っていない。
だって、私はもう二度と同じ苦しみを、同じ痛みを味わいたくないんだもの。
だから、『男』という姓で転生することを望んだんだもの。
彼はきっと怒るでしょう。
私の意思が彼を支配することで、彼はもう二度とこっちの世界には出られない。
彼の魂を犠牲にしてでも。
誰の魂を犠牲にしてでも。
私は今度こそ守りきりたいの。
守れなかったあの子を。
もう二度と、あの子を失いたくない。
ただ、それだけが望み。

「そろそろお終いにしないかい、ミカエル？」
アスタロスはクスリと一つ笑うと、呆れたようにこちらを見た。
昔からコイツは好きではなかった。
幼いころからよくからかわれた。

天使の称号も、コイツの方が上だった。
ろくでもない性格しているくせに、地位だけはある。
他を見下し、いつも自信満々で全く馬の合わないヤツだった。
「そんなに粘る必要はもうないよ。
だって、キミのマリア君はここには戻ってこないもの。
残念なお話だけど」
またしても自信たっぷりにアスタロスはそう言いきった。
過去と未来を見通す力を持つ悪魔。
それがアスタロス。
その瞳に『未来』が見えているのだろう。
「未来が見えるのは便利だな」
「威勢は削がれないねぇ。
そんなに傷だらけで、よくも言えたもんだね。
人間になって、力もなくて。
立っていられることには賞賛したくもなるけど、わざわざそんな思いまでしてあんな役立たずを待つおまえの心境が知れないよ。
あんなのは無価値だろう？
だいたい、なんで『男』になんか転生してやった？
神の子はどうするつもりだ？
それなしで、我々に勝てるとでも思っているのか？
それとも神はお年を召されて、ボケてしまったかな？」
「主への冒とくは許されない」
「それは天使だったころだろう？
仕える相手は神じゃないからね。
何を言っても許される。
おまえは可哀想にな。
いつまでも首の鎖をはずせない」

言いたいことをベラベラと。
『神の子』なしでサタンの軍団と戦うつもりなどない。
だからと言って、アレに『神の子』を産めなどとも言うつもりもない。
「勝算ありって顔だねぇ、ミカエル。
じゃ、その自信をぽっきり折らせてもらおうかな」
そう言うと、アスタロスはニンマリと虫唾の走る笑みを浮かべた。
なにをしようというのだろう。
アイツのあの顔は、見ているだけで吐きそうだ。
「ネビロス。
ご苦労だった」
その声に、ゆっくりと黒竜が道を開ける。
その道を真っ直ぐに歩んでくる。
見慣れた顔と見知った顔。
そしてそうでない顔の三つ。
「お帰り、マリア君。
いや……『聖母マリア』と呼ぶべきか？」
アスタロスはそう、アレに向かってそう告げた。
見慣れた顔のアレの表情は硬く、自分の知るもう一人の女の影が重なった。
「ミカエル、お久しぶりね。
真理矢はもう私の支配下にある。
あなたのもとには戻らないわ。
でも……ここへ戻るというあの子の強い願いは私、叶えたつもりよ」
テンシンであって、テンシンでない。
テンシンの声であって、テンシンの声でない。
『マリア』と呼んでいた女がそう告げる。
アスタロスの切り札はこれか……

ため息が出る。
なにが『あの子の願い』だ、バカマリアめ。
己にテンションの何が分かるというのだ。
「マリア、おまえは何をしようとしているのか分かっているのだろうな？」
悪魔と取引をする。
我らを裏切り、成したいと思うこと。
おそらくただ一つ。
「神の子を守るために地獄に下るというのだろう？」
その言葉に、マリアの眉がぴくりと動いた。
想定内だが、腹が立つことこの上ない。
なぜ、これほどまでに腹が立つのか？
「ミカエルはこの子にご執心だけれど。
他の天使も、主も、望みは私。
この子じゃないでしょう？」
しゃべるな、マリア！
これ以上、機嫌を損ねるようなこと言ってみろ！！
「私の力なしではあなたは天の戦士も呼べない。
まして、リミッター解除もできない。
あなたは天使でありながら、人として死ぬのよ」
マリアの言葉には憎悪すらこもっている。
ああ、そうか。
これはおまえの復讐なのだな。
悪魔と取引して、自分たちに復讐する気でいるのだな。
神の子を見殺しにした我々に、母親としての鉄槌を下す日を待っていたのだな。

まったく、面倒だ。
神の子は復活した。
真なる意味での『死』ではなかった。
肉体が滅んだだけのことで、魂の死ではなかった。
「おまえには理解できないよ、ミカエル？
彼女はすっごく傷ついて、身を引き裂かれるほどの辛さを経験したんだよ。
ある意味、おまえと同じ体験をしたのに。
おまえにはそれを思いやる気持ちがない。
だから、私がその気持ちを理解してあげたんだよ。
神も天にある者は皆、それを無視して利用するだけするんだ。
可哀想だよ、可哀想すぎるよね」
言葉巧みに近付いたのは目に見えていることだけれど。
この、いかにもという態度には苛立ちしか覚えない。
なにが『理解してあげた』だ。
『理解する』『フリ』をして、うまくマリアを手なずけただけのことだろうに。
それに加えて。
そのことを分かっていながら寄り掛かったマリアの弱さが気に喰わない。
いや、裏切るのも仕方ないとしてやってもいい。
問題は別にある。
「マリア、一度だけチャンスをやる。
おまえが何を思って、どう行動したいか。
そんなものは好きにしろ。
だが、そいつの体を使うな。
そいつを解放しなければ、おまえの魂など塵に返してやる」
「な……主の意志にあなたは背くの！？」
心底驚いたようにマリアは言った。

イライラする。
テンシンの声で、テンシンの顔で女言葉を使うな！

「主や他の天使を納得させるだけの価値がそいつにはある。
いいか、これが最後だ。
天林寺真理矢を解放しろ。
さもなくば、おまえを滅す」
きっぱりと答えて見せる。
マリアの瞳は混乱している。
「神の飼い犬だとばかり思っていたけれど。
案外そうでもないみたいだ。
ねぇ、マリア？
売られた喧嘩は買ってあげたらどうだい？
なんなら私とネビロスも力を貸してあげるよ。
キミの思いを成就してあげること。
それも取引の一つだからねぇ」
そう言うと、アスタロスはマリアの足元に銀色に輝く剣を出現させて見せた。
「天使を殺す悪魔の剣だよ。
それを手に取るといい。
そして、キミの覚悟を見せつけてあげるがいい」
『悪魔と取引すると決めた女の覚悟をね』と、アスタロスはクツクツを喉を鳴らしている。
マリアはその剣をゆっくりと拾い上げた。
どうやら自分の言葉に耳を貸す気はないらしい。
チラリとネビロスを見る。
ネビロスの鎖に両手を縛られ、猿ぐつわをされたヨハネが必死に鎖を解こうともがいている。

そのたびに、ネビロスに凹られる。
それでも彼は抵抗を止めない。

ヨハネと目が合う。
沈痛な光を湛えた瞳から言葉が流れてくる。
『真理矢を救ってくれ』と。
「わかっている」
ヨハネのことは、この際二の次にさせてもらう。
彼も『選ばれた人間』だし、アレの守護天使がいる。
いざとなれば、嫌でも手を出してくるに違いない。
だから、彼の命の心配はしない。
瞬間、両肩を鋭くて熱いモノが打ち抜いた。
それは自分の動きを封じ込める。
まるで壁に張付けにされているように――
「さぁ、心おきなくやりたまえ、マリア」
黒い瘴気の楔。
それはアスタロスが放ったもの。
コクリとマリアが頷いて、剣を構えて駆け寄ってくる。
「あのバカモノが……！！」
マリアの構えた剣が身を貫いた衝撃が駆け抜けて。
ゆっくりと瞳を閉じた。

マリア様の取引　☆『神の子』として

『最後のペイン』だと、空からの声は言っていた。
『妊娠』『出産』『育児』を経て、オレが最後に経験するもの。
「イエスの……死！？」
オレは人の波の中にいた。
世に有名な『イエス・キリストの公開処刑』である『十字架の磔刑』が行われようとしているその時のマリア様にオレはなっていた。
「なんて酷い仕打ちなのでしょう、マリア様。
師は受難を予知し、これを静かに耐えよとおっしゃった。
我々だけでなく、母君様であられるマリア様にまで。
主の意思とは、なんと苦行に満ちたものでしょう」
若い二十代後半の男性がオレの隣に立っていた。
目には涙をたたえ、じっと前を見据えていた。
オレもそっちに目を向ける。
人の波をかき分けるように、一人の痩せた髪の長い中年の男が大きく、重そうな十字を背中に負いながら。
一歩、また一歩と丘を上ってくる。
時によろけ。
時に膝をつきながら。
全身は血にまみれ、傷だらけになり。
『しっかり歩け』と鎧姿の兵士らしい人間に鞭打たれながら、その人はただひたすらに歩いていた。
「イエス……」
オレ、確かこんな場面を映画で見たような気がする。
あれはなんだっけ？
そうだ、親父が借りてきたビデオじゃなかったかな？
キリストの磔刑をテーマにしていた。
あの映画の時、オレは酷いことするなぁとは思っていたけれど。

実感なんてものはなかった。
だから見ていることができたんだ。

生暖かな風が駆け抜ける。
その風に乗って、血と土埃の匂いが鼻をつく。
耳を打つのは、人だかりの歓声と悲鳴。
彼の代わりに身を投げ出そうとする人もいた。
でも彼はにっこりとその相手に微笑んで、歩みを止めようとはしなかった。
「なんで……」
自分が死ぬって分かっているのに、あの人はあんなにも安らかにほほ笑むことができるんだろう？
今だって十分辛いだろうけど、磔はもっと苦しいのになんで抵抗しないんだろう？
『死』を受け入れているからなのか？
『神の子』だから？
っていうかさ、自分の子供が今から処刑されるっていうのに、なんでそれをじっと耐えなくちゃなんねーの？
あんな痛い思いして産んだんだ。
卵とかでポコって軽いかんじで産んだんじゃないんだ。
お腹にいるときだって、大切に大切に育てたんだし。
大人になるまで必死に守ってきたんだ。
なのに、なんで殺されると分かっている我が子の姿を見届けなくちゃならない。
それが『聖母』としての『使命』だと言うんなら、オレには絶対、そんなマネはできないね！！
人の波をかき分け、道に飛び出ようとするオレの腕を、誰かが思いきり掴んだ。

「何をしようというのだ、おまえは」
聞き覚えのある声だった。
振り返らなくても分かる。
知っている方であって、そうでない。
「止めないでください、ミカエル様」
オレは振り返らずにそう言った。
でも、天使様はオレの腕を放してはくれない。
「おまえがしようとしていることの意味を考えろ」
オレのしていることの意味？
オレは『親』として当然のことをしようとしてるんだって！！
だってそうだろ！？
こんなことあっちゃならないことだろ！？
「『親』なら『子』の意志を尊重しろ」
は？
子供の意志？
なに言ってんだ、天使様！？
「イエスは神の飼い犬ではない。
自らの意志でそこに立つことを決めたのだ。
誰にもそれを止める権利はない」
違うだろ？
彼が『神の子』として『生きる』ことを強いられなかったら、こんなことにはならなかっただろうが！！
彼は好きで『神の子』として生まれてきたんじゃないんだって！！
「本当にそう思うのか？」
オレはゆっくりと振り向く。
相変わらずオレの知っている天使様よりも若い感じがするその人は、それでも前回ほど尖ったかんじじゃなかった。

なんだ？
あのめちゃくちゃ高ピーなオーラはどこいった？

「おまえは本当に『神の子』が『望んで』生まれてきたわけではないと思うのか？」
っていうか、ミカエル様。
一体なにをおっしゃりたいの？
「じゃ、なんですか？　彼は『望んで』『神の子』に生まれてきたっていうんですか？」
ミカエル様は無言だった。
なんだよ、なんだよ。
あんた確証ないんじゃないの？
そんなこと言ってオレを止めようとしたって無駄です。
「人は皆、生まれる場所を自ら決めて生まれてくるのだ」
ミカエル様は静かにそう言った。
「自分で決めるって、赤ちゃんがってことですか？」
オレの質問に、ミカエル様は大きくため息をつく。
「天にあっては魂だ。
赤子の姿ではない」
言っている意味、いまいち分んないんすけど。
「魂の形はそれぞれだ。
性別も、姿も、『宿り場所』と『運命』を決めてから形成される。
だから人は皆、納得の上で決めているのだ、自分の宿命を。
ただ、それを自らの意志だと気付く者はほとんどいないがな。
自分で決めておきながら、我らに逆恨みするようなバカ共も多い。
おまえのようにな」
棘だらけのお言葉ですなぁ。
って……天使様、オレのこと知ってる？

「おまえの存在は今の自分には理解できていない。
ただ、想像はできる。
おまえは『未来のマリア』なんだろう。
ま、見る限り、出来損ないみたいだが」
おっしゃるとおり。
って、おいっ、オレ納得すんな！！

「おまえにチャンスをやる。
『神の子』の前に出る『チャンス』をやる。
今言ったことが正しいか、否か。
その眼で見極めてくるといい」
そう言うとミカエル様はオレの腕を放し、オレを突き飛ばす。
つーか、オレの知ってる天使様より絶対乱暴な気がする。
オレはよろけながら道に出る。
体制を崩して、その場に膝がついてしまった。
重たい足音がする。
引きずるようなその足音は、オレの目の前でぴたりと止まる。
傷だらけで血まみれで。
ちまめだらけのゴツゴツとした骨ばった足。
その足元をたどり、オレは見上げる。
十字を背負ったやせ細った『イエス様』がそこにいた。
「イエス……様」
イエス様はオレをじっと見つめていた。
でも、それはほんの数秒。
まるで全てを悟ったような眼でイエス様はにっこりと。
本当に穏やかな笑みを浮かべた。
なんて顔してみるんだ、あんた。
なんでそんな顔で切るんだよ、あんた。

あんた、今から死ぬんだよ！？
苦しい。
本当に苦しくて辛い責め苦にあうってのに、どうしてそんな顔出来るんだよっ！！
「母上をお願いするよ、少年……どうか、母上を救ってあげてほしい。
親不孝な私の代わりに……」
聞こえるか、聞こえないか分からないほど小さかった。
もしかしたら、彼の心の声だったのかもしれない。
でも、オレのことが見えてるみたいに彼は笑い、彼は言った。
ああ、そうなんだ。
オレ、間違ってたんだ。

オレはマリア様の痛みを体験して、『母親』っていうもんがどんなものなのか。
それを理解したつもりでいた。
でも、やっぱりそれは疑似体験で。
オレは本質を理解してなかった。
マリア様。
あなたは『神の子』として生んでしまって申し訳ないって思ってたんだよな。
もっと、『普通の子』として生んであげられたなら。
苦しんで死なせることも、重荷を背負うこともなく、もっと自由に充実した人生を送らせてあげられたに違いないって思ってたんだよな。
でも、それ違うんだ。
全然違ってたんだよ。
彼は感謝してる。

『神の子』としてこの世に産んでくれたことを、心底感謝してる。
彼は彼でなければできないことを。
この世でなすことができることに誇りを持っている。
それは産んでくれたのが他でもないあなただったからなんだって。
あなたの『息子』として誇り高く死んでいくことが出来るって。
オレ、その気持ちはすごく理解できる。
男に生まれ、男として育って。
やっぱり人にできない自分だけのことをしたいって、そういうでっかい夢みたいな、希望みたいなものは持ってるんだよな。
だから、彼は『処刑』すらも『苦痛』じゃなくて、『誇り高い偉業』なんだと考えてるんだ。
彼は『神の子』として死ぬんじゃないんだ、マリア様。
あなたの息子として。
精いっぱい生きてこれたこと。
彼を支え続けたのはなによりもあなたの深い愛だったんだよ。
あなたの愛で包まれた彼は、最後の最後までその愛に応えていたんだよ。
あなたは苦しむ必要なんてない。
子供を死なせること。
目の前で死んでいくこと。
それを指をくわえてみていなければならなかった苦しみは、本当に辛かったと思う。
擬似体験のオレでさえ、こんなに苦しいんだ。
本当の母親であるあなたはこんなもんじゃなかったでしょ！？
でも、彼は自分の最後の仕事を立派になすところを、あなたに見てもらいたかったんだ。
あなたに『よくやった』と褒めてもらいたかったんだよ。
ねぇ、マリア様。
オレ、あなたの『痛み』、一緒に背負ってあげるから。
どうかもう、自分の心を解放してあげたらどうかな？

『最後のペイン、解放』
頭上から声が響く。
オレはゆっくりと見上げる。
「ひぃぃぃっっっ！！」
おいおいおい。
右手、左手、両手ときて。
今度は何かと思ったら。
半透明の大きな彫像みたいな顔。
しかも、その顔って。
ミカエル様のでっかい彫像みたいなお顔が、オレに向かって口を開いて迫ってくる。
まさかと思うけどさ。
そのお口でオレを飲みこんじゃうってわけないよな？
でも、こういう場合、大抵オレの想像的中なんだよな。
迫ってくる口の奥が光っている。
そこがおそらく出口なんだろうけど……
その光を見て、オレの目ん玉飛び出そうになった。
そこに映し出された光景に、見知った顔がたくさんあった。
「……どうなっちゃってるの？」
オレがミカエル様に剣を向けていた。
ミカエル様は全身切り傷だらけの上に血まみれで。
肩にはなんか、黒い杭みたいなのが突き刺さっている。
剣を構えたオレが、ミカエル様に向かってダッシュする。
「ちょーっと待ったぁ！！」
オレは走り出していた。
まっすぐ、大きく開けられた彫像のお口の中へと――
間に合うかな？

間に合ってくれよ。
じゃなきゃ、オレ。
悪魔だろうと。
神様だろうと。
誰だろうとぶっ飛ばしてやる！！

マリア様の取引　☆夢だったらいいのにな（1）

これが夢だったらいいなぁ。
起きたら全部『夢』で、『ああ、なんだ夢だったか』なーんて言っちゃいたい。
「おいっ、コラ！！
バカテンシンッ！！
アホなこと考えてないで、さっさとこの胸糞悪い剣を引き抜け！！」
心地いいと言えば心地いい怒声が、オレのすぐ耳元で聞こえる。
と、同時にこれが『夢』じゃなく『現実』だってことに気づかされて、オレのテンション急降下。
まぁ。
こっちの世界に戻ってこれたんだから、それは喜ぶべきことなんだけど。
このシュチュエーションがねぇ。
はっきり言って笑えない。
っていうか、喜べないし。
オレ、この剣抜いた途端に目の前の天使様にぶっ飛ばされちゃうってことないよなぁ。
いや、それはないと断言できない。
だって、目の前の天使様の目、ものすっごく座ってますから。
「あの……抜いちゃっていいんすかね？
抜いた途端に血がドバッとか、オレのほうにかかっちゃったりとか。
ミカエル様が貧血っていうか、血が足りなくなって倒れちゃったりとかしちゃわないですかね？」
いっそ、貧血で倒れてくれちゃった方がオレ的にはセーフな気がする。
「こんのどあほうがっ！！
この状況下でそんなこと言える余裕あると思ってるのか！！

寝ぼけるのも大概にしろ！！」
だって、悪魔よりあんたのほうがオレ怖いんだもん。
悪魔はさ、なんとなくだけど。
スッパリ、オレのこと切り捨ててくれそうなんだけど。
この天使様、オレのことなぶりそうな気がするのよね。
「早く言われたことをやらないと、そのとおりにしてやるぞ」
「ややや……やります。やりますってばっっ！！」
怖ぇよ。
ハンパなくこの人怖ぇよ。

オレは握っている剣の柄にギュッと力を入れる。
銀色の刀身をした剣は、ガッツリとミカエル様の右腿に刺さっている。
ちょっとやそっとの力じゃビクともしない。
もともと、これはオレがやったことだから仕方ない。
だって切羽詰まってたし。
勢いは止められなかったし。
心臓目がけて剣を突き刺そうとしていたマリア様からオレの体を取り戻し。
緊急停止しようとしてもできないから、とりあえず心臓以外ならと突き刺しちゃった場所が右腿で。
できることならミカエル様に剣を突き立てるようなマネはしたくなかった。
心が痛いというよりも。
恐怖がオレの胸を占めているって言う方が正しい表現。
でもね、でも。
これはさ、不可抗力だし。
それに、ある意味これってギリギリセーフってことでしょ？

「おまえ、抜く気あるのか？」
頭上から、低いうなり声みたいなのが聞こえる。
それ！！
それがあるから抜きにくいんですって！！
っていうか、刺した時よりもなんか、すっごくこの剣に抵抗されている気がするんすけど。
「悪魔の剣は、刺した相手の魂を吸おうとする。
刺した場所が魂の宿り場所に遠かっただけマシだが。
早く抜かないと致命傷を外したというおまえの『ギリギリセーフ』はそうでなくなるぞ」
「って、そういう大事なことはもっと早く伝えてくださいって！！」
淡々とした口調で危機迫ること言わないでっ！！
って、オレのアタフタ焦るところ見て、天使様は楽しんでないでしょうね？
「おまえみたいにMじゃない」
ううっ。
オレだって、あなた様に会うまでは己が『M』資質なんて知らなかったですよぉ。
って。
認めるな、オレ！！

ああ、あなた様は本当に『ドS』な天使様ですよ。
オレはちらりと天使様を見る。
心の声をばっちり聞いておいでの天使様の眼は、ますます座っていくばかり。
いかん。
いかんぞ真理矢。

とにかくこの密接した状況から脱出して、距離を取ろう。
この天使様のことだ。
悪魔をぶっ飛ばす前に、オレのことを軽ーく締め上げるに違いない。
オレはブンブンと頭を大きく振ってから、気合を入れるようにギュッと柄を握った。
「くぅぬやろうっっ……！！」
天使様の足に根でも張っているかのように。
抵抗しまくる悪魔の剣をオレは思いきり引っ張る。
ズズズ……ズズズ……と少しずつ、剣は天使様から離れていくが。
代わりにボタボタと血が塊になって地面に落ちる。
しぶきになって顔とかにかかるよりはマシだけど。
赤い血なんてもん、見慣れてないから。
なんか、頭クラクラするんすけどぉ。
「これぐらいの傷を見て気絶するなよ、テンシン。
気絶したらおまえのことを未来永劫、ヘタレ下僕と呼んでやる」
『ヘタレ』って言われても。
男子は『血』に強い生きもんじゃないんすよぉ。
それにオレってやっぱりあなたの『下僕』なんですか？
まぁ、この天使様とオレで『対等』なんてことは絶対にありえないけど。
「くっそぉぉぉ！！
抜けやがれ！！」
渾身の力を持って剣を引き抜く。
ズルリ……と、『大きなカブ』が抜けるがごとくに剣は抜け、オレの手元を離れて宙で弧を描く。

「やべっ！！」
あまりの勢いで手から滑って宙に投げ出される格好になった悪魔の

剣は、ゆっくりとゆっくりと弧を描いたまんま、オレと天使様から少しばかり離れたところにいた二人の悪魔の前に落ちていく。
「どうもありがとう、マリアちゃん？」
にーっこり。
いやーな笑いを浮かべたのは言うまでもなく、アスタロス。
美形が浮かべる厭味な笑みって、超ムカつく。
これは美形への嫉妬？
オレってやっぱ、ちいせぇ……
「バカテンシンが」
憤慨あらわな天使様のお声が背後からする。
その声にオレの背筋がピリリと寒くなる。
そりゃ、怒りますよね。
敵に武器、渡しちゃってるんですもんねぇ。
でもオレ、ワザとじゃないんすよぉ。
こう、冷や汗っつーかなんつーか。
手が滑っちゃっただけなんですってば。
許してもらえません……よねぇ？
ゆっくりと振り返る。
天使様の座った眼はもはや直視できません！！
でもあなた様の体からは一応引き抜いたんだし、良しとしてもらわないと。
ここからはオレと手と手を取り合って、あいつらブチのめせばいいだけの話じゃぁないっすか。

「すごい自信だねぇ。
たかがマリアの意識を封じたくらいで。
私らを倒した気でいるんじゃないの、マリアちゃん？
でも、正直驚いたよ。

キミにこんなことができるなんて。
さて、マリアとの取引はいかがしたもんかな？
キミで『継続』ってわけにはいかないのかな？」
アスタロスがちらりと舌先を見せながら言った。
コイツ、オレのこと完璧になめてるよなぁ。
そりゃさ、なめられても仕方ないけど。
オレ、コイツにだけは従いたくないと思う。
「断固『拒否』だね」
だいたい人を道具にしか思ってないような輩に、なーんでオレが従わないといけないっての。
「それって、そこの天使にも言えることなんじゃないのかな？」
アスタロスはそう言って、クィクィッと顎を動かしてミカエル様を指した。
ああ、そうね。
そういや、この天使様も『人』を『道具』にしか思ってなかったっけな。
「それ、昔の話でしょ？」
その言葉にアスタロスは鳩が豆鉄砲食らったような、心底びっくりした顔をして見せた。
一拍の後。
「あはははは！！
キミって本当、マリアと全然違うねぇ。
なんでだろう？
これが『男性体』なのか？
いや、傑作」

マリア様の取引　☆夢だったらいいのにな（2）

腹を抱えて大爆笑って。
そりゃ失礼でしょ？
「やりにくいねぇ。
やりにくいよねぇ、ネビロス。
あのマリアは、どうも私たちに反抗的でイライラするんだよねぇ」
そうアスタロスはネビロスに同意を求めるように言った。
ネビロスはそんな主人に大きく頷いて見せ「言う通りですぅ」と答えた。
「今度のマリアさん。
オレっちもずっとやりにくいと思ってました。
でも、ご主人のお許しなかったんで、殺っちゃえませんでしたですぅ」
アスタロスはネビロスの返答に「ああ、そうね」と頷いてから「どうしたい？」と尋ねた。
「おまえ、どうしたい？
私はアレを消したいね。
あの可愛くない天使もろともね」
オレはアレ扱いで、こっちの天使様は『可愛くない』ですかぃ！
っていうか、オレ、悪魔にも『下等生物』扱いなのね。
「オレっちもご主人に賛成ですぅ。
アレは早々に消した方がいいです。
可愛くない天使なんか、アレがいなくなればなぶり殺しですぅ」
アイツ、いっつも思うけど。
口調と言ってる内容のバランスが全然取れてない。
オレ、なんかすっげー頭痛い。
「ご主人は手を出さなくても、オレっち一人で殺ッちゃえると思うです。

だからお許しいただきたいですぅ」
そう言って、ネビロスは黒の大鎌を構えた。
鎌の先端が鈍く光ってる。
あれでぐっさり刺されたら、痛いどころの話じゃないだろうなぁ？
たぶん、さっき隼人を助ける時みたいに「準備運動いいですか？」
なんて猶予、くれないだろうし。

つーかさ、オレね。
このままアイツらの好き勝手に言われるのもされるのも、許せない
んだよね。
じゃ、どうするかっていえば。
アイツらじゃないけど。
「まとめてブチのめすんだろう？」
いつの間にかオレの傍らに立ち。
いつの間にかオレの肩に手をかけた天使様が、オレの心の声を代弁
してそう言った。
なんかオレと天使様、通じ合っちゃってる？
「初めから通じていないわけがない」
ちょちょちょちょっ。
そんな魅力的な力強い目であんまりオレのこと見ないでもらえます？
天使様は『男性体』。
もちろんオレも『男性体』。
これはダメ！！
アブノーマル反対！！
「バカテンシンが……！
まぁ、いい。
その話はこの腐れ下郎を殺ってからゆっくり時間を取ってやる」
いや、いいです。

時間なんてゆっくり取らなくても。
その顔見てたら、いやーな予感しかしませんから。
「そんな傷で威勢だけは削がれないんだねぇ、ミカエル？
マリアの意識はおまえらには力を貸してなどくれないよ。
取引したんだから、意地でも貫くだろうさ。
それでもその出来損ないに何とかしてもらう気でいるのなら、おまえは気でも狂ったとしか考えられないねぇ」
ええっと要するに。
今までオレがミカエル様によって使えていた力ってのは、全部マリア様の意識のおかげってことで。
今のオレは出来損ないだから、なーんもできないっておっしゃってる？
「正解」
ネビロスとアスタロスが揃ってそう告げる。

「ふっざ……」
けるな！！と言おうとして、オレは横の天使様に口を塞がれる。
背後から回ってきた大きな天使様の手はオレの口をしっかり蓋して、息苦しささえ感じる。
って、こんな強くふさがれたら、オレ、マジ窒息しますけど。
「我慢しろ、バカテンシン」
そう言うと、ミカエル様は目の前の悪魔に向きなおる。
「なにか言いたいことがありそうだねぇ、ミカエル？」
アスタロスの余裕たっぷりな言い方を、逆にミカエル様は鼻で笑って見せた。
「おまえの眼はやはり節穴だな、アスタロス。
過去と未来を見通す力を持っているにもかかわらず、その眼はなんの役にも立っていない」

ミカエル様の言葉にアスタロスは眉毛を寄せた。
それから納得がいかないように「この力は万能だ」と吐いた。
「私の眼で見えない過去も未来もない。
おまえたちの行く末もすでに見えている。
それでも違うと言うのか、ミカエル」
ミカエル様はまた鼻でせせら笑うと「万能などない」と告げた。
「我が主でさえも万能でないのに、おまえたち下等な生き物に万能などありはしない」
おーい。
神様って万能じゃないの？
オレ、その事実の方がショックなんですけど。
「おまえ、少し黙ってられないのか？」
ミカエル様の視線がこちらに向けられる。
やべっ！！
あの目、オレを半殺しにしてやろうかと言ってる。

「ふみばしぇん」
塞がれた口の下で返事をすると、ミカエル様は大きくため息をついた。
「敬愛する神のことを万能じゃないと言い切るなんて。
それは本心かな？」
「主は万能ではない。
万能であったなら、何万、何十万という裏切り者を出さずにすんだはずだ」
「なるほどね……
でも、下等な生き物というセリフは気に入らないな。
たかが『大天使』風情が大口叩きすぎだよ」
アスタロスは怒り心頭といった表情で天使様を見た。

天使様は気にすることもなく、涼しい顔だ。
「その『大天使』よりもおまえは劣る。
腑抜けた目に、腑抜けた耳を持っているのだ。
バカにされて当然だ」
さっきからよくわかんないんですけど。
『大天使』って位が低いんでしょうか？
決着付いたらネットで調べないといけないかなぁ？
いや、天使様に直接聞けばいいか。
って、聞いても『知識がない』と一蹴されるだけかな？
「腑抜けた目に腑抜けた耳だと？
何を言っている」
アスタロスの質問にミカエル様は意地悪く、喉を鳴らして笑って見せた。
それからオレの口を塞いでいた手を離すと、ぐぃっとオレの腰を自分の方に引き寄せた。
「おまえはこいつが『マリアの魂を封じた』だけだと思っているらしいが。
本当にそうだと思うのか？
マリアの魂はいま、こいつの中でどうなっているのか。
おまえは本当に見えないのか？
おまえのその耳は、こいつの中のマリアの声が聞こえないのか？」
「なにを言っている？
マリアの魂？
マリアの声だと？
そんなもの」
アスタロスもネビロスも困惑顔でオレを見ていた。
だが、二人とも揃って首を振る。
「おまえの言っていることは理解できないな」

「なぜ、見えないのか？
なぜ、聞こえないのか？
それはおまえたちが真実を見ようとしないからだ。
自分たちの凝り固まった思考でしか、物事をとらえようとしないからだ」
「なに！？」
「今から、おまえたちに真実をみせてやろう」
そう言うと、ミカエル様はオレのほうに顔を向けた。
今まで見せたこともないような極上とも呼べる笑顔を湛えたミカエル様に。
オレ、思わず胸がドキドキしちゃってます。
ダメだ、真理矢。
そっちの世界に行っちゃったら、普通の男子としての未来はないぞ！！
「準備はいいな、テンシン？」
しっとりとした艶のある天使様の声が、すぐそこでする。
「なななななな……」
なにをしちゃうんですか、今度は？
準備って、準備ってなんでしょう？
天使様の顔が近づいてくる。
それはもう、避けることもできなくて。
柔らかい天使様の唇がオレのそれに重なった瞬間。
『あああああぁぁぁぁぁぁぁ！！』
遙か遙か空の彼方から、天使の合唱が聞こえたような気がして。
オレはその瞬間、なんとも言えない優しい光と力に包まれた。

聖男子マリア様　☆大天使様と炎の剣（1）

なにも見えない。
なにも聞こえない。
なにも感じない。
そんな闇の中にずっといた気がした。
『だから、もういいんです』
そうなの？
私、天使たちを裏切ろうとしたの。
天を裏切って、復讐しようとしたの。
『だから、もういいんです』
私を抱く、優しいあなた。
あなたは私の愛しいあなたなの？
いいえ。
違うわね。
あの子じゃない。
でも、この感覚はあの子そっくり……
『オレ、マリア様の痛み一緒に背負ってあげますよ』
ゆっくり見上げた私に、あなたはそう言ってほほ笑みかけてくれた。
その笑顔に、私が最後に見たあなたの顔が重なるの。
『あなたは楽にならなくちゃ……』
これは神の悪戯？
天使の贖罪？
いいえ。
それも違う。
きっとこれは奇跡。
イエス。
あなたが私のためだけに起こしてくれた『奇跡』なのね。

すごく心地よくて、すごく優しくて。
これを例えて言うのなら、きっと赤ちゃんがお母さんのお腹の中でまったりしている感覚だろうなぁ。
「我は求める。
汝の魂の剣を――」
耳元で天使様の声がする。
なんか求められたよね？
身体？
って、ミカエル様。
オレ、男なんですから。
胸なんかまさぐられてもないですって！！
瞬間、オレを包んでいた温かい光はミカエル様の右手に集まる。
強烈な光を帯びたミカエル様の手はオレの左の胸にある。
そして、天使様はその手をオレの体の中に突き刺した。
「ええええっっっ！！」
ちょちょちょちょちょちょっ！！
オレの体にミカエル様の手が入り込んでるよ！！
っていうか、胸じゃなくって、胸の下で手が動いてる。
なにするの？
なにがしたいの！！
オレ、どうなっちゃうの！！
死ぬの？
死んじゃうよね、普通。
心臓鷲掴みされて取り出されちゃうの？
いや、それこそ即死じゃん！！
「少し静かにしてろ」
目の前の天使様は、口付け前とは別人みたいに怖ーいお顔だ。

「はひ……」
こんなことされて冷静でいられるほど、オレ大人じゃないけど。
ミカエル様の右手がオレの体の中にあって、それはそれで全く身動きとれないし。
下手したら、本当に心臓握りつぶされちゃうかもしれない。
ここは言うとおり、静かにしよう。
冷静だ。
冷静になれ、真理矢。
ああ。
なんか、オレ、今日だけでどんだけ『不思議体験』してるのよ。
ギネス申請したら通りそうだよなぁ。
って。
どうやって認定してもらうんだっつーの。
「死ぬ気で気合入れろよ、テンシン」
死ぬ気で気合入れろって。
もうすでにオレ、死ぬほど気合入ってると思います。
だって、死にたくないもん。
オレ、このまんま。
モヤモヤした気持ちのまんま、絶対死にたくねー！！
「気合入れるベクトル違いだが……」
仕方ないとばかりに天使様はため息をつき、ゆっくりとオレの体から手を引き抜きはじめる。
「うぉっ！！」
ミカエル様の手が何かオレの体の中から抜き出した。
心臓？
いや、心臓みたいに熱いんだけど、心臓じゃない。
でも熱い。
熱くて、焼けちゃいそう。

ゆっくりと掴んだものが姿を見せる。
真っ赤に燃える炎。
焼けるほどに熱く、すべてを燃やしつくしそうなほどに尖った炎。
それを纏った真紅の刀身。
握られていたのは、炎の剣。
燃え盛る真っ赤な炎の剣だった。
「それは……マリアの剣……！？」
アスタロスが愕然とした様子でそう呟いた。
アスタロスだけじゃない。
ネビロスも恐れをなしたかのように、一歩後ずさった。
「見事だろう、アスタロス？
以前のマリアよりもずっと強く、しなやかで。
恐ろしいほどに熱い。
これがなにを意味するか、おまえにならわかるはずだな？」
ミカエル様の言葉に、アスタロスはごくりと唾を飲み込んだ。
「マリアの剣はその者の持つ魂の力によって強度が変わる。
それが……その者の力だと！！
そんなはずはないっ！！
そいつは出来損ないのはずなのに」
あくまでも否定し続けようとするアスタロスに、ミカエル様は「バカモノが」と言い放った。
「おまえ自身が招いたのだ。
おまえ自身がこいつの魂を鍛えたのだ。
相手の器量を見誤り、自らを窮地に招いたにすぎないのだ。」
「ミカエルゥゥゥゥ……！！」
「おまえはこの者の魂によって滅し、己の力のなさを永遠に後悔し続けるがいい」

そう言った瞬間、剣はより一層激しさを増し、その炎がミカエル様自身を包み込む。
「ミカエル様！！」
「ここからは……天使の仕事だ」
ミカエル様のつぶやきとともに、炎は体中の傷という傷を消し去りながら、ゆっくりと背中に回る。
そこで炎が大きく揺れて、形を作る。
バサリ……！！
振り払うように炎が一揺れした瞬間に、まばゆく光る白い翼がそこに出現した。
初めてミカエル様に会った時のことを思い出す。
神々しい光を放った天使様は、この世では絶対に見ることができないほど美しく、力強く感じた。
「これでおまえは完全に我よりも下等な生き物となったな、アスタロス」
ぞくりと背筋がすくむほど、魅惑的で、怖い声でミカエル様は言った。
アスタロスはそんなミカエル様を射殺さんばかりに睨みつけている。
「大天使風情が！！
調子に乗るなぁっ！！」
アスタロスの怒りに満ちた怒鳴り声が響くと、それに呼応するように黒竜がうなり声をあげた。
黒竜は黒い煙を口から吐き出し、ミカエル様に突進する。
「テンシン、邪魔だけはしてくれるなよ」
って、天使様はおっしゃった。
邪魔？
邪魔って？

「ひぃぃぃぃっっっ！！」

黒竜がこっちに向かって突進してくる。
天使様はひらりとかわし。
当然ながら対象物を逃した黒竜は、その怒りをあろうことかオレに向けてくる。
待てよ、待てっ！！
なんだってそんな目で見んだよ、おまえ！！
おまえが天使様に突進しそこなうから悪いんじゃねーの？
って。
「ひぃぃっっっ！！」
でっかい口をこれ以上は無理ってくらいに開けて、オレに向かって突進する黒竜ちゃん。
オレは猛ダッシュで逃げだした。
天使様、邪魔するなって。
オレに逃げろってことですか？
死ぬ気で逃げろなんて、ムチャぶりしずぎですって！！
逃げながら、オレは周りを見回す。
ミカエル様とアスタロスは対峙した状態。
あれ？
ネビロスは？
「隙だらけですぅ。
マリアさん」
背後から声がした瞬間、オレの首を狙うように黒い影が走る。
オレはそれをぎりぎり横にかわす。
「チッ！！」
舌うちが聞こえ、振り返ると宙にはばたくコウモリ男が一人。

聖男子マリア様　☆大天使様と炎の剣（2）

「不意打ちすんじゃねーよっ！！　卑怯者！！」
オレは逃げる足を止めることなく、ネビロスに言い放った。
ネビロスは首をコキコキ鳴らしながら。
「悪魔に卑怯も不意打ちもないですね」
と、普通に言った。
「おまっ……普通にしゃべれんじゃん！！」
間の抜けたしゃべり方ばっかしてたから、コイツはそんな気の抜けたしゃべり方しか出来ないアホだと思ってたのに。
やればできんじゃん、この悪魔。
「相当頭くると、話し方変わってしまうのですよねぇ」
そうなの？
「って……おまえ、隼人どうしたんだよ！！」
ネビロスの鎖に？がれていたような気がする隼人君。
今は姿がない。
「なーにを人の心配してるんです？
そんなの、おまえが勝ったら教えてあげますよ」
ああ、そうかい。
そう言っちゃいますか？
オレは逃げる足をとめ、くるりと踵を返す。
それからネビロスを凝視して、右手の人差し指を突き出した。
「オレがおまえに勝ったら、おまえ、絶対言うこと聞けよ！！」

「はて？　悪魔が約束なんてすると思ってるんでしょーか？」
しれっとした態度でネビロスは答える。
つーか、間の抜けたしゃべり方もムカついたが、こっちはより最低！

おまえ、絶対後悔させたる！
「悪魔は約束しねーだろうけど。
おまえ、男だろ？
男は負けた相手に敬意を払うもんじゃねぇ？」
オレの回答にネビロスは面白そうに片方の口元を釣り上げた。
「女性体では考えられないようなことをおまえはさらりと言いますね。
いえいえ。
それは面白い。
いいでしょー。
悪魔は約束をしないもんですが。
個人的にそうしてあげましょー。
ただし。
おまえが勝てたらの話です」
そう言うや否や、ネビロスは黒い大鎌を振りあげ、オレ目がけて攻撃を仕掛けてくる。
「せっかちめっ！！」
知ってるか？
せっかちな男は女の子に嫌われるんだぜ！
ああいうことやこういうことも、自分本位にせっかちに済ませるんじゃないのかって疑われるんだぜ？
どうしてこんなこと知ってるかって。
そりゃ、オレ男の子ですからね。
「余分なこと考える余裕なんてないでっしょー！！」
ネビロスの大鎌の先端がキラリ光る。
「余分なことねぇ……」
大鎌がオレの首をとらえようとした瞬間、オレは懐から取り出していたものでその進路を絶った。
「なにっ！？」

ネビロスの驚愕した声が響く。
そりゃあ、驚くよ。
オレだって、正直驚きなんだもん。
こんなもんでさ。
大鎌の刃先を食い止められるなんて、オレ、本当に本当に思ってなかった。
でも、反面できるかなっと。
チラッとは思った。
試しにやってみたら、的中で。
「なんだ、その武器はぁっ！」
なんだと言われても、見たとおり。
「カッターナイフ。
使ったことないの？」
右手に握られたカッターナイフの刃先に見事なまでに大鎌の刃先は食い止められ。
ガチガチと刃のこすれ合う音がする。
強度はねぇ。
ちょっと心配。
カッターナイフの刃先は折れるようにできてるし。
でも、オレのナイフはどういうわけか。
大鎌に負けてない。
これもオレの力？
オレ、すげーじゃん！！
「なにを……こんなもの……ぉっ！！」
渾身の力を込めるネビロスに、オレはほんの少しだけ力を入れる。
「オレのこと、すっげーバカにしてたと思うけど。
今のオレ、おまえに負ける気しねーし。
なんかおまえの動き、全部見えちゃってるんだよね、残念ながら。

降参してくれたら、助かるんだけど。
基本的に喧嘩とか、そういうのは好きじゃないし」
昔から、親父にはこう教えられてきた。
『人を傷つけること、なかれ』

「こんな……こんなものに、地獄の大鎌が触れないとは……！！」
ネビロスの顔に焦りまで見える。
「人も武器も見た目じゃないってこと」
オレはそう言って、カッターナイフの刃先で鎌を押し返す。
その力に鎌はネビロスの手を離れ、宙に投げ出される。
「降参してほしいんだけど？」
刃物を人の喉元に突き付けるなんて。
そんな物騒なマネごとは出来ることなら今回を最後にしたい。
実際には人じゃないけど。
「降参……させたい？」
ニンマリ。
喉元に刃先があるにも関わらず、ネビロスは余裕の笑みを浮かべて見せた。
なんだ？
なんだ？
あれ？
オレ、なんか忘れてる気がする。
「ギュエェェェッッッ！！」
オレとネビロスを覆う大きな影にオレは振り返る。
「いいッッッ！？」
忘れちゃいけないもん、思いっきり忘れてた。
嬉しそうな鼻息をオレに吹っかけながら、黒竜ちゃんがよだれだらけの口を開けている。

「さようなら、マリア。
おまえはよく頑張りました」
ネビロスがオレの腹を蹴りあげ、オレの体はよろけながら黒竜の足元に転がる。
そのオレを目がけ、呑み込もうとする黒竜の口が迫る。
ああ。
すみません、ミカエル様。
オレ、ドジっちゃいました。
頑張ったつもりなんすけど……こんな死に方じゃ、許されないよなぁ。
喰われる寸前、オレは目を閉じ。
向こうで戦う天使様に陳謝する。
目を閉じて数十秒。
オレの体に痛みはなく、代わりに聞こえてきたのは聞きなれない若い男の声だった。
「目を開けんか、真理矢！」
声は若いのに、どーいうわけかしゃべり方が年寄りくさい。
オレはゆっくりと目を開ける。
オレの前に白い羽根を広げた若い数名の天使がいて、その人たちが黒竜の頭に槍を突き立て、動きを止めていた。
その中心の天使の見覚えのある服装に、オレは首をひねる。
ド派手なアロハ。
見覚えのある赤、青、黄色。
「おまえの悪いところは、一つに集中すると周りが見えんくなることじゃ！！」
若くて、見た目、とってもイケメンな天使。

でも、これって。
「与一郎じーちゃん？」

どこか懐かしい面影を残した天使さんたち。
イケメン、美女たちの顔をよくよく見れば。
死んだじーちゃんやばーちゃん、与一郎さんに……あとはおそらくオレの知ってるじーさん、ばーさんの霊連中。
なんでしょうねぇ？
でも、なんで若返ってるのかが分からない。
オレさ。
ここへ来る前にじーちゃんたちを召喚したけどさ。
そのときはみーんな、じーさま、ばーさまってかんじだったんだけど。
髪はふさふさだし。
しわはないし。
ピッチピッチの二十代ってかんじ。
「わしらはな、今は天の軍団じゃろ？
なんで、こんな姿かおまえ分からんのか？」
「いやぁ……全然」
オレの答えに与一郎じーちゃん、もとい、与一郎さんははぁ……と大きくため息をつき、隣にいるオレのじーちゃんに「あれは誰に似た」とぼやいた。
「天の軍団を率いる総大将、ミカエル様の力が天界と同じってことじゃ。
その力の恩恵をわしらはモロに受けているってこと。理解できたか？」
天使様、今フルパワーってこと？
「この躾のなっとらんペットはわしらが引き受けた。

おまえは存分にそいつに仕置きをしてやれ！」
二ッカリと。
白い歯を見せ、にいーちゃん、ねぇちゃん天使たちは笑う。
「そんなこと……」

与一郎さんが言い終わるか否かって時に。
背後で動く気配にオレは振り向く。
ネビロスの大鎌が再びオレを目がけて振られる。
見える。
見えるんだよ、その刃先。
ハエがとまっちゃうくらいに超スローで。
カッターナイフを握る手とは逆の左手の人差し指と親指で。
オレはその刃先を掴む。
「なっ！？」
驚愕の目線？
そうだよなぁ。
たかが人間って思ってたんだもんなぁ。
こんな変貌は恐怖すら感じるでしょ？
「ね？
これが実力の差ってやつなの。
もういい加減、降参しよっ！！」
相手がたとえ悪魔でも。
オレは出来ることなら傷つけたくないんだよ。
だってオレは『痛み』ってのを知ってるから。
ま、ミカエル様には『甘すぎる！！』って怒鳴られちゃうこと必至ですけど。

「こんな屈辱……」
ネビロスは唇をギュッと強くかみしめて、オレを睨みつけた。
うーん。
コイツ、思った以上にプライド高いんだな。
相手、オレだもんね。
って。
もう少し、自分に自信持てよ、オレ！！
「気の毒だとは思う。
オレだって、まさかこんな力があったなんて思わなかったし。
でさ。
できることならオレとしては、おまえが悪魔とか関係なしで平和解決したいのよ。
だから、言うこと聞いてもらえる？
個人的なお約束だったでしょ？」
ネビロスはオレを凝視した。
短い沈黙の後。
ネビロスはふと、遠くの方に目を向けた。
オレも一緒にその先を見つめる。
アスタロスとミカエル様。
剣と剣を交えて戦っていた。
「おまえにとって、アレはなんだ？」
ネビロスは呟きにも似た声でオレに問う。
『アレってなんだ？』の『アレ』って。
「ミカエル様？」

ネビロスは答えなかった。
そのかわり『ご主人は』と言った。

「おそらく自分を許してはくれない」
その呟きに、オレはその意味の深さを知った気がした。
たぶん、オレと平和的解決をしても。
コイツに待っているのは『平和的でない』出来事なんだろう。
だから出来ないのか？
なんつーか、主従関係なんてもんはめんどくせーよ。
「オレ、おまえにどうしてやったらいいわけ？」
その一言に、ネビロスは驚いたようにオレを見る。
オレを凝視して数秒後。
ネビロスは「バカなマリア」と呟いた。
「やっぱり今度のマリアはやりにくいです」
その言葉に気を抜いた瞬間。
「えっ……おいっ！？」
オレの右手をグイッとネビロスは引き寄せる。
右手に握られているのは『カッターナイフ』。
その刃先が。
ネビロスの首を引き裂いた。

聖男子マリア様　☆命の重さは一緒だろ？（1）

一瞬の出来事すぎて。
オレはパニックに陥ってる。
いったい何が起きた？
いったい何が起きた？
いったい……
「しっかりせんかっ、真理矢！！」
遠くから与一郎さんの一喝が飛んできて。
オレはハッと我に返る。
オレは返り血を浴びていた。
顔にも、体にも、そして右手にも。
赤い色ではない。
青い色ではあるけれど。
それは生温かな感触をしている。
「くそくそくそっ！！」
カッターナイフをその場に投げ捨て、そこに仰向けに倒れているネビロスの首元を抑える。
溢れかえる青い血は、みるみる地面に広がっていく。
「止まれ！！
止まってくれ！！
っていうか、バカなことしやがって！！」
きっとバカなことしてるのはオレだって。
そんなことはわかってる。
でも、こんなことを望んでいるんじゃない。
こんな自己犠牲。
あっていいわけない！！

「……おまえは変わってる……」
絶え絶えの息の中、ネビロスは焦点の合わないような眼をオレに向ける。
変ってる？
バカ言えよ！！
どんな理由があったとしても、自分から命絶つなんてこと。
絶対にしちゃぁいけないの！！
「……おまえは……天の使い……オレ……悪魔……」
「そんなこと。
そんなこと関係ねぇよっ！！」
オレが天の使いだろうと。
相手が悪魔だろうと。
命の重さってのは一緒なんだろう？
「ヨハネ……その黒竜の腹の中……」
「えっ？」
「溶解まで……時間ない……早く……行け……」
妖怪？
「消化……始まって……」
ネビロスは苦しい息の下でそう言った。
黒竜の腹の中で、隼人が消化されそうになってるだってぇっ！！
ちょちょちょちょ！！
やばいじゃんかっ！！

でも、迷ってはいられない。
命の重みは一緒でも。
オレにとってアイツは特別な存在なんだ。
「わりぃ。ネビ。

オレ、行くわ……」
ネビロスの横たわる体の脇に落ちているカッターナイフを拾う。
オレ、薄情かもしんない。
死にそうなヤツ。
しかも、一応オレが手にかけたようなもんな相手をそのまま置き去りにしようとしてる。
「気に……するな。
それで……いい」
ネビロスはそう言って、小さく笑う。
こんなときに笑うなよっ！！
ポタリ……
オレの目から雫が一つ。
それを見てネビロスはさらに笑った。
「おかしな……マリア……」
それが最後。
ネビロスの体は黒い砂になって宙に舞う。

いなくなった目の前の悪魔に。
オレはどういうわけか泣いてしまった。
だってさ。
なんか悔しいだろ、こんなの！！
あいつ。
なんかすっげームカつくやつだったのに。
最後の最後でなんかいいヤツだったんだ。
出来ることならこんな形で、アイツとのケリをつけたくなかった。
オレ、甘い？
甘すぎる？
「真理矢！！」

飛んでくる声に、オレは涙を拭いた。
そうだ、真理矢！！
おまえは今、泣いてる場合じゃないだろ？
やることあるだろ？
そのためにここまで来たんだから。
「与一郎じーちゃん！！
オレをアイツの口の中、放り込んでくれ！！」
オレの言葉に、与一郎さんは待ってましたと言わんばかりにニッと笑った。
「おまえの愚痴はあとでたーっぷり聞いてやるから。
とにかく今は、隼人を助けてやれ！！」
それはおまえにしか出来ないことだ……と。
与一郎じーちゃんは囁いた。

オレの体を抱え、与一郎じーちゃんはふわりと舞った。
他のじーちゃん、ばーちゃん。
もとい。
にいちゃん、ねえちゃん天使が黒竜の頭を押さえつけ。
その口をこじ開ける。
「ほれっ！！　あとは任せた」
オレの体を本当に黒竜の中に放り込む与一郎さん。
いや、いいんですけどね。
オレが頼んだんだから。
「待ってるぞ！！」
こじ開けていた口が、オレが中に入った途端に閉じられる。
なんか、生き物の口の中に入るの。
今日2回目。
オレ、喰われたり、飛び込んだり。

出来ることなら今後こういったことはご免こうむりたいよ。
黒竜の喉を滑り台よろしく、オレは滑り降りていく。
オレはカッターナイフを持つ手にギュッと力を込める。
「頼む！！
間に合ってくれよ！！」
長い、長いスロープのその先に。
オレは隼人の姿を見つける。

聖男子マリア様　☆命の重さは一緒だろ？（2）

「隼人？」
隼人は鎖に縛られたまま、猿ぐつわをされたまま。
そこに横たわっていたんだけど。
「これ、なんだ？」
隼人を包み込む、卵の白身みたいなブヨブヨした球体。
オレたちを飲み込もうとする黄色い液体は、その球体に触れるとすぐにジュッという音と白い煙をあげて消えていく。
いやね。
酸だから。
胃液だから。
そういう音をあげているって考えてもいいんだけど。
どうも違う。
その球体が酸を浄化してるように見える。
「隼人……」
隼人は動かない。
でも、誰かに守られてる？
『ぼーちぼち限界だよぉ』
どこからともなくそんな声が聞こえてきた。
『早く割って、彼を頼むよ』
どこかで聞いたことがある声なんだけど。
誰だっけ？
『早く……』
聞こえてくる声が小さくなる。
オレはハッと我に返り、隼人に駆け寄る。
それから持っているカッターナイフをブヨブヨした球体の表面に突き立てた。

パンッ！！
という音とともに、球体は弾け消え、隼人が目を覚ます。
「隼人！！」
オレは隼人の猿ぐつわを解いた。
「おまえ、ほんもんの真理矢やろな？」
「ったりめーだっつーの。
じゃなきゃあ、こんなムチャしてこんなとこまで来るわけねーじゃん！！」
オレの返答に、隼人はニカッと歯を出して笑った。
「そやな。
おまえじゃなきゃ、こんなムチャせぇへんわな」
ガッチガチに結われた鎖を解くオレをマジマジ見ながら「ほんもんやな」とまた呟いた。
「なんや、おまえ。
ちょっとたくましくなったんちゃう？」
「こんなときにおまえ、なに言ってんの？」
「んー。
なんかさ、ちょっと輝いて見えるんよね」
輝いて？
オレが？
鎖を解く手を見つめる。
なんか、オレの肌の表面。
パール入りファンデを塗ったみたいにキラキラしてる。
「それ、たくましくなったんちゃうよ。
オレがキラキラしとるんだって」

手だけじゃなく。
オレの体中がキラキラしてる。
これってどういうこと？
『そこから出たら……説明してあげるよ。
急いで……』
またしても。
囁くみたいに聞こえる声に、隼人も首をかしげた。
「なんやろ。
オレ、眠ってる間ずっとこの声聞いたわ。
しっかりしろって。
おまえが助けに来るまで守るから、信じて待てって」
「……誰だっけなぁ？
うおっい……しょ！！
よしっ！！
ほどけた！！」
隼人を縛る鎖を投げ捨てる。
その途端、それに黄色い液体が群がった。
まるで意思があるようにそれらは鎖を飲み込み、鎖は一瞬で消えてなくなった。
「やべぇ！！
すぐにこっから出るぞ、隼人！！」
「でも、どうやって？」
どうやって？
今更、喉を上って口から脱出なんてできねーし。
「腹割って……しかないんじゃねぇ？」
オレの呟きに、隼人は一瞬真顔になった。
けど、すぐにプッと吹き出した。
「そのカッターで切れるんか？」
「やってやれないことはないっしょ」
カッターだって、立派な刃物じゃん。

「ま、そりゃそうだ」

そう言うと、隼人は周りをぐるっと見回した。
赤黒い視界。
決して、見通しはよくない。
そんな中をぐるりと見回し、隼人はある一点を指して「あそこやな」と言った。
「なんで？」
なんで、そこなのか？
オレにはどこもかしこも同じにしか見えない。
「あそこ、ちょっと光っとるんよ。
たぶん……コイツの魂のおる場所やと思うわ」
「ちょっとしか光っとらんの？」
「弱まっとるっていうよりは、肉の中に隠されとるってかんじに見えるんよ」
「そこ狙えって？」
「腹引き裂いて脱出するなら一緒やろ？」
ま、言われることは確かにそうなんだけど。
「オレ、おまえと違って魂の場所なんて見えんから。
確実に狙える自信ねぇよ」
そう言うと、隼人はニカッと笑った。
「オレがサポートしたらええんやろ？」
狙う場所の前に立つオレたち。
その姿はまるで、ケーキ入刀の花嫁、花婿のよう。
でも、背後に差し迫るのは黄色い超危険な物体というか液体。
「ほんなら、ええな？」
「ああ」
お互い、手と手をとって。

カッターナイフを握りしめ。
大きく振りかぶって、その一点に狙いを定める。
「うっらぁぁぁぁっっっ！！」

どうかカッターちゃん、折れないで！！
って。
祈るの2回目な気がする。
その祈りが届いたのか。
カッターナイフは折れることなく黒竜の腹の粘膜を突き破り、肉にがっつり突き刺さる。
隼人とともに、渾身の力でカッターで下方向に引き裂いていく。
数十ｃｍは切ったんだけど。
「反応ないやん」
またですか？
サルタなんとかのときもそうだったけど。
どうしてこう、すぐに変化が起きないんだろう？
「やっぱカッターじゃ、確実に切れとらんのとちゃう？」
やっぱカッターじゃって言うなよ。
カッターだって立派な刃物って賛同しただろ？
「もっと強ーい武器とかないの？」
あったら出してるっつーの。
「なぁ、真理矢。
おまえ、レベルいくつの勇者なん？」
そんな隼人の質問にオレは大きくため息をつく。
親友よ。
そんなこと聞かなくても、分かってんじゃねぇの？
「一桁なんやろなぁ……」
分かってるだけに傷つくんすけど。

「おいっ！　真理矢！！　伏せろ！！」
振り返ってオレを見つめた隼人の叫び声とともに押し倒される。
黄色の液体がオレを飲み込もうと蠢いていた。
なんか、液体に怒りすら感じる。
超ヤバい予感。
頼む頼む頼む頼む！！
神様。
仏様。
天照大神様。
頼むからオレと隼人をここから無事に出させてくれ～っ！！
そのとき。
オレと隼人が切り裂いた傷口から光が一筋差し込んだ。
「イケる！！
イケるぜ、隼人！！」
そう。
この光景は2回目。
「ほんま。
遅いわ……」
呆れたように苦笑して隼人は言った。
光の筋は一本、二本と増えていく。
その光が黄色い液体に触れると、それらはジュッと音を立てて蒸発しはじめる。
神様。
仏様。
天照大神様。
とにかく神様と名のつく方々。
感謝しますっ！！

光がオレも隼人も飲み込んで、全体に行き届くころ。
オレはまたしても、その心地の良さに泥酔する。
「真理矢！！
やったな！！」
隼人の声すら遠くに聞こえる。
ああ。
たまんねぇ。
この光。
すっげー気持ち良すぎ。
なんだろう？
天の光ってやつなのか？
神様の後光ってことなのか？
こんなトリップなら。
オレ、何回でもトリップしちゃいますけどね。

聖男子マリア様　☆先立つ不孝をお許しください（1）

なんか、目が回る。
「おいっ！
真理矢、大丈夫か？」
その声でオレは重い瞼を持ち上げる。
「ん～。
もういっぱい……」
気持ち良すぎて、もう一杯？
いやいや、もういっぱいいっぱい。
お代わりは結構です。
「しっかりしろって、たわけが！！」
ビシッと。
良い音が響いた瞬間。
オレの視界に星がきらめく。
「いだい……」
「そら、痛いわっ！！
痛くなるよう、どついたんやから！！」
頭を振って、朦朧とした意識を引き寄せる。
目の前に隼人がいた。
なんか、ちょっと怒ってなぁい？
「緊張感、まるでないんやなぁ。
ま、それがおまえのいいとこなんやけど」
その言葉に、やっとオレは『オレ』を取り戻す。
そうだ。
そうだった。
おいっ、オレ！！
陶酔してる場合じゃねぇじゃん！！
「黒竜は！！」

オレの質問に隼人はニカッと白い歯を見せて笑う。
「消滅」
「マジで！？」

急いで周りを見る。
でっかい黒い竜の姿は跡形もない。
そこにいるのは隼人と、若い天使の軍団と。
「ミカエル様っ！！」
一か所に、オレの視線は釘つけになり。
次の瞬間には走り出していた。
「おいっ、真理矢！！
ちょ……待てって！！」
隼人が急いで呼びとめた。
けど。
オレの足は止まらなかった。
だって、ミカエル様が。
アスタロスに止めを刺そうとしていたから……！！
「待って待って待って待って。
待てってば、ミカエルッ！！」
尻をついた姿勢で天使様を見上げるアスタロスのその胸元に、まさに炎の剣が突き刺さる紙一重のところで。
オレは這うようにして、その場に飛び込んだ。
「なんだ？」
天使様の超不機嫌な声が降ってくる。
そうだよな。
そうだよねぇ。
こんなタイミングで邪魔が入ったら、そりゃ怒るわな。

「邪魔だけはするなと言っただろう？」
剣先は変わらずアスタロスの胸にある。
オレはそれをちらっと盗み見たあと、ミカエル様の顔を見る。
「それ、刺す気？」
オレの質問に、ミカエル様は片眉をぴくりと上げた。
「刺す以外に何がある？」
はい。
ごもっともでございます。
「やめる気は？」
「あるわけがない」
だよね。
相手、悪魔のしかも超お偉いさんっぽいし。
「ちょっと時間くれない？」
「口のきき方が気に喰わない」
どうして、ここでそれなんですか！
「ちょっとアスタロスと話をしたいので、オレに時間をくださいませんか？」
オレの言葉にアスタロスも心底驚いたらしく、マジマジとオレの顔を覗き見た。
「おい、ミカエル。
こいつ、狂ったのか？」
アスタロスの質問にミカエル様は「さぁな」と答え、突きつけていた剣先を引っ込めた。
「どうもありがとうございます」
オレは丁寧に天使様に頭を下げて、怪訝な面持ちのアスタロスに向

き合った。
「なにがしたい？
おまえは何を考えてる？」
「なにがしたいっていうか……あんたって、悪魔（サタン）の使いなんだよな？」
オレの質問に、アスタロスは「だから？」とだけ答えた。
「サタンにこんなくだらない争いやめろって言ってくれません？」
オレの言葉に、しばしの静寂が訪れた後。
「ふはははははは！！」
アスタロスは腹を抱えて大声で笑った。
「ちょ……オレ、マジなんすけど」
アスタロスは笑いをこらえながら「なんなんだ」と言った。
「なんなんだ、コイツは？
なぁ、ミカエル。
おまえ、いったい何考えてるんだ？」
オレではなく、そう天使様に突っ込む。
当の天使様は涼しい顔で「名案だな」と答えた。
「おまえら、どうかしてるよ」
赤茶の髪をかきあげながら、アスタロスはじっとオレと天使様を見つめた。

「仮にそれをサタンに伝えたとして。
サタンがおまえの言うことを聞いて、争いをやめると思うのか？」
そうくると思った。
けど、たとえサタンが言うことを聞かなくてもオレは言っておきたいんだよ。
「誰かがオレの前から消えてなくなるっていうような、悲しいことはもうこれ以上勘弁なんっすよね」

オレの答えに、アスタロスは探るような目つきでオレを見た。
「同情か？
あんな役立たずにおまえ、同情してるのか？」
役立たず？
それってネビのこと？
「役に立ってないだろう？
おまえごときも始末できずに自ら消滅したのだからな。
ま、アレは地獄の土で作った人形。
所詮、使い捨ての駒の一つだからな。
役に立たないのは当然かもしれないなぁ」
使い捨ての駒？
ネビが？
「アレも出来損ないだな。
おまえごときに感化され、悪魔の誇りさえも捨てたのだから」
出来損ない？
誇りを捨てた？
「おい……あんた。
それってネビのことだよな？
あんた、それ全部本気で言ってんだよな？」
アスタロスは鼻先で笑ってから「何が悪い」と続けた。
「アレは私が作ってやった人形だ。
土さえあれば同じモノなどいくらでも作り出せる、ただの駒だ。
それの何が悪い？
何をそんなにおまえは怒っている？
私が作った私の所有物に、なぜそれほどこだわらなければならない？」

「おまえ、なんもわかってねぇ……！！」

沸々とわき上がるこの気持ち。
これは怒り以外の何物でもない。
コイツ、ネビのこと。
なんもわかってねぇ。
分かってねぇって言うよりも、分かる必要性がないと思ってる。
じゃ、なんなんだ？
ネビはなんなんだ？
「じゃぁ、おまえは分かるのか？
出来損ない故に出来損ないの気持ちが理解できるってことかな、マリア？」
出来損ない出来損ないって。
「オレは出来損ないかもしんねーけど。
ネビは違う」
ネビは出来損ないなんかじゃない。
「アイツは……あんたを慕ってた。
それなのに……あんたはなんも思ってねーのかよ！！」
オレの言葉に、アスタロスは首をかしげた。
「所有物にいちいち愛着を持たないといけないかぃ？
持ったところで何の価値がある？」
オレはちらりと天使様を見た。
天使様はそんなオレに「好きにすれば？」とニヤリとほほ笑んだ。
そうだな。
これはやるべきだ。
やるべきだぜ、真理矢！！
ガッ！！
オレは思いっきり振りかぶって、アスタロスの頬をぶん殴った。

聖男子マリア様　☆先立つ不孝をお許しください（2）

避けられる覚悟がないわけじゃなかった。
でも見事！！
クリーンヒット！！
やればできるじゃんっ、オレ！！
地面に座っていたはずのアスタロスは今、仰向けに転がっている。
ゆっくりと体を起こすと、オレとミカエル様を交互に見据え首を振った。
「効いたみたいだな」
天使様は面白いというように、声を押し殺しながら笑う。
それをアスタロスは心底面白くないという目でにらみ返した。
「なんでこんな出来損ないの攻撃が見えないんだ！？」
その言葉に、天使様はさげすむような冷たい視線をアスタロスに送り「バカめ」と言った。
「さっきから人の話を聞いていない愚か者が！
だからおまえの眼は節穴だと言ってやっただろう？
おまえの目の前の新しいマリアは出来損ないではない。
むしろ、より完璧に近い『至高のマリア』だ」
「至高のマリア……だと？」
「男でありながら、女を知る。
人であって、人を超える存在。
言うなれば主の望む『新人類』だ、アスタロス」
その言葉にアスタロスはキッ……とオレを睨みつける。
「あれが……出来損ないのはずのあれが新人類だと？
神が望み、神が創った、神に限りなく近い存在だと！？」
新人類の解説を、オレが聞くよりも前に丁寧に説明してくれるアスタロス。
いやぁ、それはありがたいんだけど。

いま、ものすっごい会話が飛び交っていませんか？
オレが……なんだって？

神に限りなく近い存在とか何とか？
って。
オレ、人超えちゃったの？
「こんな……こんな輩が神の望んだ『新人類』だと……」
いや。
オレは望んでないから、そんなにがっつり睨まんといて！！
「私は認めん！！
絶対に認められん！！」
ギリっと唇を噛むアスタロスの体に何かが巻きついてくるのが見えた。
それは青い舌をチョロチョロのぞかせながら。
まるで愛しい人を包み込むようにゆっくりとアスタロスの上半身に巻きついた。
「死すべきだ。
地獄に行って、サタンの制裁を！！」
アスタロスに巻きついていた大蛇が、大きく口をあけ、威嚇する。
シャーッ！！
というううなり声とともに、大蛇は口から紫とも黒とも言い難い霧のようなものを吐き出した。
これってさ。
喰らったら、かなーりヤバいんじゃないの？
と思った瞬間、オレは温かくて柔らかいものに包みこまれた。
ふと見上げると、そこにはミカエル様がいて。
あの真珠色に輝く翼がオレをその霧から守るように包み込んでいた。
「ミカエル様……！？」

「バカモノが！！
口を開くな！！」
ミカエル様の激が飛んだ時には遅くって。
オレは翼の間を縫って飛んできた霧を、ほんの少しだけ吸い込んでしまった。

苦味があって。
ツンと鼻に刺すような刺激臭があって。
レモンのような強烈な酸っぱさと。
香辛料のような辛味と。
とにかくいろんなもんが混ぜ合わさったような、妙な臭いと味とがした。
「……まずぅっ……！！」
舌の先がピリピリした痛みを発している。
鼻の先がむずかゆい。
「……シン！！」
なんだ？
こんなに近くにいるはずなのに、天使様のお声が遠い。
「……シン！！
テンシン！！
聞こえるか！！
私の声が聞こえるかっ！！」
私って言ったの、ミカエル様？
そんなふうに自分を呼ぶこと、なかったじゃないですか？
それとも、目の前の天使様ってミカエル様じゃないのかな？
「バカテンシン！！
しっかりしろ！！
いいかっ！！

絶対に気を失うな！！」
しっかりしてますよ。
気を失うなって。
だいじょーぶ？
「ふはははは！！
私の毒霧はおまえの力じゃ浄化できないぞ。
マリアは死ぬ。
確実にな」
どっかで悪魔の声がする。
マリアが死ぬ？
それってオレ……のこと？

「おまえには悪いが。
こうなってはもうどうしようもない。
いいか、テンシン。
おまえの思っていることを私は理解している。
おまえの為したいことを、為したいようにしてやりたいとも思っている。
でも、今回は別だ。
おまえの命がかかっている以上、私は全力でこの悪魔を排除する。
例え、それがおまえの意思と反しようともだ」
悪魔、殺しちゃうってこと？
「平和的解決だけではどうすることもできないこともある。
力で持ってねじ伏せねばならない相手もいるということを、おまえは知らなければならない」
天使様。
言ってること、かなり物騒っすよ。
「おまえの意思を貫きたいのなら、強くなれ。

そのために、私は私のすべてをおまえに捧げよう。
たとえ、それが主の意思に背くことになろうと――」
天使様の顔がおぼろけだけれど。
でも、とってもきれいで……
ギュッと力強く抱きしめられたとき。
オレ、なんか至福の喜びってのを感じた気がした。
うっすらとだけど……
「炎の剣も勢いが弱まってるぞ、ミカエル？」
天使様はオレを離すと、スッと立ち上がった。
それから、右手に握っていた炎の剣をひと振りした。
「これで十分だ」
冷やかで、心臓が凍りつきそうな声で天使様は吐き捨てるように相手に告げた。
「私のマリアは殺させない！！」
力強い声が、オレの今にも拍動を停止しそうな心臓に活力を与えそうな勢いで降ってくる。

視界が揺れる。
瞼が重くなる。
身体の感覚がなくて。
指先とか足先が冷たくて。
息が苦しくて。
吐く息も凍てつくようで……
「真理矢！！
しっかりしろ！！」
聞き覚えのある声がする。
ああ、隼人だな。
「だい……じょーぶ……」

ろれつもうまく回らない？
「ミカエル……さま……」
意識の向こうで、悪魔を切り裂く鬼のような天使様がぼんやりと見える。
「だめ……だ……」
だめだよ、ミカエル様。
あんた。
そんな顔。
そんな鬼みたいな顔。
オレ以外に向けちゃダメだ……
だってさ。
だって……
あんた、意外と優しい天使様だろ？

「ダメ……ミカ……」
意識失うなって。
ミカエル様には言われたけれど。
どう頑張っても、オレ。
これ以上は無理っぽい。
ミカエル様、ごめんなさい。
オレ……マリア失格みたいです。
「ミカ……」
この声、届くかな？
ねぇ、ミカエル様。
オレ、頑張ったでしょ？
伸ばした手。
冷たい指先を熱い大きな何かが包み込む。
ああ、あったかい。

そんでもって、すっげー気持ちいいかんじ。
「幸せ……」
遠のく意識のその向こう。
オレを見つめる金色の髪と琥珀の瞳の超絶美形。
なんとも切ない微笑をたたえ、一言だけ呟いた。
「よく頑張ったな、私の真理矢……」
これは夢。
これは幻覚。
これは幻聴？
確認する間もなく、ぷっつりとオレの意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

夢か現（うつつ）か　☆お迎え来ちゃった

ここはどこだろう？
いろんな花が咲き乱れ。
風に花びらが舞っている。
花吹雪がものすごくきれいで。
見ていて飽きないんだよ。
「あれ、川だ……」
どこまで続いているか分んない花畑。
その向こうに大きな川が流れてる。
空から注ぐ七色の光に水面が反射して、キラキラ輝いている。
「キレイだなぁ……」
つられるように足が向く。
なんか、川向こうに人がたーくさんいて、こっちにおいでって言ってるみたい。
しかもさ。
なんか美人のおねーさんや、可愛い女の子ばっかりで。
こっちに来たら、いいことといっぱいあるよーなんて。
なんか思わず期待しちゃう。
川を越えて来い？
川を渡れ？
「おいっ！」
聞きなれた声がオレの背後から降ってくる。
なんだよ、いいとこなのに。
オレ、これから川渡って、あの女の子やおねーさんたちと遊びたいんすけど。
「わざわざ迎えに来てやったんだ。
一緒に来なかったら、この場で半殺しにしてやるぞ」
背筋がぞくりと寒くなる。

この声。
このモノ言い。
もしかして、これってミカエル様？

ダメだ、真理矢！！
振り返ったらダメだ！！
あっちでめっちゃ可愛い女の子と。
めっちゃキレイなおねーさまたちが。
オレのことを可愛がってあげるよ～とか言ってくれてるんだぞ！！
逆ハーレムが川を渡ったそのすぐ向こうに待ってるんだ！！
この場で半殺しにされようと。
あっちにはものすっごい楽しいことが待っているはず！！
なんだけど。
オレはゆっくりと振り向いた。
風に舞う黄金の名古屋巻き。
切れ長の琥珀の瞳。
凛とした唇に、筋の通った鼻。
オレの天使様がそこにいらっしゃる。
しかも、ものすっごい怖ーい笑みを湛えて……
オレはもう一度川向うを見た。
じゃがいもがいっぱい。
手を振ってるね。
「心は決まったな」
にやりと意地の悪い笑みを浮かべる超絶美形。

そうなんだ。

おっそろしく美しい天使様の前では。
川向うの女の子もおねーさまもみんな『じゃがいも』にしか見えなくなる。
ああ。
オレってどうしようもない男だな。
黙って差しのべられた手をオレは握る。
この手に。
この方に。
オレなんかが逆らえるはずもない。
「さぁ、帰るぞ」
天使様は満足そうにほほ笑んだ。
はぁ、帰る？
って。
どこにだろう？
咲き乱れる花々がより強い風によって、さらに高い空へと舞っていく。
キレイだなぁ……
天使様の真珠色の翼の中に包まれながら。
そんなことをぼんやりと考えていた。

夢か現（うつつ）か　☆受難は続くよ、どこまでも（1）

『……や』
誰かがオレを呼んでいるような気がする。
『……や、起きろ』
誰だ？
オレ、寝てるの？
「真理矢！！」
腹の底から響くような声に、オレはびっくりして目を開けた。
二、三度瞬きをする。
そこにあるのは知っている顔ばかりだった。
親父。
おふくろ。
アニキ。
生意気ブラザー。
みんないつになく神妙な面持ちで、オレのことを見降ろしている。
「なに？」
朝なんだろうか？
寝坊でもしたんだろうか？
いや。
寝坊なんかしたって特にどうって言わない人たちだって知ってる。
んじゃ、なにかな？
なんでみんな揃って。
「そんな怖い顔してんだよっ！」

飛び起きるようにして体を起こす。
そんなオレの様子を確認したかったとでもいうように、オレの家族

たちはややぁ……と笑い合ったあと。
オレの頭とか、肩とか、もうそこらへん。
ありとあらゆるところをバンバン叩きだした。
「な……痛ぇって！！
おいっ！！
聞いてんのかよッ！！」
そんなオレの声に耳も貸さない家族たち。
一体、なんだってんだ？
なんか、オレのこと確認しまくってねぇ？
「いいかげんにっ……！！
しろってば！！」
オレが家族たちの手を振り払うように両手を上げると、やっとその手が止まった。
それからまたオレの顔をまじまじと見つめると。
「生きてるな」
と呟いた。
「は？」
なにを言いだすんだって。
オレが生きてる？
なに？
オレ、死んでたの？
「一週間も寝たまんま起きなかったのよ、あんたは……もう、この親不孝者！！」
おふくろがそう言ってオレをギュッと抱きしめた。
一週間も寝たまんま？

オレはおふくろに抱きしめられながら、自分の部屋をぐるりと見回す。

あれ？
天使様はどこ行った？
「あのさ……ミカ……じゃなかったミハエルは、どこ行った？」
その言葉を言った瞬間。
家族たちの顔が凍りついた。
おふくろなんか、オレを抱きしめるのをやめて、突き放すみたいに体を離している。
なんなんだよ、おまえら。
さっきからいったい何なんだよ！！
オレ、全然話見えないんだけど。
家族たちはみんなで円陣を組むようにしてなにやらごにょごにょ相談している。
なんだかなぁ？
なにを相談してんだか？
しばらくの後。
意を決したように家族たちはオレに向きなおり、代表というように親父がオレの前に立って咳払いした。
たくっ。
なんでこんなに勿体つけんだっつーの。
めんどくせーって。
「なぁ、真理矢」
言いだす親父はなにやらモジモジしている。
顔も若干赤みを帯びている。
気持ちワリィ……

「ミハエルくんは……責任をとると言っているんだが……」
責任をとるってなんの？
「おまえを……一生面倒見させてほしいと言っている。

いや、オレはな。
男同士だろうと性別は問わない。
まして、あんなキレイな子は滅多にいるもんじゃないし。
おまえじゃなくても彼になら惹かれる。
その気持ちは分かる」
一生面倒見させてほしい？
男同士？
性別は問わない？
彼に惹かれる？
「だから、おまえの趣味をどうこういうつもりもない。
オレたちはおまえの家族だ！
おまえを全力で応援する」
親父はそう言って立てた親指を突き出して見せた。
おいおいおいっ！！
趣味ってなんだよ！
全力で応援ってなんだよ！！
「それから、おまえが成長するまではこの家で一緒に暮らしたいと言うことで。
今、彼の保護者の方も一緒に見えてるんだ」
オレが一週間も寝ている間に。
あの天使様はこの人たちにどんなことを言ったんだっつーの！！
とにかく、事の真相を把握しないとな。
こんなところでのんびり寝てる場合じゃねぇ！！
起き上がろうとしたとき。
オレの部屋の扉が開き、そこから見たことのある美青年の顔がひょっこりと覗いた。

夢か現（うつつ）か　☆受難は続くよ、どこまでも（2）

「あ。
マリア君、起きた？
どう、調子？」
鮮やかな青の瞳。
白にも見える金の髪。
整った顔立ちに柔和な笑みを乗せ、その人はそう言った。
聞き覚えのある声。
その姿。
オレが意識の中に閉じ込められたときにあった『天使さん』だ。
「なんでここに……！？」
降臨するのってめんどくさいとか言ってなかったっけ？
そんな天使さんの後ろから、さらに続く影あり。
「すみませんが。
ボクたちだけにしてもらえませんか？
ボクの口から彼にきちんと説明したいので……」
知っているもう一つの声。
言わずと知れたあの天使様が、親父の前に進みでて「すみません」
と頭を下げていた。
親父たちはその言葉に素直に従った。
去り際にガンバレとでも言うような、ガッツポーズを残して。
オレ、頭痛い。
どうなってんだよ？
これ、夢？
それとも……
限りなく悪夢に近い現実か。

「悪夢だってさ、ミカちゃん」
そう言って、天使さんはちょっと意地の悪い笑みをミカエル様に向けた。
ミカエル様はムッとした顔を一瞬見せると。
「恩知らずが」
とオレを睨んだ。
って。
恩知らず？
オレ、恩を感じるようなこと。
天使様に何かしてもらったっけ？
「だってさ、ミカちゃん。
せっかく迎えに行ったのにねぇ……」
クスクスクスクス。
天使さんは隣で不機嫌Ｍａｘな天使様を面白そうに見つめながら言った。
せっかく迎えに行ったのに？
って。
あれ？
なんか……覚えがあるような、ないような。
「言うな、ガブリエル。
このバカは性根から叩き直さないと治らない」
なんか今、すごいお名前出なかった？

「ガブリエルゥッッッ～！！」
って。
おいおいおいおいおいおいっ！！
四大天使ってやつだろ？

ミカエル様に。
ガブリエル……様。
オレの周りどうなっちゃうのよ。
「おまえ、名乗らなかったのか？」
「時間なかったし。
こういう反応だろうなって想像できてたし」
クスクスクスクス。
天使さん、もとい。
大天使ガブリエル様は面白そうにオレを見ていた。
一方の大天使様は小さくため息をつくと「バカテンシン」とオレを呼んだ。
「おまえ、きちんと礼を言え」
は？
オレってばミカエル様だけじゃなく、ガブリエル様にまでなにか御迷惑をおかけしてるってこと？
「アスタロスの毒を解いたのは、ここにいるガブリエルだ。
ちなみにおまえがアスタロスの毒など吸い込まなければ、ガブリエルが降臨せずに済んだものを」
なんか、ミカエル様、すっげー怒ってません？

「頭の痛い材料をおまえが増やした」
「やあだなぁ、ミカちゃんったらぁ。
久しぶりに生で会ったのにぃ。
つれなさすぎ」
シクシクと泣き真似をしてみせるガブリエル様。
なんか同じ天使様でも。
本当に種類が違うというか。
毛並みが違うというか。

あれ？
毛並み？
って。
「ガブリエル様って保護者って言ってませんでしたっけ？」
そんなオレの質問に、ガブリエル様は「一応ね」と泣き真似をやめて答えた。
「そういう役どころは、ここでもあっちでも変わんないんだよねぇ。ミカちゃん的には不本意みたいだけど」
ちらりとミカエル様を見る。
ヤベェ。
超目がすわってらっしゃる。
「おまえは人の話が聞けないのか？」
きちんと礼を言ったのに……と言いたげな視線に、オレはゴクリと唾を飲む。
そうだった。
天使様は礼節をすっごく重んじるんでしたっけね。
「あの……毒から救っていただき、ありがとうございます」

「いいえぇ。
ボクは医療班の責任者ですから。
でも、ほんとの意味でキミを救ったのはミカちゃんだから。
ミカちゃんが天界にキミを迎えに行かなかったら。
キミ、三途の河渡ってたもんね」
天界の三途の河？
それを渡ってたらもしかして……
「おまえは死んでいた」
天使様から容赦のない一言が飛んだ。
「北〇の拳」みたいな台詞。

主人公のケン〇ロウみたいな顔と口調で言わないでくださいって！！
「コイツ。
一瞬ためらったんだぞ」
「相手は女の子の山だもん。
年ごろなら仕方ないでしょぉ？」
そのときのことを思い出して、ミカエル様のご機嫌がさらに悪くなる。
もう臨界点突破しそうなかんじなのをなだめるガブリエル様。
ああ、オレ。
どうしてあのときためらっちゃったの！！
殺される。
間違いなく半殺しにされる！！
「まぁまぁ、落ち着いて。
マリア君。
ミカちゃん、ちょっとヤキモチ妬いちゃっただけなんだから。
それよりもほら。
ミカちゃんもきちんと言うことあるでしょ？
これからのボクたちの使命」
ガブリエル様の言葉に、ミカエル様は不快そうな顔をしてみせながらも真面目にこう言った。
「今回、アスタロスを退けることはできたが。
打ち倒すことはできなかった」
「勝ったんじゃないんですか？」
「傷は負わせた。
すぐには回復できないくらいのな。
だが、そのことで今度はもっと厄介なのが動き出すだろう。
それに……悪魔の復活が近いのも確かなことだ」

アスタロスよりももっと厄介って。
どんなヤツよ、それ？
それに悪魔の復活が近いって……
戦争がすぐそこだよって言われてるのと一緒じゃん！！
「前よりかは物わかりがいいみたいだな」
前よりかって……
はっきり言って、今だってこれが現実なんて思いたくないです。
「いいか、テンシン。
サタンの次に厄介なヤツが出てくる前に、おまえをレベルアップさせる」
レベルアップねぇ。
オレ、結構経験値積んだと思うんすけどねぇ。
「経験値は積んだ。
だが、毒を食らったからレベル3から2に格下げ」
ミカエル様は真顔でそう言った。
ちょいちょいちょい！！
ちょっと待ってよ！！
「あれだけ死にそうな思いで戦ってレベル3？
だってネビだって、アスタロスに一撃だって喰らわせたのに！！」
「あのときは一時的におまえの能力が上がったにすぎない。
よく思い出せ。
あのとき、周りの天の軍団も皆パワーアップしていただろうが」
アスタロスやネビロスと戦った時。
そういや、確かにじーさんたちが若返ってたっけ？
「オレの……実力ぢゃないってことっすか？」

夢か現（うつつ）か　☆受難は続くよ、どこまでも（3）

「いやね。
マリア君は相当頑張ってたと思うよ。
ボク的にはレベル５って言いたいんだけど……」
「ガブリエル！！」
「だってさ、ミカちゃん。
可哀相だよ、マリア君。
ヨハネ君がレベル２０だよ。
もう少しおまけしてあげたって……」
隼人がレベル２０！！
ってか。
オレ、どんだけ経験値必要なわけ？
「おまえ、強くなりたくないのか？」
ミカエル様の質問にオレは首を左右に振る。
強くなれるもんなら強くなりたいさ。
守られるのも、死ぬのも嫌だし。
それに、オレはオレの意思ってやつを貫きたい。
「もうマリアの助けはないぞ？
あいつは天に帰ったからな。
それでもやる覚悟、おまえにはあるのか？」
覚悟ねぇ……
そりゃね。
これが夢だったらって思わないって言えばウソになる。
普通の高校生の『天林寺真理矢』に戻れるのなら、それがベストに決まってる。
でも、オレ思い知ったから。
誰かを守るのも。
誰かを助けるのも。

まず、自分が強くなくちゃ出来ないんだって。

「ミカエル様、言ったよな。
自分のしたいことを為したいのなら強くなれって。
オレ、誰も傷つかなくてもいいように。
誰も辛い思いをしないで済むように。
オレの大事な人たちを守れるように強くなりたいって思う。
それだけは譲れない！！」
オレ、どんなことがあっても挫けない。
たぶん……
「おまえらしいな」
ミカエル様がフッとほほ笑む。
っていうか、なんてお優しい顔するんですかっ！！
天使様は男性体。
オレももちろん男性体。
そんなことが吹っ飛びそうになるくらい、極上のほほ笑みだった。
「おまえの覚悟。
私が全力で支えてやる」
ああ。
『私』ってまたおっしゃった。
これが天使様の友愛の印なんだろうな。
本気でオレを信頼し、信用し。
天使様自身もオレに懸けてくれるっていう。
揺るぎない絆。

ミカエル様の顔がゆっくりと近づいてくる。

オレはそのあまりの美しさに目を閉じそうになる。
オレの唇に天使様のそれが触れそうになる寸前で、別の声が飛んでくる。
「コラコラコラ。
ボクがいることを忘れちゃダメだよ、ミカちゃん。
それ以上はこの次までお預け」
オレからミカエル様を引き離すように、ガブリエル様の手が伸びてくる。
いかん。
いかんぞ、真理矢！！
このままじゃ、親父たちの言っていることそのものになりかねない。
って。
「一生面倒見るってどういうこと？」
こんな天使様が一生オレの傍にいたら。
オレ、まともな恋愛絶対にできねー。
っていうか。
させてもらえないに違いない。
「そのときは私が責任を持ってやる」

本気か？
本気なんだろうか？
いや、こんなくそ真面目な顔で「冗談です」って言われても。
納得できないっすけど。
「望むなら、そのときだけは女性体にもなってやろう」
恐ろしいほど怖いほほ笑みを湛え、ミカエル様は告げられた。
オレ、絶対にまともな恋愛できなさそう。
窓の外を見る。

高い、高い空。
青く無限に広がる空。
いつもと変わらない、いつもの風景。
平凡で、退屈だったいつもの景色の中で、オレだけが変わっていく。
普通の高校生には戻れない。
それでも。
この当たり前の景色だけは絶対に失っちゃいけない。
この先にどんな苦難や受難が待っていたとしても。
それを守れるのがオレ。
それを守るのが男として生まれたオレの一生の仕事なんだと思うから。
「真理矢ぁ、起きとるかぁ？」
部屋の向こうから、悪友の声がする。
その後ろからガヤガヤと聞きなれたじーさんたちの声もする。
「ああ、もうだいじょーぶ」
普通のような、普通じゃない日常がもうすぐそこにめぐり始めている。
そう。
これはまだ始まり。
スタートライン。
ここから先はオレがオレ自身の手で作っていくもの。
聖母マリアの生れ変りとしてではなく。
一人の人間。
天林寺真理矢として、オレが築いていくもの。

天に帰ったマリア様。
どうか、オレのこと、見守っていてください。
オレ、あなたみたいにできないけど。

オレはオレで頑張ってみますから。
聖母ならぬ。
聖男子マリアとして。
『がんばって……』
どこか遠くでそんな声が聞こえたような気がした瞬間。
オレは強く抱きしめられる。
「すべてはおまえの望むままにだ、テンシン……」
囁いた天使様の胸の中。
オレは一つだけ後悔をする。
聞くに聞けない質問が頭の中をよぎっていく。
『神の子を産め』なんて言われませんよねぇ？
言われないことを切実に願いつつ……
オレは抱きしめられた天使様の胸の中で。
天使様に聞かれないように。
小さくため息をついた。

（ＥＮＤ）

夢か現（うつつ）か　☆受難は続くよ、どこまでも（3）（後書き）

完結です。
あんなラストなの。
って思われた方、すっごく多いと思います。
私自身、いろいろラストは悩みました。
この先出てくるであろう悪魔ちゃんをチラ見させちゃおうかなぁとか。
オダケンのその後とかも書こうかなぁとか。
悩んだ末のラストです。
納得いかない方、はっきりおっしゃってくださいね。
で。
一応完結したものの。
これ、愛着あるんでシリーズにしてみようかなとも思ってます。
でも、今回ノープランで書きすすめていて。
かなり限界を感じたので、次回からはきちんとプロット練ります。
シリーズ2作目書き始めたよってお知らせします。
とりあえず、2作目行く前にミカ視点の番外ですね。
最後になりましたが。
ここまで応援してくださった温かい読者様に心から感謝しております m（__）m
ありがとうございました。
また、このシリーズでお会いできることを楽しみにしつつ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4398s/

聖男子マリア様　～極悪天使と悪魔の使い～

2011年5月20日12時38分発行